

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第11冊

名生館遺跡 VI

宮城県多賀城跡調査研究所

表紙写真

合戦原瓦窯

S R 7 窯跡 (南から)

序 文

多賀城をより良く理解するには、それ自体を十分調査することは言うに及ばず密接に関わる遺跡をもあわせて調査解明していく必要がある。当研究所では多賀城跡調査研究指導委員会や文化庁の指導を得て、12年前から「多賀城関連遺跡調査」を実施してきている。最初の6年間は桃生城跡と伊治城跡をてがけ、一応の成果を挙げることが出来た。その後は専らここに報告する古川市東大崎の名生館遺跡を発掘調査してきた。本年はそれを継続するとともに名生館遺跡に瓦を供給したとみられる、岩出山町合戦原窯跡の発掘調査をも実施した。これらの調査によって、名生館遺跡は7世紀後半から10世紀にかけての官衙跡であることが判明し、この方面の研究にある程度の成果を提供できたものと考えている。とりわけ、大宝令施行以前に本格的な官衙が設置されていたということは、多賀城以前の東北古代史を解明する上で、やや大きな問題を提起出来たかと考えている。

今般、名生館遺跡は国の史跡に指定されることになった。我々の調査成果が本遺跡の保存に幾分かでも役立ったものと喜びにたえない。それに加えて、61年度以降は古川市が調査を引き継いで行くことも決まった。遺跡所在の自治体が直接ことにあたってこそ、遺跡の保存・活用の実が上がることは自明のことである。その点で、この度の市当局の決定はまさに英断であって、今後の進展に大いなる期待を抱いている。

一方合戦原窯跡の調査については、約30メートルの範囲に7基の窯跡を検出し、名生館遺跡に付属する伏見廃寺跡や中新田町菜切谷廃寺跡の瓦を生産していたことを把握することが出来た。

最後に、ご懇切な指導を頂いた多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生、文化庁、古川市、岩出山町、発掘調査地を快く提供下さった地権者の方々、直接発掘調査に当たられた地元の作業員の方々に対し厚く感謝の意を表したい。

昭和61年3月

宮城県多賀城跡調査研究所

所 長 佐々木 光 雄

目 次

序 文	
I. 多賀城関連遺跡の調査計画	1
II. 名生館遺跡第6次調査	2
1. 調査要項	2
2. 遺跡の概要	2
3. 調査経過	8
4. 発見された遺構と遺物	9
(1) 北 区	9
(2) 中 区	13
(3) 南 区	21
(4) 西 区	28
5. ま と め	29
III. 合戦原瓦窯跡発掘調査	30
1. 調査要項	30
2. 遺跡の概要	30
3. 調査経過	33
4. 発見された遺構と遺物	37
5. 考 察	57
資料紹介「合戦原瓦窯跡採集の樹枝文軒丸瓦」	63

例 言

1. 名生館遺跡の地区割りは城内地区にある三角点を発掘基準原点(0.0)とする直角座標で設定したものである。発掘基準線の北は第X系座標北と一致する。本書で用いた方位はすべてこの基準線をもとに計測したものである。
2. 合戦原瓦窯跡では第X系座標(X = -150925.250、Y = 1301.030、H = 127.255)を発掘基準原点とした。発掘基準線の北は第X系座標北より北で29°57'05" 東へ偏している。
3. 資料紹介の「合戦原瓦窯跡採集の樹枝文軒丸瓦」については、岩出山中学校教諭遠藤智一氏からの御寄稿を頂き収録した。
4. 本書の作成にあたっては、当研究所の佐々木光雄、進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、丹羽 茂、古川雅清、後藤秀一、佐藤和彦が協議、検討を行い、執筆・編集には白鳥良一と後藤秀一があたった。また、これらの作業を平山三津子、和田容子、佐藤あさ子、田仲紀美子、多田玲子、伊丹早苗、馬場ひろみ、浅野浩美、岡田富子が援けた。

I. 多賀城関連遺跡の調査計画

当研究所では特別史跡多賀城跡の調査・研究と並行して、古代の多賀城に関連する宮城県内の城柵・官衙遺跡についても継続的な調査・研究を実施している。これは、多賀城を中心として展開されたこの地方の古代史を多角的に把握し、多賀城をその歴史的背景の中に正しく位置付けることを目的とするものである。

昭和49年度からの第1次5ヶ年計画では桃生郡河北町の桃生城跡と栗原郡築館町の伊治城跡、昭和54年度からの第2次5ヶ年計画では伊治城跡と古川市の名生館遺跡の発掘調査を実施し、多くの成果を収めた。

昭和59年からは第3次5ヶ年計画に入り、昭和58年6月28日に多賀城跡調査研究指導委員会で承認された計画(表1)により調査を進めている。昨年度までの5年間にわたる発掘調査により、名生館遺跡は古代の玉造郡に関連する重要な官衙跡であることが判明した。文化庁、宮城県教育委員会、古川市教育委員会と協議した結果、本遺跡を史跡に指定して永く後世に伝えてゆく方向が得られた。そこで第3次5ヶ年計画の第2年次にあたり、当研究所としては最後の調査となる本年度は、名生館遺跡の史跡指定にむけて遺構の分布状況と遺跡範囲の把握を目的とした発掘調査を実施するとともに、これと並行してこの官衙に瓦を供給したと推定される岩出山町合戦原瓦窯跡の発掘調査も行なった(多賀城関連遺跡調査費6,300千円、うち50%国庫補助)。

	年 度	遺 跡 名	事 業	内 容	報 告 書
第 一 次 5 ヶ 年 計 画	49年度	桃 生 城 跡	地形図作成・第1次発掘調査	内郭地区および外郭線の調査	「桃生城跡Ⅰ」
	50年度	桃 生 城 跡	第2次発掘調査	同 上	「桃生城跡Ⅱ」
	51年度	伊 治 城 跡	地 形 図 作 成		
	52年度	伊 治 城 跡	第1次発掘調査	外郭線および郭内の調査	「伊治城跡Ⅰ」
	53年度	伊 治 城 跡	第2次発掘調査	郭 内 の 調 査	「伊治城跡Ⅱ」
第 二 次 5 ヶ 年 計 画	54年度	伊 治 城 跡	第3次発掘調査	同 上	「伊治城跡Ⅲ」
	55年度	名生館遺跡	地形図作成・第1次発掘調査	城内地区の調査	「名生館遺跡Ⅰ」
	56年度	名生館遺跡	第2次発掘調査	同 上	「名生館遺跡Ⅱ」
	57年度	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	「名生館遺跡Ⅲ」
	58年度	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	「名生館遺跡Ⅳ」
第 三 次 5 ヶ 年 計 画	59年度	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	「名生館遺跡Ⅴ」
	60年度	名生館遺跡	第6次発掘調査	範囲確認調査・関連窯跡調査	本 書
	61年度	東 山 遺 跡	地形図作成・第1次発掘調査	遺構分布確認調査	
	62年度	桃 生 城 跡	第3次発掘調査	政庁地区の調査	
	63年度	桃 生 城 跡	第4次発掘調査	外郭北方地区の調査	

※昭和60年度までは実績、昭和61年度以降は予定。

表1 多賀城関連遺跡調査計画

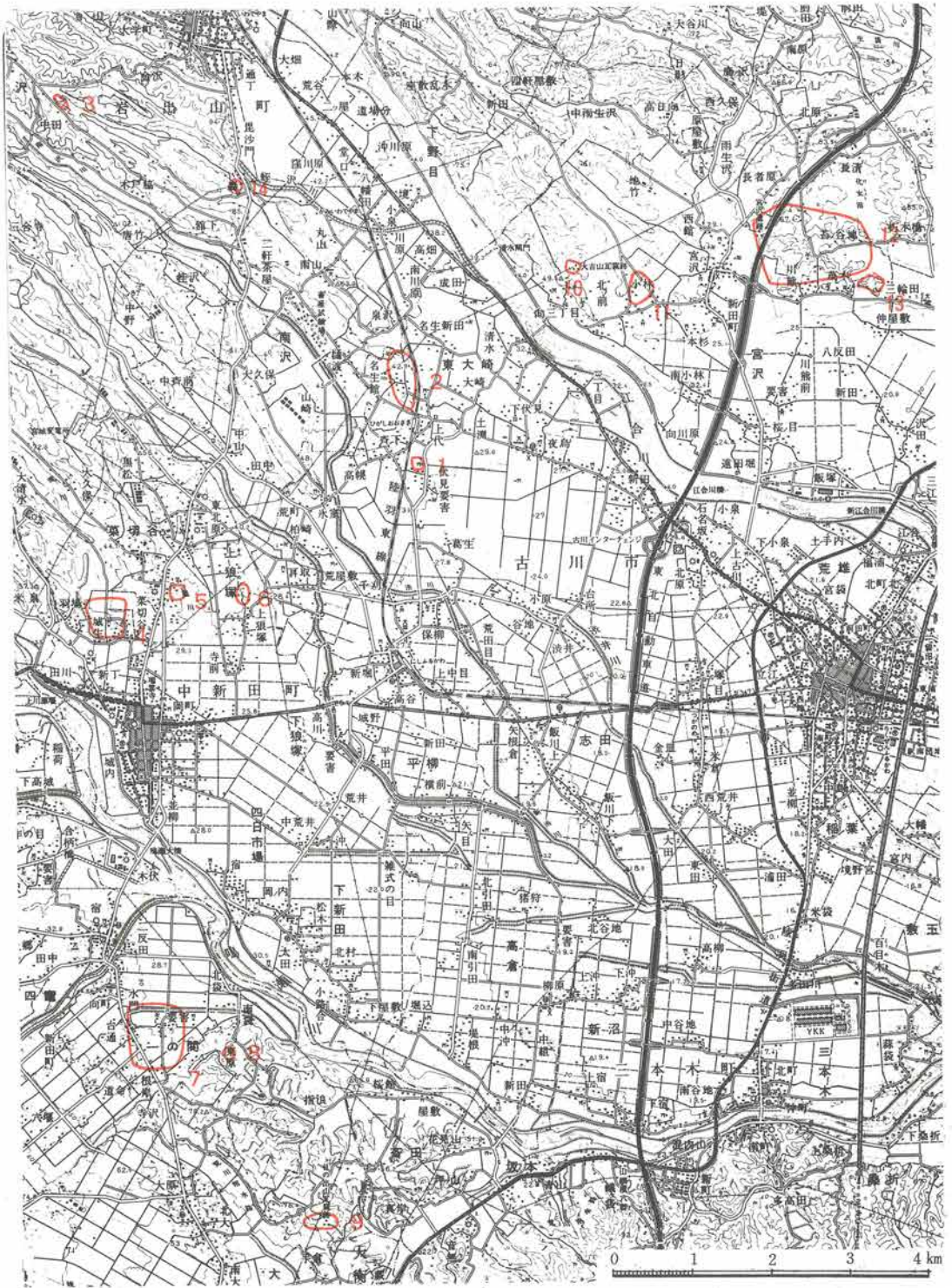
II. 名生館遺跡第6次調査

1. 調査要項

1. 遺跡名 名生館遺跡
2. 所在地 宮城県古川市大崎字名生館、城内、名生小館、名生北館、弥栄
3. 調査主体 宮城県教育委員会（教育長 関本朝吉）
4. 調査共催 古川市教育委員会（教育長 千田清志）
5. 調査期間 [城 内 地 区] 昭和60年7月8日～8月6日
[小野柄堂地区] 昭和60年11月5日～11月30日
6. 調査顧問 多賀城跡調査研究指導委員会委員長・東北大学名誉教授 伊東信雄
7. 調査担当者 宮城県多賀城跡調査研究所長 佐々木光雄
8. 調査員 宮城県多賀城跡調査研究所：進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、佐藤則之、佐藤和彦
東北歴史資料館：桑原滋郎
宮城学院大学教授：工藤雅樹、石巻高等学校教諭：三宅宗議
古川市教育委員会社会教育課：石川芳男、藤村良平、柴原一雄
9. 調査参加者 万城目喜一、二郷 等、笠原良夫、大場松治、大場清志、佐々木秀一、大場正志、佐々木善右エ門、笠原良治、加藤利男、中村鉄夫、都築庄助、笠原ましゑ、菅原たよ、大場とよ子、鹿野田洋子、佐々木はつえ、鹿野千恵子、阿辺トシ子、笠原すみ子、笠原みよ子、福田政子、佐々木しげ子
10. 調査協力者 笠原良夫、笠原 孝、加藤利男、大場 豊、渡辺弥一、伊藤 東、大場瑞穂、門脇俊雄、門脇 寿、大場松治、大場正志、鹿野田善美、鹿野田忠雄

2. 遺跡の概要

名生館遺跡は古川市大崎字名生館・城内・名生北館・名生小野柄堂・名生上代・名生小館・弥栄に所在する。遺跡は多賀城跡の北約30kmに位置し、北の江合川と南の鳴瀬川の両河川の流域に広がる笥岳、玉造、大松沢の各丘陵に囲まれた大崎平野の北西端にあたる。



第Ⅱ図 名生館遺跡位置図

- | | | | | |
|-------------|----------|-----------|------------|-----------|
| 1. 名生館遺跡 | 2. 伏見廃寺跡 | 3. 合戦原竃跡 | 4. 城生遺跡 | 5. 菜切谷廃寺跡 |
| 6. 熊野堂遺跡 | 7. 一の関遺跡 | 8. 東原竃跡 | 9. 日の出山竃跡 | 10. 大吉山竃跡 |
| 11. 小林杉ノ下遺跡 | 12. 宮沢遺跡 | 13. 三輪田遺跡 | 14. 軽石山瓦竃跡 | |

また、江合川の南岸には標高約40m、沖積地との比高約10mの火砕流台地が北西から南東に延びており、遺跡はこの台地の東南端付近に立地している。本遺跡は、北と東は浸蝕崖によって画され、南は小館地区の南側に東から入り込む小さな沢によって限られている。一方、西側は台地上の平坦面が続き、遺跡がどこまで延びるのかは地形的には判然としない。こういった状況から、本遺跡の範囲は南北約1,000m、東西は遺物の散布状況からみて少なくとも700mほどであると思われる。遺跡地は現在大部分が畑地として利用されており、一部は水田や宅地となっている。

この地区は現在古川市に属しているが、「和名類聚抄」の玉造郡俯見郷にあたりとみられる「伏見」が本遺跡の南約1kmにあることから、古代にはこの地区が玉造郡に属していたことはほぼ間違いがないとされている。

遺跡内には古代の土器や瓦が散布しているのをはじめ、中世の土塁や空堀が遺存している。このうち、古代の瓦の散布は城内地区と小館地区の2か所に集中している。両地点から出土する瓦は文様や製作技法に違いがみられ、城内地区の瓦が山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦であるのに対し、小館地区の瓦は多賀城創建期の重弁蓮花文軒丸瓦である。また、本遺跡は中世に奥州探題大崎氏の居城である名生館が築かれた場所でもあり、土塁や空堀などが残る他、「名生館」「城内」「小館」「北館」「内館」などの地名に当時の名残をとどめている。なお、内館地区からは多量の炭化米が採集されており、倉庫等の存在が予想された。

本遺跡は古くから研究者に注目されてきている。最初に文献に名がみえるのは、寛政10年(1798)に里見藤右エ門が著した「封内土産考」である。里見は本遺跡出土の布目瓦に注目し、その製作法について鋭い指摘をしたが、瓦は中世大崎氏に関わるものとしている(註1)。次いで明治年間には、本遺跡出土の瓦は古代のものとみられるようになり、原秀四郎の「寺院は瓦葺き」という当時の定説に従って、本遺跡を寺院跡とした(註2)。大正年間には、鈴木省三はこの地区を踏査し、「玉造軍団跡」に擬定した。鈴木はその中心施設を伏見宝龍社(伏見廃寺跡)とし、本遺跡をその付属施設跡とみた(註3)。戦後になると、当時古川工業高校教師であった佐々木忠雄による踏査により、本遺跡の瓦が伏見廃寺跡の瓦と同種のものであることが判明した。昭和45年に佐々木茂楨は伏見廃寺跡の発掘調査を行い、金堂跡と推定される基壇とその周辺から多量の瓦を発見し、この寺跡を俯見公の氏寺と推定し、瓦の年代を平安時代と位置づけた。さらに本遺跡を、同種の瓦が出土することから「玉造塞」に比定した(註4)。その後、進藤秋輝により伏見廃寺跡出土瓦の再検討がなされ、この瓦が様式的・技法的に多賀城の創建瓦より遡るものであることが推定された(註5)。さらに、本遺跡の小館地区からは、土取り工事の際多量の多賀城創建瓦が採集され、本遺跡

名生館遺跡地形図



第2図 名生館遺跡地形図

第1~5次調査区

第6次調査区

と奈良時代の玉造柵との関係が一段と注目されてきた。

ところで、本遺跡の周辺には多賀城と密接な関連をもつ城柵官衙遺跡、寺院跡、生産遺跡が数多く存在する。

本遺跡は南約1kmには前述の伏見廃寺跡があり、基壇と多数の瓦などが発見されている(註4)。また、江合川を挟んで対岸の東方約5kmには奈良時代後半から平安時代にかけての城柵官衙遺跡である宮沢遺跡がある。調査の結果、外郭線は時期が異なる築地や土塁であり、規模は東西約1,400m、南北約850mで平面形は不整形をなすことが判明している(註6)。この宮沢遺跡の東南隅に近接して三輪田遺跡があり、ロクロ挽き重弧文や偏行唐草文の軒平瓦が出土している(註7)。一方、本遺跡の南西約5kmには城生遺跡とその付属寺院である菜切谷廃寺跡がある。城生遺跡は一辺約350mの方形であり、周囲は築地によって区画されている(註8)。また菜切谷廃寺跡では金堂とみられる東西12.7m、南北10.8mの乱石積基壇と多量の多賀城創建期の瓦が発見されている(註9)。さらに、本遺跡の南約9kmには、規模・基壇化粧等で菜切谷廃寺金堂と酷似する基壇をはじめ、多数の掘立柱建物跡が検出された色麻町一の関遺跡がある(註10)。

また、この地域の丘陵には多賀城創建期の瓦窯が集中して営まれている。本遺跡の東約2km、江合川の対岸には大吉山窯跡群があり、南約10kmには日の出山窯跡群がある(註11)。

註1. 里見藤右エ門「封内土産考」『仙台叢書』第3巻 復刻版 1981

註2. 原秀四郎「玉造塞址につきて」『史学雑誌』第19巻18号 1903

註3. 鈴木省三「玉造軍団及名生城」『宮城県史跡名勝天然記念物調査報告書第二輯』
1924

註4. 佐々木茂楨「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第56巻3号 1971

註5. 進藤秋輝「東北地方の平瓦桶型作り技法について」『東北考古学の諸問題』 1976

註6. 宮城県教育委員会「宮沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』 1980

註7. 古川市教育委員会『三輪田遺跡』古川市文化財調査報告書第4集 1980

註8. 中新田町教育委員会『城生遺跡』中新田町文化財調査報告書第1・2・4～6集
1978～1982

註9. 伊東信雄『菜切谷廃寺跡』宮城県文化財調査報告書第2集 1956

註10. 宮城県教育委員会「一の関遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)』
1977

註11. 宮城県教育委員会『日の出山窯跡群』宮城県文化財調査報告書第22集 1970

3. 調査経過

当研究所では昭和55年から昨年度まで5年間にわたって古川市に所在する名生館遺跡の発掘調査を継続してきた。城内、小館、内館の3地区を対象として調査を行なった結果、いずれの地区でも古代の遺構が多数検出され、本遺跡が古代玉造郡内で中心的な役割を果たしていた官衙跡であることが判明するとともに、中世の大崎氏の居城である名生城に関わる土塁や大溝も各所で発見された。これらの成果に基づき文化庁、県教委、古川市と協議した結果、本遺跡を国の史跡にして永く保存してゆく方針が得られた。そのため本年度の第6次調査は、遺構の分布状況と遺跡の範囲を把握することを目的として、城内地区とその西に位置する小野柄堂地区の調査を行なうこととした(第2図)。

発掘調査は対象地の作物などの事情から城内地区と小野柄堂地区の調査時期を分けて行なった。

城内地区の調査は7月8日～8月6日に、北区、中区、南区の3箇所に調査区を設定して実施した。このうち、北区と中区は第1・2・5次調査で検出していた遺構群の分布が北および西にどこまで延びているかを確認するための調査区であり、南区は城内地区と小館地区の間にも遺構が存在するかどうかを検討するための調査区である。調査の目的が遺構の分布状況を把握することにあるため、調査区はいずれも6m幅で東西に長いトレンチ状に設定した(第3図)。

北区は南北6m、東西78mの調査区で、7月9日に東端部から表土剥ぎを開始した。その結果表土下の地山面において、東半部では古代と推定されるS I 387 竪穴住居跡や埋土に10世紀前半頃と考えられている灰白色火山灰を含むS D 382 溝、近世遺構とみられるS K 383～386 土壌群、西半部では中世とみられるS D 380 大溝などが検出された。これらの遺構ではS D 382 溝の断ち割り調査とS K 386 土壌の精査を実施し、他の遺構については平面確認のみにとどめた。

中区は南北6m、東西41mの調査区で、7月15日に東端部から表土剥ぎを開始した。その結果、表土下の地山面で古代とみられるS I 395～397 竪穴住居跡、S A 398・399 柱列、S D 388・389 溝、中世以降とみられるS E 393・394 井戸、S D 403 溝など多数の遺構が検出された。これらの遺構ではS I 395・397 住居跡、S E 394 井戸の精査とS D 388・389 溝の断ち割り調査を実施し、他の遺構については平面確認のみにとどめた。

南区は南北6m、東西32mの調査区で、7月17日に東端部から表土剥ぎを開始した。その結果、調査区南端部の表土下で中世頃かとみられるS D 427・428 東西溝が検出された。また北半部の地山面ではこれらの溝より古い竪穴住居跡や土壌が多数重複しており、古墳

時代のS I 431・433住居跡やS K 430土壌、古代のS I 432・434～439住居跡、近世以降とみられるS K 429土壌など多数の遺構が検出された。これらの遺構ではS I 431～436・439住居跡、S K 430土壌の精査とS D 427・428溝の断ち割り調査を実施した。住居跡についてはいずれも部分的な精査にとどまった。

城内地区で検出された以上の遺構について、7月15日から北地区、中地区、南地区の順に遣り方設定、平面実測、写真撮影、埋め戻し作業などを行い、8月6日に一切の調査を終了した。この間、7月25日に調査の成果と本遺跡の重要性について報道関係機関に発表するとともに、7月27日には一般を対象として現地説明会を開催した。また、7月28日には浄泉寺を会場として地権者説明会を開き、史跡指定に対する協力をもとめた。

小野柄堂地区の西区の調査は、対象地の稲刈りの終了を待って11月5日～11月30日に南北6m、東西69mの調査区を設定して実施した。この調査区は遺構群の分布が西にどこまで延びているかを確認するために設定した調査区で、11月7日に東端部から表土剥ぎを開始した。その結果、表土下の地山面でS D 441～448溝、S K 449～454土壌などが検出された。このうち、調査区西端のS D 448溝が中世の名生城にかかわる大溝と考えられるほかはいずれも近世以降のものとみられ、古代の遺構は全く検出されなかった。

第6次調査の発掘面積は城内地区が約900㎡、小野柄堂地区が約400㎡である。

4. 発見された遺構と遺物

今回の調査は、遺構の分布状況と遺跡範囲の把握を目的とした調査であり、城内地区とその西の小野柄堂地区を対象に実施した。調査は城内地区に3箇所(北区・中区・南区)、小野柄堂地区に1箇所(西区)、南北6m幅の東西に長い調査区を設定して行った。城内地区の北・中区と小野柄堂地区の西区は遺構の西方への広がりを把握するために設定した調査区であり、また、城内地区の南区は城内・小館両地区の間の遺構の分布状況を把握するための調査区である。検出した遺構については一部を除き平面確認だけにとどめ、精査は行わなかった。以下城内地区の北区、中区、南区、小野柄堂地区の西区の順に調査の概要を説明する。

(1) 北 区 (第3図)

検出したおもな遺構には竖穴住居跡1、土壌4、溝3などがある。これらはいずれも地山面で検出している。他にいくつかの土壌・溝を検出しているが、出土遺物などからいず

れも近世以降とみられるものである。

a. 竪穴住居跡

〔S I 387 住居跡〕

調査区東端部付近で検出した竪穴住居跡であり、南東隅は一部調査区外まで延びる。残存状況が極めて悪く、床面も削平されて残存しないが、掘り方により竪穴住居跡と推定した。近世以降の溝に一部壊されている。掘り方の平面形はほぼ方形をなし、規模は北東辺で約3.4m、北西辺で約2.7mである。埋土は黄褐色地山ブロックを多量に含む極暗褐色土であるが、精査していないため掘り方の深さや層の堆積状況は不明である。支柱穴・カマドは検出できなかったが、壁の各コーナー付近で長径約0.4m、短径約0.3mの楕円形をなす壁柱穴を4個検出している。壁柱穴の埋土は地山ブロックを含む極暗褐色土である。柱痕跡は3箇所を確認しており、径約0.1mほどで、埋まり土は地山細粒を含む黒褐色土である。住居の方向は北東辺で測るとW37°Nとなる。遺物は出土していない。

b. 土 壙

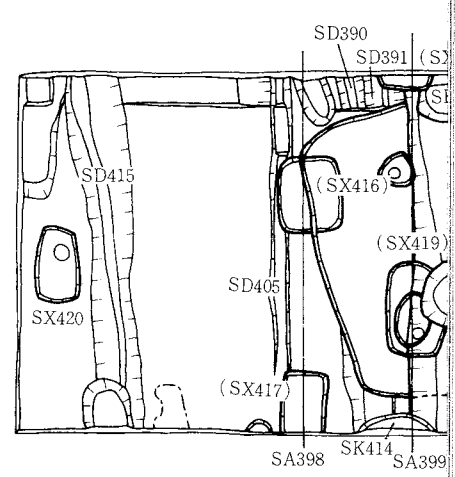
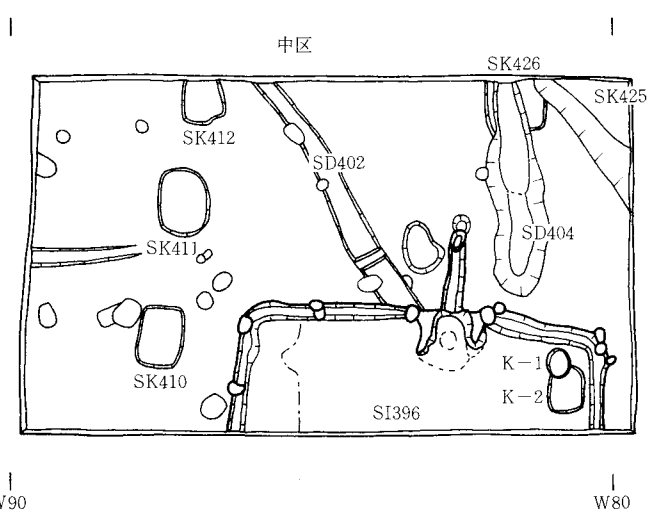
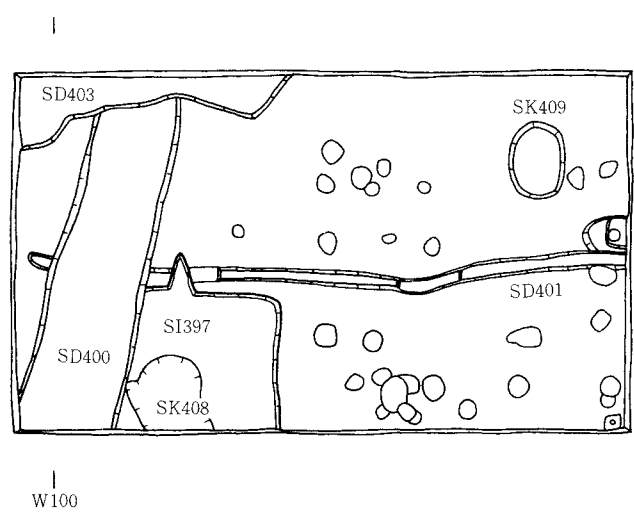
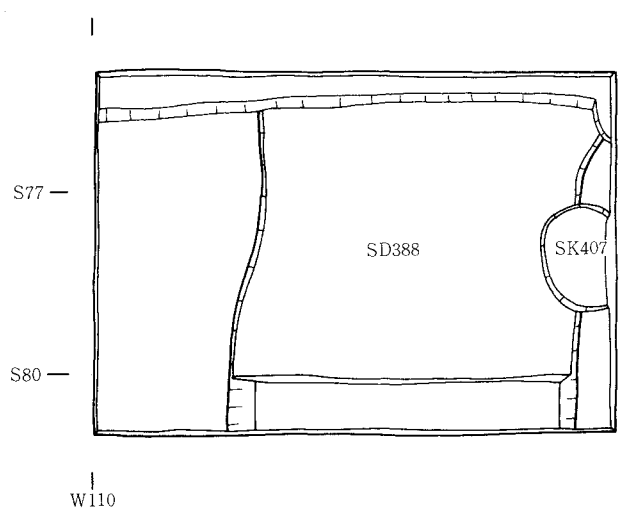
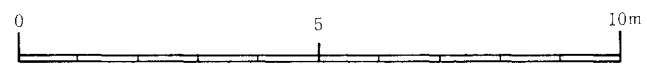
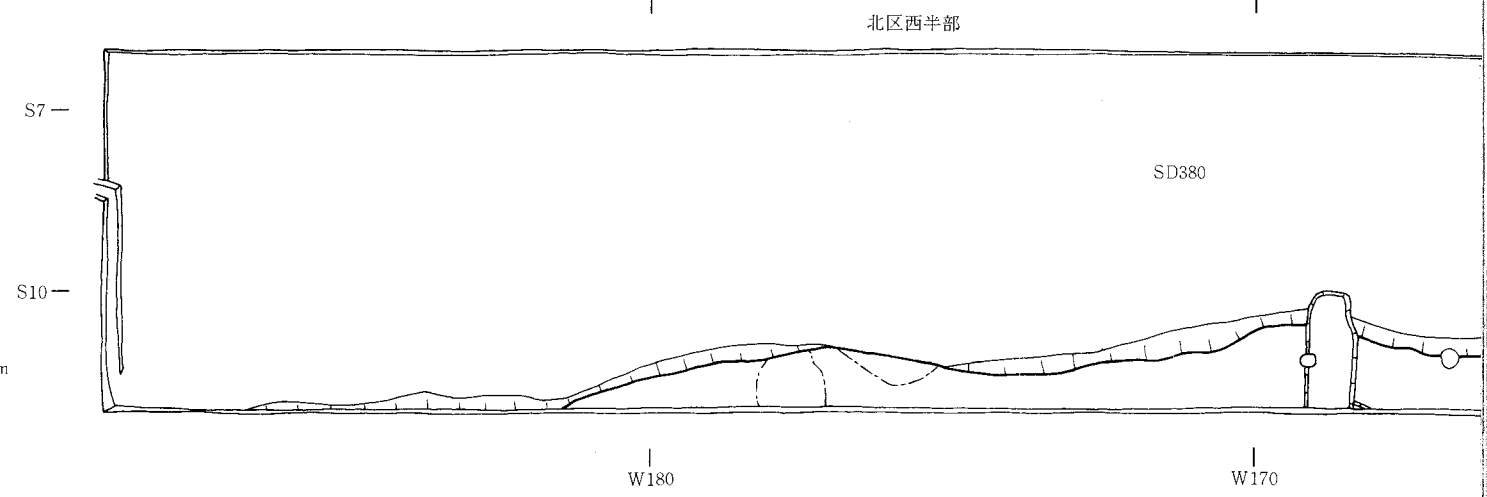
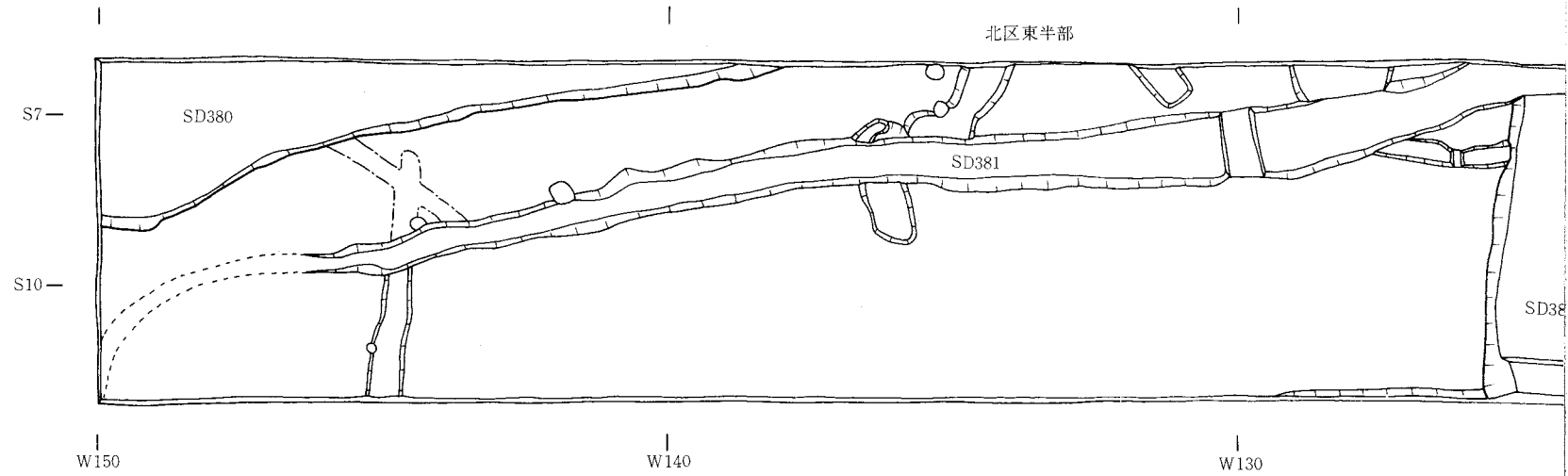
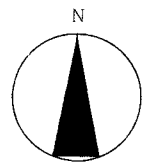
〔S K 383～386 土壙〕

いずれも調査区東端部付近で検出した土壙であり、他遺構との重複はない。このうち、精査を行ったS K 386は北東部が外側へ張り出す不整形をなす土壙で、規模は南北約2.0m、東西約1.8mで、深さは約0.4mである。堆積土は1層で、大・小の地山ブロックを多量に含む柔らかい極暗褐色土である。遺物は近世遺構とみられる白磁の小破片が1点出土している。他の土壙の平面形はS K 383・384がほぼ隅丸方形、S K 385がほぼ円形をなし、規模はS K 383が長軸(東西)約1.9m、短軸(南北)約1.5m、S K 384が長軸(東西)約1.8m、短軸(南北)約1.3m、S K 385が直径約1.4mである。いずれも平面確認にとどめたため、深さは不明である。埋土はほぼ共通しており、S K 386と同様に大・小の地山ブロックを多量に含む柔らかい暗褐色土である。遺物は出土していない。

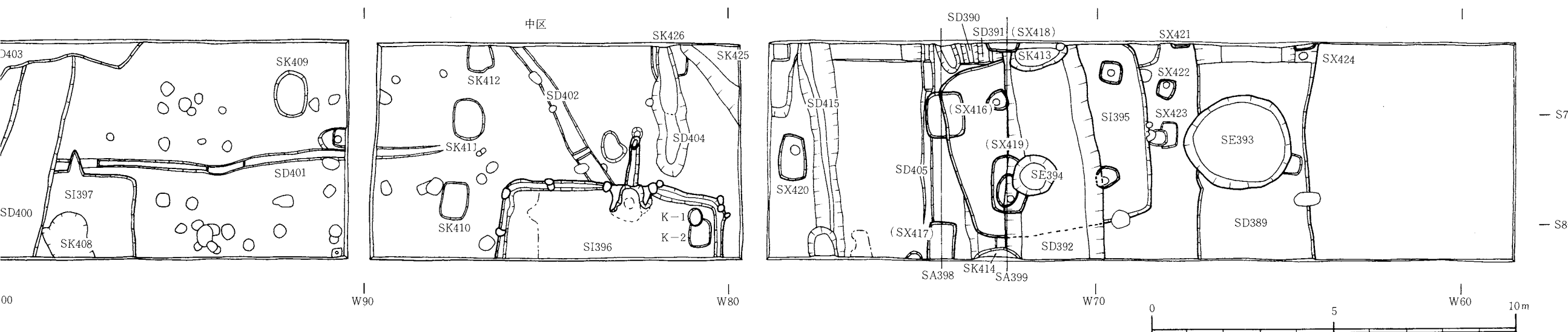
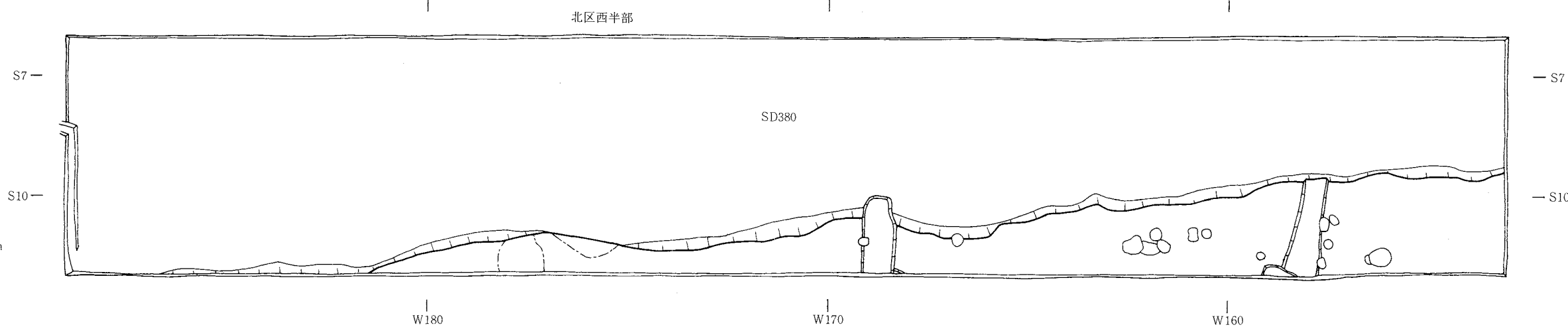
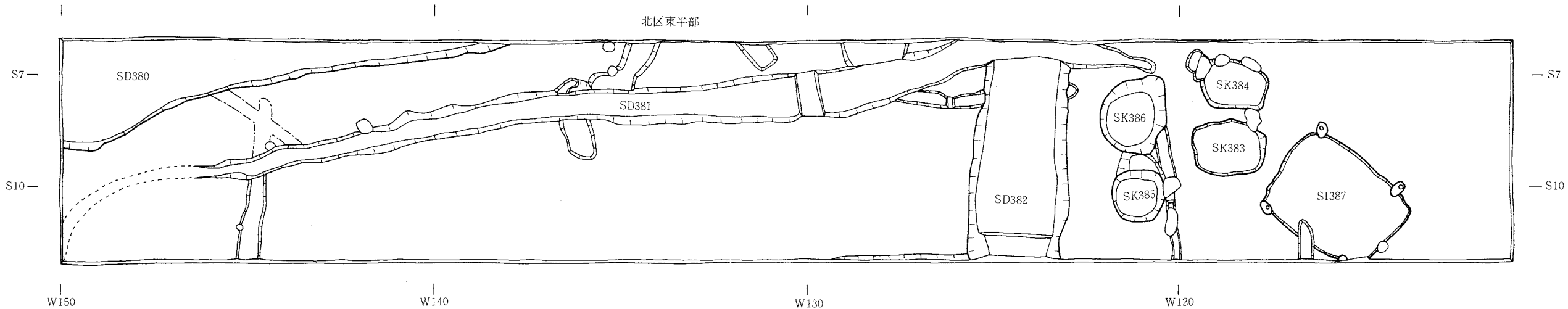
c. 溝

〔S D 382 溝〕

調査区東半部で検出した南北溝である。調査区の北端でS D 381 溝と重複し、これより古い。調査区の南端で一部断ち割り調査を実施している。規模は上幅約2.5m、底幅約1.5m、深さ約0.6mで断面形は逆台形をなす。方向は西肩で測るとN5°Eとなる。堆積層は8層にわけられ、いずれも自然堆積層とみられる。第1層は地山細粒を少量含む黒褐色土、第2層は10世紀前半に降下した灰白色火山灰層で、上層のaは流入した火山灰層、下層のbは降下した一次堆積層、第3層は均質な極暗褐色土、第4・5・6層は地山細粒を含む暗褐色土・極暗褐色土・黒褐色土、第7・8層は地山ブロックや細粒を含む極暗褐色土で



第3図 北区・中区検出遺構全体図



第3図 北区・中区検出遺構全体図

ある。遺物は出土していない。

本溝は規模・形状からみて官衙の区画溝の可能性はある。

〔S D 380 大溝〕

調査区中央部から西端にかけて長さ約50mにわたって検出した東西大溝で、東西両端はさらに調査区外へ延びる。規模は上幅が6 m以上であり、平面確認だけにとどめたため、深さや層の堆積状況は不明である。堆積土は地山大・小ブロックや細粒を少量含む柔らかい極暗褐色土・暗褐色土である。遺物は須恵器蓋の破片1点と土師器甕の体部破片が1点出土している。

この大溝は、第1・2次調査で検出したS D 50・106大溝とほぼ同じ方向で延びる大溝であることから、中世大崎氏の居城である名生城に関連するものとみられる。なお本大溝はS D 106大溝の約70m北側に位置している。

以上述べた北区の遺構の年代を推定すると次のようになる。

まずS I 387住居跡とS D 382溝は古代の遺構とみられるものであり、S D 382は灰白色火山灰層の堆積状況から10世紀前半頃と推定される。S I 387については遺物が出土していないため年代を限定することはできない。またS D 380大溝は中世とみられるものである。S K 386土壌は出土した白磁により近世以降とみられ、規模や堆積土が類似するS K 383～385土壌も同様と考えられる。

(2) 中 区 (第3図)

検出したおもな遺構には一本柱列2、竪穴住居跡3、井戸2、溝13、土壌10、柱穴5などがある。これらはいずれも地山面で検出している。以下、主要な遺構について概要を述べる。

a. 一本柱列

〔S A 398 柱列〕

調査区東半部で南北に並ぶ柱穴状の掘り方を2個検出したことにより想定した一本柱列である。S I 395住居跡、S D 390・405溝と重複し、いずれよりも古い。掘り方は長辺1.2 m、短辺0.8～1.0 mほどの長方形をなす。いずれにも柱痕跡は確認できず、また断ち割り調査を実施していないため、深さや層の堆積状況も不明である。柱間は掘り方の位置関係をもとに想定すると、約3.6 mほどになる。方向はおよそ南北発掘基準線に一致する。堆積土は、地山ブロックを多量に含む黒色土である。遺物は出土していない。

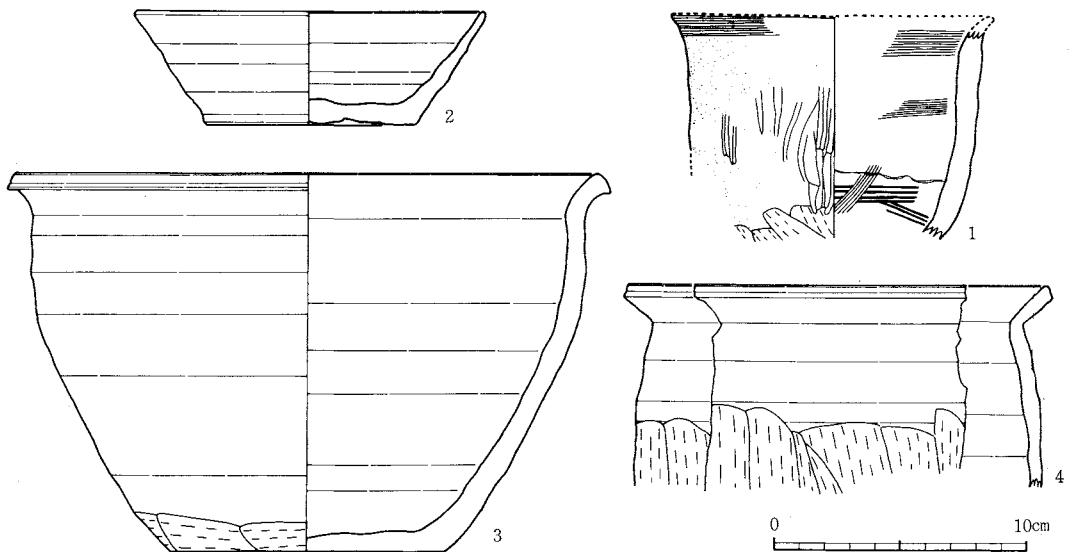
〔S A 399 柱列〕

前述のS A 398一本柱列の東側2 mほどでやはり南北に並ぶ2個の柱穴状の掘り方を検出したことにより想定した一本柱列である。S I 395住居跡、S E 394井戸、S D 392溝、S K 413土壇と重複し、いずれよりも古い。柱穴状の掘り方は長辺約1.6 m、短辺約1.0 mのほぼ長方形をなす。柱痕跡は不明である。また断ち割り調査を実施していないため深さ・層の堆積状況は不明である。柱間は北側の柱穴状の掘り方が調査区の関係で南半分しか検出できなかったため特定できないが、両掘り方の位置関係からみると3 m以上になる。方向は前述のS A 398とほぼ平行する。堆積土は地山ブロックを多量に含む黒色土である。遺物は出土していない。

b. 竪穴住居跡

〔S I 395住居跡〕

調査区東半部でほぼ全形を検出した竪穴住居跡である。S A 398・399一本柱列、S E 394井戸、S D 390～392溝、S K 413土壇と重複し、S A 398・399より新しく、他の遺構より古い。北辺東半は一部調査区外まで延びる。カマドは北区のS K 413によって壊されたものとみられる。平面形は隅丸方形をなし、規模は東西約5.4 m、南北約4.8 mである。壁は0.2～0.3 m残存しており、床は全面が地山ブロックを含む黒褐色土により貼床されている。支柱穴は住居跡の対角線上に4箇所配されており、貼床上面から掘りこまれている。柱穴の規模・平面形は0.6～0.7 mほどの方形のもの、長径0.9 m、短径0.6



1	S I 395	床面	土師器	甕	胸部外面ヘラミガキ	3	S I 396	床面	須恵器	甕	胸部下端手持ちヘラケズリ
2	S I 396	床面	須恵器	杯	底部ヘラキリ無調整	4	S I 396	床面	土師器	甕	ロクロ調整

第4図 S I 395・396住居跡出土遺物

mほどの楕円形のもの、径0.6mほどの不整形のものなど様々で、埋土は地山ブロックを含む黒褐色土で共通している。いずれの柱穴でも径15～20cmの柱痕跡を確認しており、埋まり土は地山細粒を少量含む暗褐色土である。周溝は東辺から南辺にかけての貼床上面で検出しており、幅約0.1m、深さ約0.1mで、断面形はゆるやかなU字形をなす。地山細粒を多量に含む暗褐色土が堆積している。

住居跡内の堆積土は地山細粒を多く含む暗褐色土1層のみである。

遺物は、床面と堆積層から須恵器と土師器が出土している。土師器はすべて非ロクロ調整のものである。床面からは須恵器・土師器の杯と甕が出土している。須恵器はいずれも小破片であり、杯には底部が回転ヘラケズリ調整のものと手持ヘラケズリ調整のものとがみられる。土師器は大部分が小破片であり、特徴を把握し難いが、杯はいずれも内面が黒色処理されたものである。また甕では体部外面がヘラケズリ調整の後、粗いヘラミガキが施され、内面がハケ目調整された小型甕(第4図1)がみられる。堆積層からは土師器杯・甕の小破片が少量出土している。

〔S I 396 住居跡〕

調査区中央部で検出した竪穴住居跡である。住居跡の南半部は調査区外に延びている。SD 402 溝と重複しこれより新しい。平面形は方形をなすものとみられる。規模は北辺で約6.2m、西辺で2.2m以上である。壁は最も良好なところで約0.1m残存している。床面は西壁沿いの幅約0.8mほどの部分が地山で、他は地山ブロックを多量に含む暗褐色土により貼床されている。カマドは北辺中央のやや東寄りに付設されており、内幅約0.5m、奥行約0.7mで、奥壁は約5cm立ち上がり煙道底面に続く。煙道は幅約0.3mで底面が先端に向かって低くなり、約1m延びて煙出し孔へ接続している。煙出し孔は径約0.4m、短径約0.3mの楕円形をなし、深さは約0.3mである。主柱穴は検出されなかったが、住居の北西・北東隅やカマド両側で径0.3～0.4mほどの壁柱穴を6個検出している。周溝は各辺で検出しており、幅約0.2～0.4m、深さ約0.1mで断面形はゆるやかなU字形をなす。周溝の堆積層は地山ブロックを含む柔らかい暗褐色土である。他に北東隅付近の床面で重複する2個の小土壌を検出している。古い方の土壌(K-1)は長辺約0.8m、短辺約0.6mの長方形をなし、埋土は焼土を多量に含む地山ブロック混じりの柔らかい明黄褐色土である。新しい方の土壌(K-2)は径約0.4mの円形をなし、埋土は焼土を含む地山ブロック混じりの暗褐色土である。

住居内の堆積層は3層認められる。第1層は地山細粒を多量に含む極暗褐色土で、住居跡全体に広がり、中央部では直接床面を覆う。第2層は地山ブロックを少量含む暗褐色土で、西壁ぎわに堆積し、周溝内にも及んでいる。第3層は地山ブロックを含む暗褐色土で、

東壁ぎわに堆積し、やはり周溝内にも及んでいる。

遺物は床面、小土壌、カマド、周溝、煙出し孔、住居内堆積層から須恵器と土師器が出土している(第4図)。床面からは須恵器では杯と甕が出土しており、杯にはヘラキリ無調整のもの(2)、甕には小型のもの(3)がみられる。土師器では甕が出土しており、体部をヘラケズリ調整したロクロ調整の小型の甕(4)がみられる。他はすべて破片資料であるが、この中には体部外面に叩き目を残すロクロ調整の甕も含まれている。小土壌からは須恵器杯・甕と土師器甕、カマドからは須恵器甕と土師器甕、煙出し孔と周溝からは土師器甕がそれぞれ出土しているが、いずれも破片資料である。土師器の杯はすべて非ロクロ調整のものであるが、甕にはロクロ調整のものと同非ロクロ調整のもの両者がみられる。この他、床面から刀子1点、K-2土壌から釘とみられる鉄製品、住居内堆積土から刀子2点、不明鉄製品1点が出土している。

〔S I 397 住居跡〕

調査区西半部で検出した竪穴住居跡で西半部をS D 400に壊され、南半部は調査区外に延びている。S K 408土壌、S D 400・401溝と重複し、S D 401より新しくS K 408、S D 400より古い。平面確認にとどめたため詳細は不明であるが、平面形は方形をなすとみられ、規模は南北約2.3m以上、東西約2.9m以上である。カマドは北辺に付設されている。住居内の堆積土は地山細粒を含む暗褐色土である。遺物は住居内堆積土から須恵器杯・甕、土師器甕が出土している。いずれも破片資料であるが、土師器甕にはロクロ調整のものと同非ロクロ調整のもの両者がみられる。この他に桶巻作りで凸面に格子叩き目のある平瓦片が1点出土している。

c. 井戸跡

〔S E 393 井戸跡〕

調査区東半部で検出した素掘りの井戸跡である。S D 389と重複しこれより新しい。掘り方は平面形がほぼ円形をなし、径約2.8mで、精査していないため深さは不明である。堆積土は地山ブロックを含む柔らかい褐色土である。遺物は検出段階で、堆積土から須恵器杯・甕、土師器杯・甕が出土している。いずれも破片資料であるが、土師器はすべて非ロクロ調整のものであり、杯には内黒のもの、両黒のもの、非内黒で内面がヘラミガキ調整、体部外面がヘラケズリ調整されたものがみられる。

〔S E 394 井戸跡〕

調査区東半部で検出した素掘りの井戸跡である。S A 399一本柱列、S I 395住居跡、S D 392溝と重複し、S A 399・S I 395より新しくS D 392より古い。平面形はほぼ円形をなし、径約1.2m、深さ約1.3mで底面はほぼ平坦である。堆積土は均質な濃い褐色

色土1層である。遺物は堆積土から須恵器甕、非ロクロ調整の土師器杯・甕が出土している。いずれも破片資料であり、量も少ない。他に砥石が1点出土している。

d. 溝

〔S D 389 溝〕

調査区東半部で検出した南北溝で、溝の南北両端はさらに調査区外へ延びている。S E 393 井戸、S X 424 柱穴と重複し、S X 424 より新しく、S E 393 より古い。調査区北端で断ち割り調査を実施している。規模は上幅約3.2 m、底幅約1.6 m、深さ約1.2 mで、断面形は逆台形をなす。方向は南北基準線にほぼ一致する。堆積土は8層認められる。第1・2層は地山ブロックを含む黒褐色土で、第2層の方が地山ブロックが少ない。第3層は地山ブロック・細粒を含む黒褐色土、第4・5層は地山細粒を含む暗褐色土で、5層の方が地山細粒が多い。第6層は地山ブロックを極めて多量に含むにぶい褐色土、第7層は地山ブロックを少量含む黒褐色土、第8層は地山細粒を極めて多量に含む褐色土である。遺物は出土していない。

〔S D 392 溝〕

調査区東半部で検出した南北溝で、溝の南北両端はさらに調査区外へ延びている。S A 399 一本柱列、S I 395 住居跡、S E 394 井戸、S D 391 溝、S K 413・414 土壌と重複し、S D 391・S K 414 より古いが他の遺構より新しい。規模は上幅2.1～2.4 m、底幅約0.8 m、深さ約0.2 mである。底面はほぼ平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。方向はおよそN 6°Wである。堆積土は地山小ブロックを含む極暗褐色土である。遺物は須恵器杯・甕、土師器甕が堆積土から出土している。いずれも破片資料であるが、土師器甕はすべて非ロクロ調整のものである。

〔S D 388 溝〕

調査区西端部付近で検出した南北大溝で、北端部がS D 403 溝に壊されているが、南北両端はさらに調査区外へ延びるものとみられる。S D 403 溝、S K 407 土壌と重複し、いずれよりも古い。調査区南端で断ち割り調査を実施している。規模は上幅5.3～5.7 m、底幅約4.6 m、深さ約0.4 mである。底面は平坦で、東壁は直線的にやや急に立ち上がるが、西壁の立ち上がりはゆるやかである。方向はおよそN 5°Eである。堆積土は6層に分けられる。第1層は灰白色火山灰の小ブロックを少量含む極暗褐色土、第2層は灰白色火山灰を少量、地山の細粒をごく少量含む暗褐色土、第3層は灰白色火山灰層、第4層は地山細粒を少量含む暗褐色土、第5層は地山ブロック・細粒を含む極暗褐色土、第6層は地山ブロックを含む黒色土である。遺物は堆積土から須恵器高台杯、土師器杯・甕が出土している。いずれも破片資料であるが、土師器杯は非ロクロ調整で内黒のものであり、甕

はロクロ調整のものである。また須恵器高台杯は底面が磨滅しており、硯に転用されたものとみられる。

e. 土 壙

〔S K 413 土壙〕

調査区東半部の北壁ぎわで検出した土壙である。S A 399 一本柱列、S I 395 住居跡、S D 391・392 溝と重複し、S A 399・S I 395 より新しいがS D 391・392 より古い。平面形は不整円形をなし、規模は東西約 1.6 m、南北約 0.8 m、深さ約 0.2 m で、底面はほぼ平坦である。堆積土は地山細粒を含む暗褐色土である。遺物は出土していない。

〔S K 408 土壙〕

調査区西半部で検出した土壙で、南半部は調査区外へ延びる。S I 397 住居跡、S D 400 溝と重複し、S I 397 より新しいがS D 400 より古い。平面形は不整形をなし、南北約 1.2 m、東西約 1.1 m を検出している。平面確認にとどめたため、深さ・層の堆積状況は不明であるが、平面壁の内側に沿って灰白色火山灰層が認められることより、灰白色火山灰降下時には少なくとも本土壙が窪みの状態であったことがわかる。遺物は出土していない。

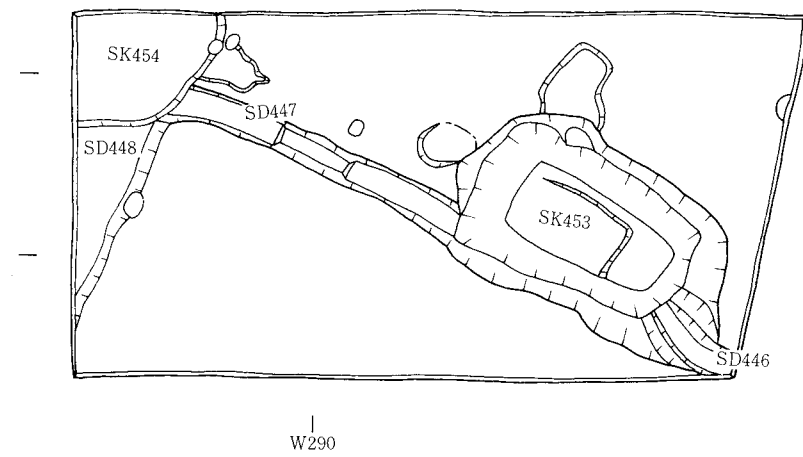
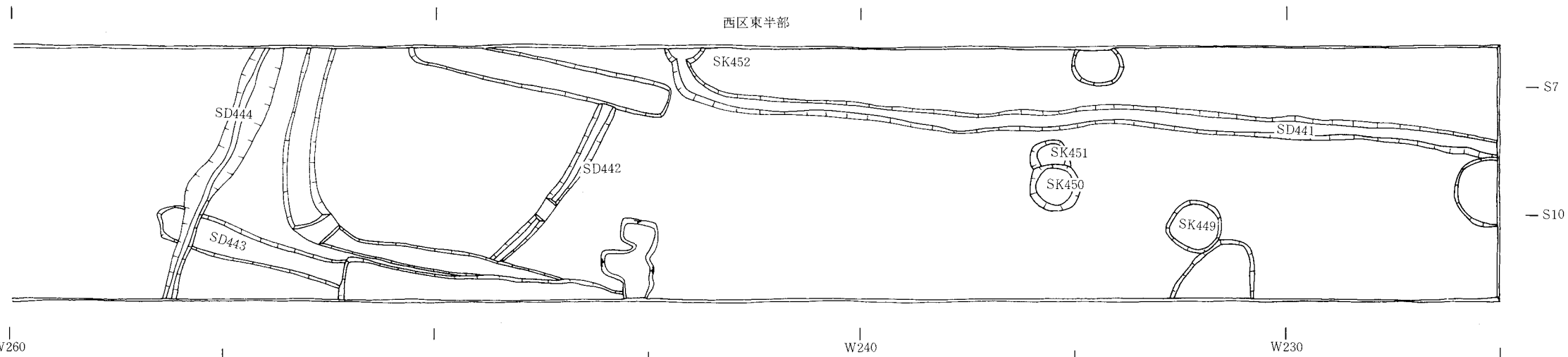
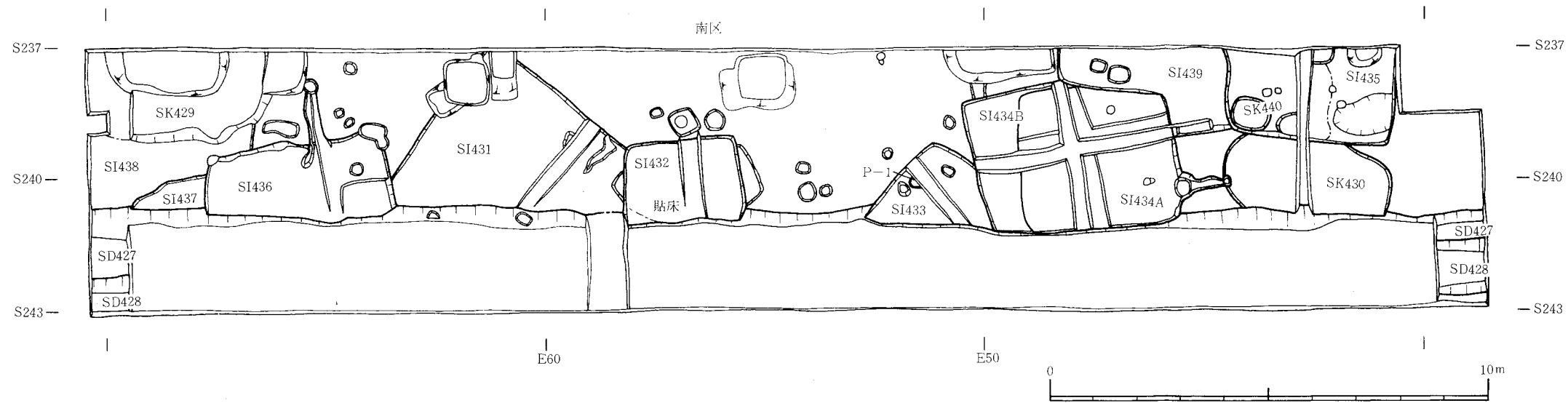
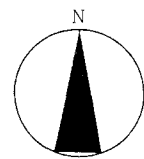
f. 柱 穴

調査区東半部でS X 420～424 とした柱穴状の掘り方を 5 個検出している。平面形はいずれも方形をなすとみられ、規模には多少のバラツキが認められる。柱痕跡が明瞭でないうえ、断ち割り調査を実施していないため、深さや層の堆積状況が不明で、柱穴とは断定しがたいが、一応柱穴として扱っておく。いずれからでも遺物は出土していない。

以上述べた中区の遺構の年代を出土遺物や重複関係などから推定すると次のようになる。

まず竪穴住居跡については、出土した土師器や須恵器の特徴からS I 395 が 8 世紀前半頃、S I 396 が 8 世紀末～9 世紀前半頃、S I 397 が 9 世紀頃と考えられる。またS D 388 溝とS K 408 土壙は 10 世紀前半頃の灰白色火山灰層との関係から、S D 388 が 9 世紀後半～10 世紀前半頃、S K 408 が 10 世紀前半頃とみられる。S D 389 溝からは遺物は出土していないが、規模・形状・堆積土が第 5 次調査で検出したS D 113・358 溝に類似することから、A 期(7 世紀末頃)の区画溝の可能性がある。S A 398・399 柱列はS I 395 より古いことから 8 世紀前半以前に限定できる。S E 393・394 井戸跡は古代の遺構より新しい素掘りの井戸跡であることから中世以降のものと推定される。なお、S D 392 溝、S K 413 土壙については出土遺物が少ないため、古代のものか中世以降のものか不明である。

中区では以上の各遺構の他にS D 390・391・400～405・415 溝や、S K 407・409



第5图 南区·西区检出遗構全体图

～ 412・414・425・426 土壌などが検出されている。重複関係などからこれらのうち S D 401・402 が古代以前、S D 400・403 が中世頃、他は近世以降のものとみられる。土壌では年代の特定できるものはない。

(3) 南 区 (第5図)

検出したおもな遺構には竪穴住居跡10、溝2、土壌3などがある。これらはいずれも地山面で検出している。調査区の制約や重複関係などのため全体形を検出した遺構は少ない。したがって、以下では比較的残存状況が良好で遺物がまとまって出土している遺構を中心に概要を述べる。

a. 竪穴住居跡

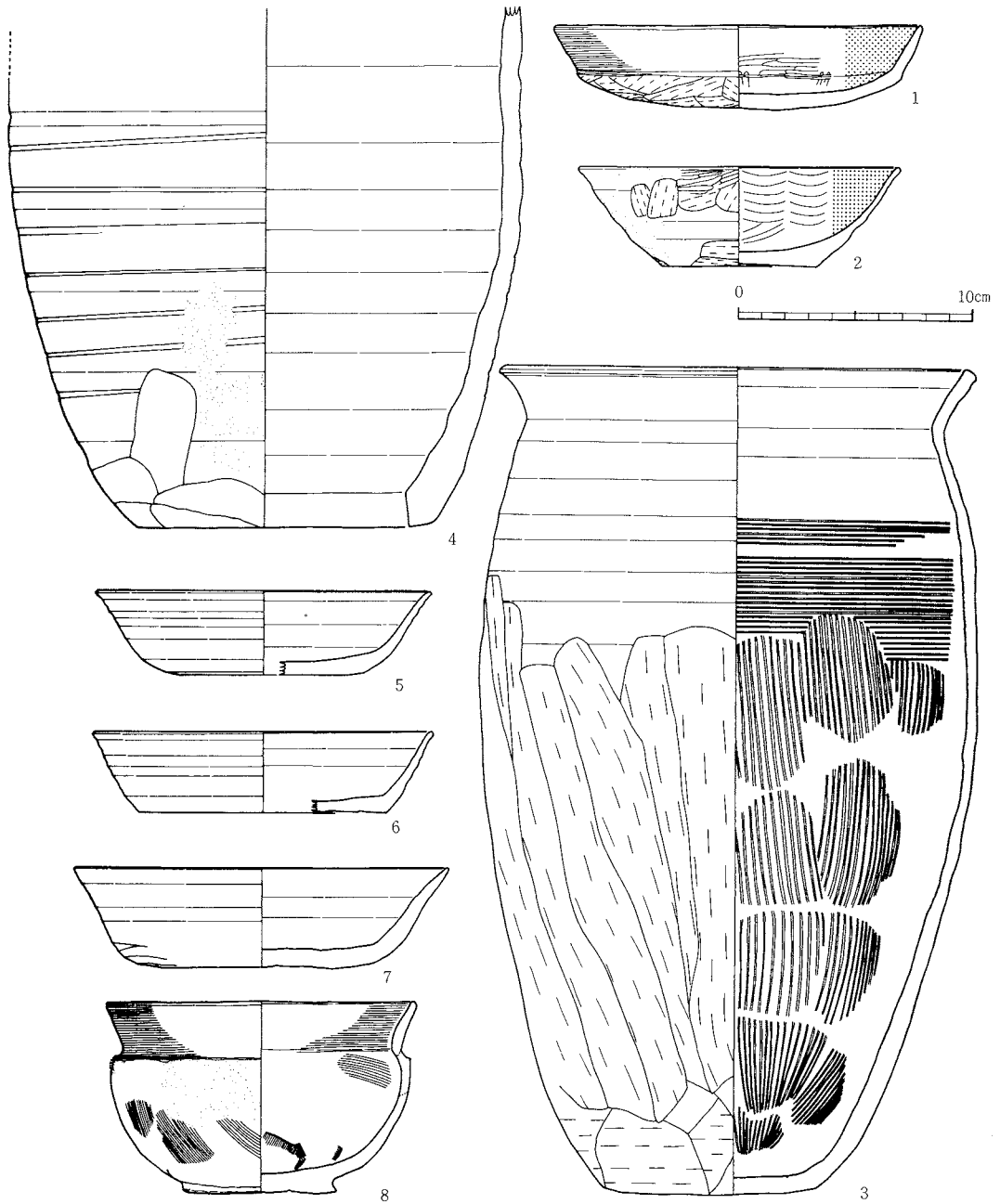
竪穴住居跡でほぼ全形を検出できたものは S I 434 A・B 住居跡だけであり、この住居跡では遺物もまとまって出土している。他はいずれも部分的な検出にとどまったが、これらのなかで S I 431・433・436 住居跡からは遺物がまとまって出土している。したがって、以下では S I 434 A・B、S I 436、S I 433、S I 431 の5棟の住居跡についてのみ記述することにする。

〔S I 434 A・B 住居跡〕

調査区東半部でほぼ全形を検出した竪穴住居跡である。S I 439 住居跡、S K 430 土壌、S D 427 溝と重複しており、S I 439・S K 430 より新しいが S D 427 より古い。本住居跡は後に西・北側へ拡張されている(S I 434 A→S I 434 B)。

S I 434 A は平面形がほぼ方形をなし、規模は北辺で約 3.3 m、東辺で約 3.0 m である。壁は東辺で約 0.3 m 残存している。完掘していないため支柱穴・周溝等については不明であるが、一部断ち割り調査を実施した結果、床面は地山ブロックを極めて多量に含む黒褐色土により貼床されている。カマドも判然とはしないが、S I 434 B 住居と同様に東辺南寄りに付設されていた可能性が高い。

S I 434 B は S I 434 A の南・東辺をそのまま利用しながら、西側へは北で約 1.5 m、南で約 1 m、北側へは中央部で約 0.4 m 拡張した住居跡である。平面形は長方形をなし、規模は東西約 4.5 m、南北約 3.4 m で、壁は西辺で約 0.3 m 残存している。床は西壁ぎわの幅約 0.5 m の部分では地山面であるが、他の部分は地山ブロック・細粒を多量に含む暗褐色土により貼床されている。カマドは東辺南寄りに付設されており、貼床上に構築されている。内幅約 0.9 m、奥行約 0.5 m で、奥壁は約 15cm 立ち上がり煙道底面に続く。煙道は幅 0.2～0.3 m で、底面は先端に向かって多少高くなり、約 0.7 m 延びて煙出し孔へ接続している。煙出し孔は径約 0.2 m の円形をなし、深さは約 0.3 m である。なお、カマド



1	堆積層	土師器	杯	非ロクロ調整、内黒	5	カマド内	須恵器	杯	底部回転ヘラケズリ
2	堆積層	土師器	杯	ロクロ調整 内黒	6	堆積層	須恵器	杯	底部ヘラキリ無調整
3	堆積層	土師器	甕	ロクロ調整、体部内面ハケ目調整	7	カマド内	須恵器	杯	底部ヘラキリ→手持ちヘラケズリ
4	床面	須恵器	甕		8	堆積層	土師器	甕	非ロクロ調整、頸部に段

第6図 S I 434 B住居跡出土遺物

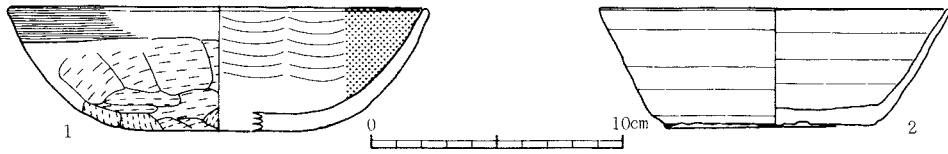
の焚口部付近の床面上にはカマド構築土と同様の粘土がみられ、周囲の床面より5～10cmほど高くなっている。住居の方向は西辺で測るとS I 434 Aが南北の発掘基準線にほぼ一致し、S I 434 BがおよそN13°Wとなる。

住居内の堆積土は5層に分けられる。第1層は地山細粒を含む暗褐色土で住居跡の中央部から南半部にかけて分布し、南半部では直接床面を覆う。第2層は焼土ブロックを主体とする層で住居跡中央部付近に分布し、直接床面を覆う。第3層は木炭が少量混じる地山細粒を多量に含む暗褐色土で住居跡の北半部から西半部にかけて分布し、直接床面を覆う。第4層は地山ブロック・細粒を極めて多量に含む褐色土で住居跡東半部に分布し、直接床面を覆う。第5層は地山細粒を極めて多量に含む極暗褐色土で東壁ぎわの床面上に堆積している。

遺物はS I 434 Aでは床面上より非ロクロ調整の土師器甕の胴部破片が1点出土している。S I 434 Bでは床面・カマド内・堆積層から須恵器と土師器が出土している。床面からは須恵器甕(第6図4)、カマド内からは須恵器では底部が回転ヘラケズリ調整の杯1点(5)、ヘラ切りの後に手持ちヘラケズリ調整されたもの1点(7)、土師器では非ロクロ調整の甕の破片が少量出土している。堆積土からは須恵器では杯・高台杯・甕・瓶類、土師器では杯・甕が出土している。須恵器杯には底部の切り離しがヘラ切り無調整のもの2点(6)、底部全面が回転ヘラケズリ調整されたもの6点、静止糸切りで底部が回転ヘラケズリ調整されたもの1点がある。土師器では杯・甕ともにロクロ調整のものと非ロクロ調整のもの両者がみられる。杯には底部が回転ヘラケズリ調整で外面がヘラミガキ調整された内黒のもの(2)や非ロクロ調整で内黒のもの(1)の他、非ロクロ調整の内黒のものがある。甕にはロクロ調整で胴部下半にヘラケズリ調整された長胴甕(3)や、非ロクロ調整の小型の甕(8)などがある。

〔S I 436 住居跡〕

調査区西端部付近で検出した竪穴住居跡である。S I 431・437・438住居跡、S D 427溝と重複しており、S D 427より古く、他の遺構よりは新しい。南半部をS D 427によって大きく壊されているが平面形はほぼ方形をなすとみられる。規模は北辺が約0.4m、東辺が約1.6m以上である。住居の北西部を精査した結果、床面は地山ブロックを多量に含む極暗褐色土により貼床されている。主柱穴、周溝等は検出されなかった。カマドは北辺中央やや東寄りに付設されており、灰白色粘土で貼床面上に構築されている。西半部しか精査していないため内幅は不明であるが、奥行約0.6mで、奥壁が約0.2m立ち上がり煙道底面に続く。煙道は幅約0.3mで底面は先端に向かって高くなり、約1.2mほど延びて煙出し孔へ接続している。煙出し孔は径約0.3m、深さ約0.2mである。住居の方向は北



1	堆積層	土師器	杯	内黒	2	堆積層	須恵器	杯	底部へラキリ→ナデ調整
---	-----	-----	---	----	---	-----	-----	---	-------------

第7図 S I 436 住居跡出土遺物

辺で測るとおよそE10°Nとなる。

住居内の堆積層は3層に分けられる。第1層は焼土を少量、地山細粒を多量に含む極暗褐色土で中央部では直接床面を覆う。第2層は焼土を少量、地山細粒を多量に含む黒褐色土で北壁ぎわに堆積する。第3層は地山細粒を含む極暗褐色土で直接床面を覆う。遺物は堆積層から須恵器と土師器が出土している。大部分が破片資料であるが、須恵器では杯・甕、土師器では杯類・甕がみられる。須恵器の杯には底部の切り離しがへラキリで底部がナデ調整されたもの(第7図2)がある。土師器はすべて非クロク調整である。杯類には丸底で内黒のもの(1)や、体部と底部の境に段をもち体部外面がナデ調整・へラミガキ調整されたものや、内面ナデ調整された非内黒のものなどがある。甕はいずれも破片資料で図示できるものは含まれていない。

〔S I 433 住居跡〕

調査区東半部で一部を検出した竪穴住居跡である。S I 434 住居跡、S D 427 溝と重複し、いずれよりも古い。東半部をS I 434、南半部をS D 427によって大きく壊されており、北西辺約2.5m、北東辺約1.0mの住居跡の北隅部分を検出しただけであるが、平面形は方形をなすとみられる。壁は最も良好なところで約0.3m残存している。床面は地山ブロックを少量含む暗褐色土により貼床されている。北西辺付近で貼床上面より掘りこまれた長径約35cm、短径約17cm、深さ約10cmの楕円形をなす小ピット(P-1)が検出された。残存部分には支柱穴・カマド・周溝はみられなかった。住居の方向は西辺で測るとおよそN44°Eとなる。

堆積層は3層認められる。第1層は地山細粒を少量含む黒褐色土ではほぼ住居跡全体に広がり中央部では直接床面を覆う。第2層は地山細粒を多量に含む極暗褐色土で、北西壁から中央部まで広がり直接床面を覆う。第3層は地山ブロックを多量に含む黒褐色土で北西壁ぎわの床面上に堆積している。

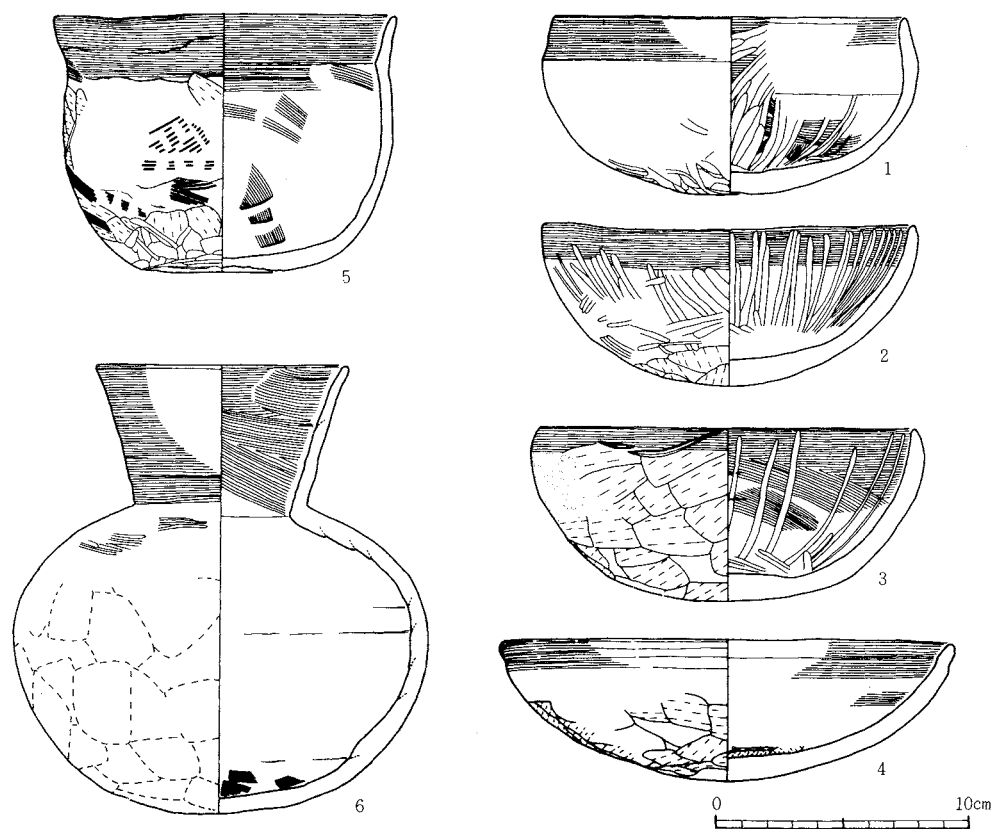
遺物は床面、P-1、堆積層から古墳時代の土師器が比較的まとまって出土している(第8図)。床面とP-1からは杯・甕、堆積層からは杯・壺・甕が出土している。杯では丸底で内湾しながらゆるやかに立ち上がるもの(2、3)、口縁部がやや内傾するもの(1)や屈

曲しながら外傾するもの(4)などがある。また杯や壺(6)のなかには内面ないし内外両面丹塗りのものもある。

〔S I 431 住居跡〕

調査区西半部で検出した竪穴住居跡である。S I 432・436 住居跡、S D 427 溝と重複し、いずれよりも古い。南半部をS D 427に大きくこわされているが、平面形は方形をなすとみられ、北西辺を約3.6 m、北東辺を約3.2 m 検出している。壁は最も良好なところで約10cm残存している。床面は地山で、支柱穴、周溝は検出されなかった。カマドは北東辺に付設されており、内幅約0.5 m、奥行約0.9 mで奥壁が約12cm立ち上がる。煙道、煙出し孔はすでに削平されている。住居の方向は北西辺で測るとおよそN47° Eとなる。住居内の堆積土は地山細粒を少量含む暗褐色土1層である。

遺物は堆積層から古墳時代の土師器が出土している。杯・壺・甕があり、なかには丹塗



1	床 面	土師器	杯	内面丹塗り	4	堆積土	土師器	杯	
2	P-1	土師器	杯	完形、内面放射状のミガキ	5	P-1	土師器	甕	体部外面炭化物付着
3	P-1	土師器	杯	内面粗い放射状のミガキ	6	堆積土	土師器	壺	外面・内面口縁部丹塗り

第 8 図 S I 433 住居跡出土遺物

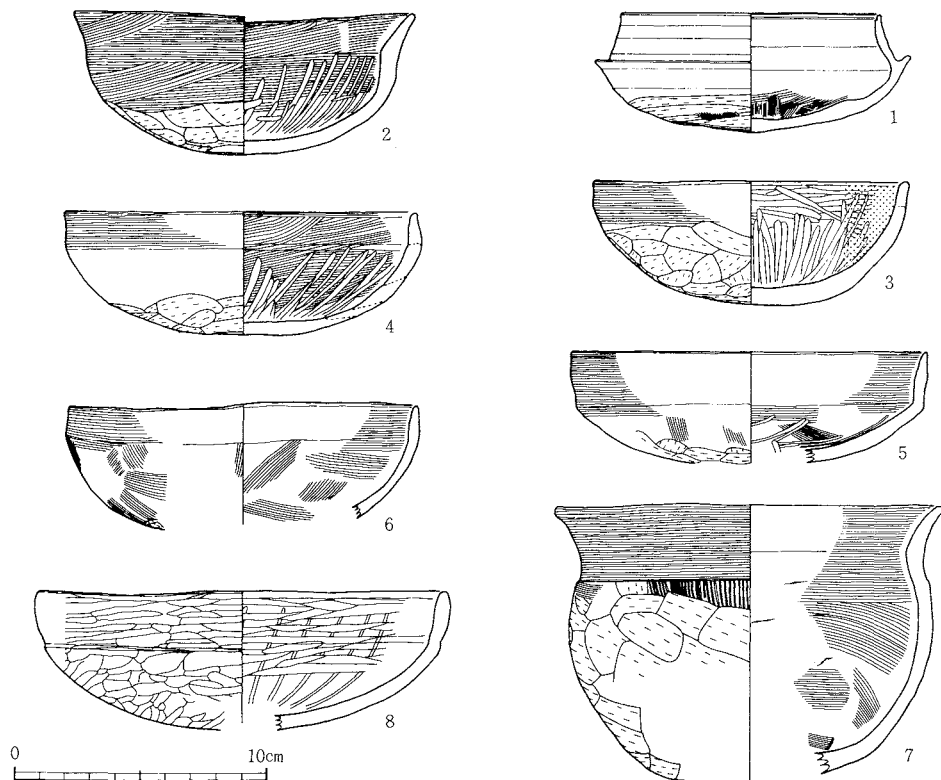
りのものもみられる。いずれも破片資料のため図示できなかったが、杯には丸底で体部と底部の境に段をもち、体部がやや内湾しながら外傾する内外丹塗りのもの、丸底で体部が内湾しながらゆるやかに立ち上がり口縁部が外傾する内外丹塗りのもの、内黒のものなどがある。壺には外面ナデ調整された小型のものや、外面丹塗りのものがみられる。なお杯のなかにはS K-430出土のものと同接合するものが1例ある(第9図5)。土器以外ではカマドの底面に据えられた土製支脚が1点出土している(図版8-6)。

b. 土 壙

土壙は3基検出している。この中で完掘したのはS K 430 だけであり、この土壙からは遺物がまとめて出土している。

〔〔S K 430 土壙〕〕

調査区東端部付近で検出した土壙である。S I 434 A・435 住居跡、S D 427 溝と重複



1	堆積土	須恵器	杯	底部回転ヘラケズリ	5	堆積土	土師器	杯	内・外面丹塗り、S I 431と接合
2	堆積土	土師器	杯	内・外面丹塗り	6	堆積土	土師器	杯	内面・外面口縁部丹塗り
3	堆積土	土師器	杯	内黒	7	堆積土	土師器	甕	頸部に段
4	堆積土	土師器	杯	内面・外面口縁部丹塗り	8	堆積土	土師器	杯	内・外面丹塗り

第9図 S K 430 土壙出土遺物

し、いずれよりも古い。南・北両側をそれぞれS D 427、S I 435に壊されている。平面形はほぼ楕円形をなすとみられ、規模は東西(長径)約3.7 mで、南北(短径)は1.6 m以上である。深さは約10cmで、底面は平坦である。堆積土は地山ブロックを多量に含む黒褐色土である。遺物は堆積土から古墳時代の須恵器と土師器が出土している(第9図)。

〔S K 440 土壌〕

調査区東端部付近で検出した土壌である。S I 435住居跡と重複し、これより新しい。径約0.9 mのほぼ円形をなす。精査していないため深さや堆積状況などは不明である。堆積土は地山ブロック・細粒を含む暗褐色土である。遺物はいずれも破片資料で図示できるものはないが、非ロクロ調整の土師器が少量出土している。杯は内黒の体部破片1点、内面がナデ調整の後に粗い縦方向のヘラミガキ調整が施された体部破片1点、内面がナデ調整で丹塗りの体部破片1点が出土している。甕では口縁部破片3点、底部破片4点、体部破片17点が出土している。

〔S K 429 土壌〕

調査区西端部で検出した土壌である。S I 438住居跡と重複し、これより新しい。西・北半部は調査区外に延びるが平面形は楕円形をなすとみられる。東西約4.5 m、南北約2.1 m検出している。精査していないため深さや堆積状況などは不明である。堆積土は地山細粒や少量の礫を含む褐色土である。遺物は須恵器・土師器の他に近世以降の陶磁器が出土している。

c. 溝

〔S D 427 溝〕

調査区南端部で検出した東西溝で、東西両端はさらに調査区外へ延びている。多くの遺構と重複し、いずれよりも新しい。調査区の東西両端で断ち割り調査を実施している。規模は上幅約1.3 m、底幅約0.6 m、深さ約0.7 mである。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。方向は北壁で測ると、東西発掘基準線にほぼ一致する。堆積土は5層に分けられ、いずれも自然堆積層とみられる。第1層は木炭を少量、地山細粒を多量含む暗褐色土、第2層は地山ブロック・細粒を極めて多量に含む暗褐色土、第3層は地山ブロック・細粒を少量含む極暗褐色土、第4層は木炭をごく少量、地山ブロック・細粒を極めて多量に含む暗褐色土、第5層は地山ブロック・細粒を極めて多量、黒色土小粒を少量含む暗褐色土である。

遺物は少量の須恵器と比較的多量の土師器があり、ほかに平瓦、用途不明鉄製品が出土している。須恵器には高台杯、杯、蓋、甕、長頸瓶がある。土師器には杯・甕があるが、いずれも破片である。このうち杯には非ロクロ調整で内黒のもの、内面ナデ調整で丹塗りの

もの、内面へラミガキ調整で非内黒のもの、内外面ともナデ調整されたものがみられる。甕にはロクロ調整のものと非ロクロ調整のものがある。平瓦は1点出土しており、城内地区平瓦5類のもので桶巻き作りで凸面格子叩き目のものである。

〔S D 428 溝〕

調査区の東西両壁部分での断ち割り調査で検出した東西溝で、前述のS D 427 溝と重複し、これより古い。北壁はS D 427 によって完全にこわされており、また南壁は調査区外に位置する。このため詳細は不明であるが、規模は上幅1.3 m以上、底幅約0.7 m、深さ約0.9 mである。底は平坦で北壁はゆるやかに立ち上がる。溝の方向は底部北端でみるとおよそE1°Nとなる。堆積層は5層に分けられる。第1層は少量の地山ブロックと多量の地山細粒を含む暗褐色土、第2層は極めて多量の地山ブロックと少量の黒色土小粒を含む極暗褐色土、第3層は極めて多量の地山細粒と少量の黒色土小粒を含む極暗褐色土、第4層は地山細粒を多量に含む均質な暗褐色土、第5層は地山細粒を極めて多量に含む均質な褐色土である。遺物はロクロ調整と非ロクロ調整の土師器甕が少量出土しているが、いずれも破片資料である。その他に鎌とみられる鉄製品も1点出土している。

以上述べた南区の遺構の年代を出土遺物や重複関係などから推定すると次のようになる。

まず竪穴住居跡については、出土した土師器や須恵器の特徴からS I 431 とS I 433 が古墳時代のもので6世紀前半頃、S I 436 が8世紀後半頃、S I 434 Bが8世紀末～9世紀初頭頃と考えられる。またS K 430 土壌からも古墳時代の土師器や須恵器がまとまって出土しており、やはり6世紀前半頃と考えられる。S D 427 とS D 428 はほぼ一致して延びる東西溝で、S D 427 は古代の遺構をすべて切っていることより、いずれも中世の区画溝とみられる。S K 429 土壌は陶磁器の出土により近世以降のものであることがわかる。S K 440 土壌については出土遺物が少なく、古代のものか中世以降のものか不明である。

南区では以上の各遺構のほかに、S I 432・435・437～439 住居跡などが検出されており、重複関係などからいずれも古代のものとみられるが、精査していないため年代は限定できなかった。

(4) 西 区

本地区で検出した遺構は溝8(S D 441～448)、土壌6(S K 449～454)だけである。これらのなかではS K 453 土壌から鉄滓7点、S K 454 土壌から轆の羽口1点が出土しているのみで、他の遺構からは遺物は出土していない。このため、本地区で検出した各遺構の年代は限定することができない。また、本地区ではこれまでの調査や今回の調査の他地

区でみられたような古代の建物跡や竪穴住居跡などの遺構は認められない。さらに遺物の分布状況も極めて希薄である。以上より名生館遺跡における古代の遺構は、本地区まで広がっていなかったとみられる。なお、S D 448 溝は精査していないが、形状と堆積土の特徴より中世大崎氏の居城である名生城に関連する溝の可能性がある。

5. ま と め

今回の調査は本遺跡の史跡指定に向けて、遺跡の範囲と遺構の分布状況を把握することを目的として実施したものである。設定した調査区のうち、城内地区の中区と北区、および小野柄堂地区の西区は、本遺跡の遺構が西にどこまで延びているかを確認するための調査区であり、城内地区の南区は城内地区と小館地区の間にも遺構が存在するかどうかを検討するために設定した調査区である。調査の結果、城内地区ではいずれの調査区でも掘立柱建物跡や竪穴住居跡、区画溝跡などが検出され、城内地区から小館地区にかけては古代の遺構が全域に集中して分布することが知られた。一方、小野柄堂地区では確実に古代に遡る遺構は全く検出されず、古代官衙の範囲はこの地区には及ばなかったものと推定される。

〔古代官衙遺構の分布範囲〕

第1次～6次調査の成果をもとにすると、本遺跡の古代官衙跡の範囲についての知見は次のようになる。

これまでの調査では古代官衙の外郭を区画する明確な遺構は未発見であり、官衙全体の規模およびその変遷については今のところ把握されていない。官衙の範囲を遺構の分布の上からみると、古代の遺構は城内地区を中心として、南は小館地区、北は内館地区まで比較的密集して広がっている。東は浸蝕崖の裾までとみてほぼ間違いない。西については小野柄堂地区で古代遺構が認められなかったことにより、城内地区の範囲内で収まるように思われる。以上により、古代の遺構の分布範囲は南北約700m、東西約400mとなる。なお、範囲についてはこれまでの調査では調査地点、調査面積ともに不十分であり、官衙の外郭線の有無なども含めて今後さらに詳細な調査が必要であろう。

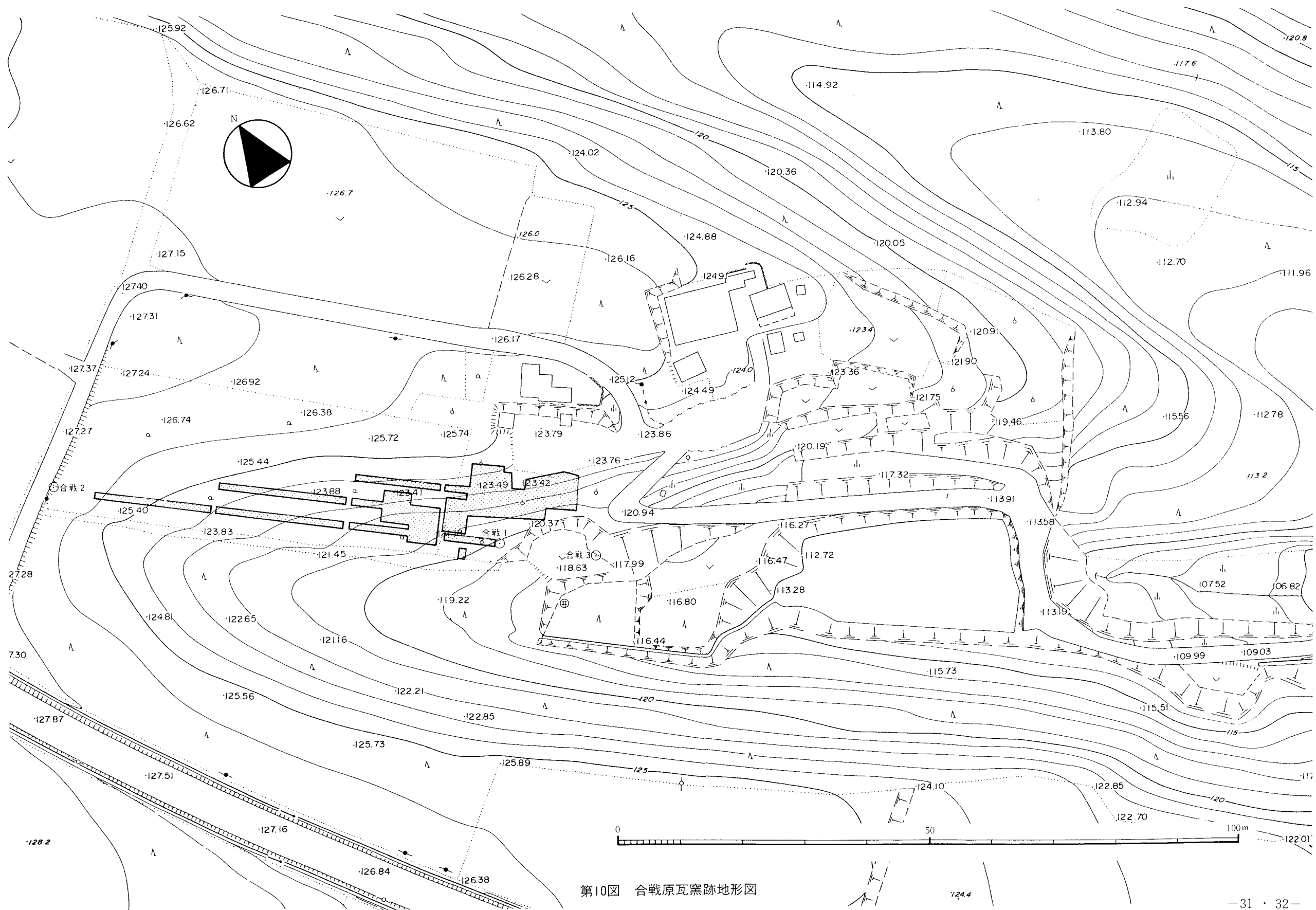
Ⅲ．合戦原瓦窯跡の調査

1．調査要項

1. 遺跡名 合戦原瓦窯跡
2. 所在地 宮城県玉造郡岩出山町字細峰55
3. 調査主体 宮城県教育委員会（教育長 関本朝吉）
4. 調査共催 岩出山町教育委員会（教育長 岩崎次郎）
5. 調査期間 昭和60年9月2日～10月20日
6. 調査顧問 多賀城跡調査研究指導委員会委員長・東北大学名誉教授 伊東信雄
7. 調査担当者 宮城県多賀城跡調査研究所長 佐々木光雄
8. 調査員 宮城県多賀城跡調査研究所：進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、佐藤則之、佐藤和彦
東北歴史資料館：桑原滋郎、小井川和夫
宮城学院大学教授：工藤雅樹、石巻高等学校教諭：三宅宗議
岩出山町教育委員会：武沢 賢、岡田 勝
9. 調査参加者 遠藤智一、藤原二郎、菊地淳一、万城目喜一、鶴巻まき子、二郷等、笠原良夫、大場松治、大場清志、佐々木秀一、大場正志、佐々木善右エ門、岡本たか
10. 調査協力者 岡本一雄、宮本一郎

2．遺跡の概要

合戦原瓦窯跡群は岩出山町細峰55に所在する。遺跡は大崎平野の北西端、国鉄陸羽東線岩出山駅の南約2.5kmに位置し、江合川の南に北西から南東方向に扇状に広がる標高150m～40mの火砕流台地の南斜面に立地している。この火砕流台地は東縁が古川市西部、南縁が中新田町から宮崎町北部で沖積地に接している。古川市名生館遺跡は本遺跡の南東約5kmに位置してこの火砕流台地の東縁部付近に立地し、また中新田町城生遺跡は本遺跡の南約7kmに位置して台地の東南端部付近に立地している(第1図)。この火砕流台地の末端部は北西から南東に流れる沢によって浸蝕を受け、小丘陵状をなす。本遺跡の南側にも小さな沢が南東より入り込んでおり、瓦窯群はその沢頭付近の南斜面中腹部に構築されてい



第10図 合戦原瓦窯跡地形図

る。窯跡群付近の標高は約 120 m である。遺跡は現在桐混じりの雑木林となっているが、かつては畑として開墾され、その後桐が植林されたが放置されたため雑木林に化したとのことである。

合戦原瓦窯に関しては、大正13年に当地を踏査した鈴木省三が本窯跡を発見し、瓦窯跡として報告している(註1)。また、昭和9年には内藤政恒により岩出山町細峯55番地付近採集の樹枝文軒丸瓦が撮影されている(註2)。この樹枝文軒丸瓦は後の昭和37年に遠藤智一により、名生館遺跡で採集されるのであるが、その経緯については資料紹介で詳述する。同様の樹枝文軒丸瓦は名生館遺跡の付属寺院跡とみられる古川市伏見廃寺跡(註3)、城生遺跡の付属寺院とみられる中新田町菜切谷廃寺跡(註4)、色麻町一の関遺跡(註5)からも出土しており、瓦窯跡群はこれらの古代寺院に瓦を供給した瓦窯の跡として注目されていた。

註1 鈴木省三「合戦原」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3号 pp.21～23
宮城県史蹟名勝天然記念物調査会 1927(1982復刻)

註2 佐々木茂楨氏の資料により、内藤政恒氏撮影の写真の存在を知った。

註3 佐々木茂楨「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第56巻第3号 pp.23～60
1971

註4 伊東信雄『菜切谷廃寺跡』宮城県文化財調査報告書第2集 1956

註5 宮城県教育委員会「一の関遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)』
pp.68～101 1977

3. 調査経過

今回の調査は名生館遺跡に関連する瓦窯跡の一つである合戦原瓦窯跡群を対象とし、窯跡の分布状況と規模・構造を把握するとともに、本瓦窯で生産された瓦の供給関係を解明することを目的として実施した。

調査は9月2日に発掘器材を搬入した後、午後から瓦の散布する南斜面の下刈りを開始した。翌3日午前には鍬入式を行ない、終了後は前日に引き続き下刈りを継続し、これをほぼ完了した。4日には発掘基準点を設け、まず窯跡の分布状況を把握するために斜面に沿って幅1mの東西トレンチを南北に3m間隔で3本設定し(第10図)、西側より表土剥ぎを開始した。

その結果、9月5～6日にかけて調査区の中央部でSR4・5・6窯跡、SK11土壌、

東半部でS R 2・3 窯跡とS R 2 窯跡に重複しそれより古いS K 10土壌、西端部でS D 16 東西溝を相次いで確認した。また調査区中央南端の斜面裾部付近の表土からは、軒丸瓦の小破片1点と多量の丸瓦・平瓦が出土したが、これらは開墾の際に一括して投棄されたものであることがわかった。

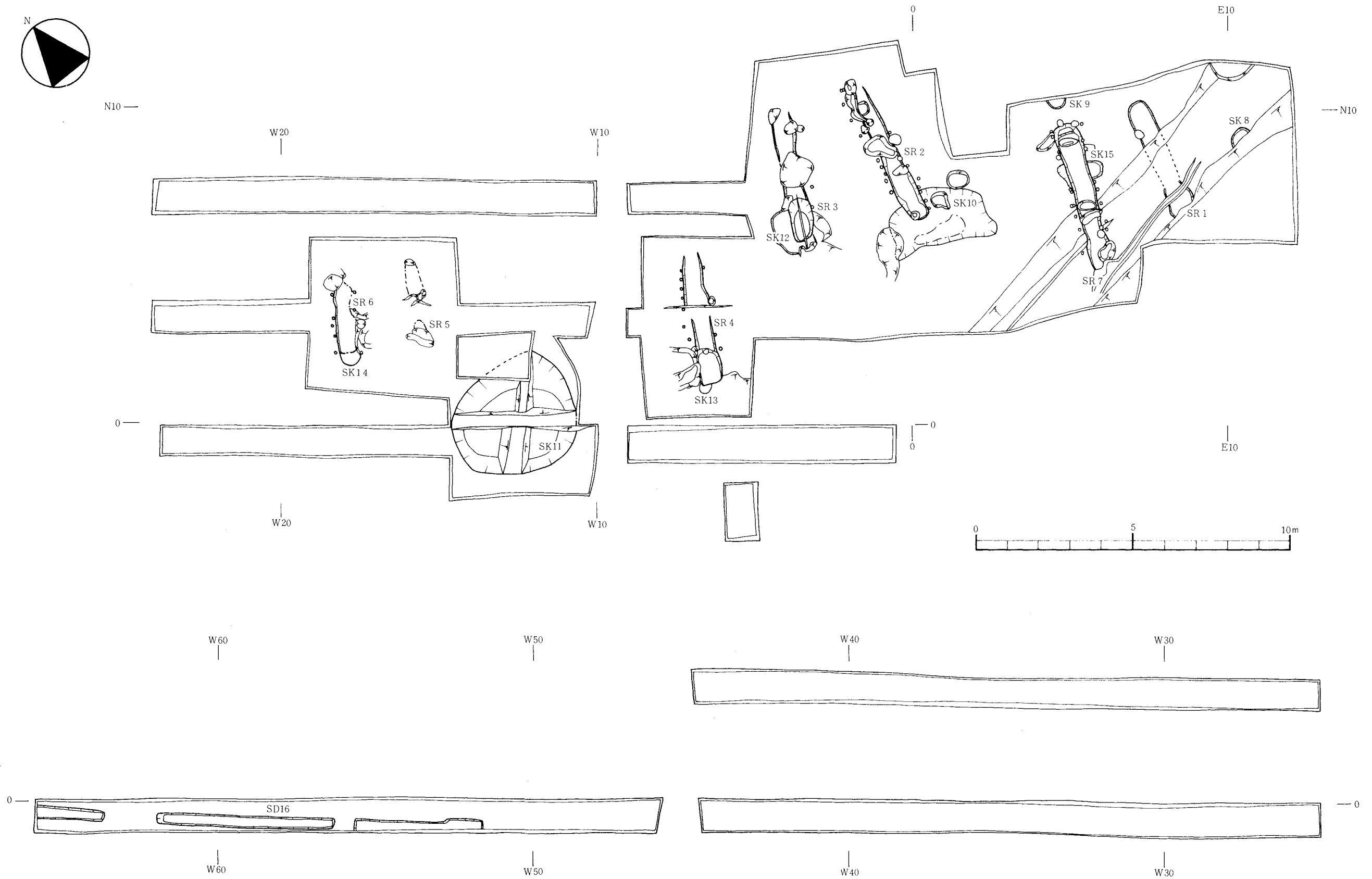
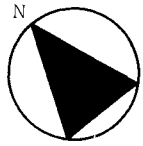
確認した各遺構は、いずれも部分的な検出であったため、7日から遺構部分を中心にトレンチの拡張作業を行なうとともに、これと並行してトレンチをさらに東に延ばし、その表土剥ぎも継続した。その結果、新たに調査区の東端部付近でS R 1・7 窯跡を確認し、窯跡は合計7基となった。

これらの窯跡はすべて地山面で検出されたもので、南斜面の中腹部に約2～5 m間隔で1列に並んで構築されている。開墾などによる削平のため窯跡は全体的に残存状況が悪く、とくに西側に位置するS R 5・6 窯跡ではかろうじて底面が部分的に残存しているだけであった。比較的残存状況の良い東側のS R 1 窯跡とS R 7 窯跡でみると、規模は長さが4～5 m、幅0.8 mほどで、いずれも小規模な窯であることが判明した。

9月13日からは、拡張が完了して全体を検出した窯跡から検出状況の写真撮影を行い、順次精査を開始した。S R 1・2・4・7 窯跡からは天井部の崩壊土とみられるスサ入りの焼け粘土塊が多量に出土した。また、S R 2～4・6・7 窯跡では側壁の外側に側壁に接するような状態で径10cmほどの小柱穴群が検出され、これらは窯体をはさんでほぼ対になるものがみられることから、窯の天井部を構築する際の構架材を差し込んだ痕跡と推定された。いずれの窯跡でも底面には階段状の施設は認められなかった。以上のことから、S R 1～4・6・7 窯跡はいずれも半地下式の無階無段窖窯であることが確認され、残存部分からみて他の窯跡も同構造のものと推定された。S R 7 窯跡では焼成部の先端が壇状になっており、この部分には煙出し孔が付いていたと考えられた。またS R 2・4・7 窯跡の燃焼部には燃料残滓と考えられる炭化材がみられた。遺物はS R 1・2・7 窯跡から比較的多量の瓦類が出土したほか、S R 7 窯跡では少量の須恵器、土師器もみられた。

S K 11土壌については調査区の拡張が9月17日に完了し、精査の結果平面形が多少歪んだ円形の土壌で、底面付近に灰白色火山灰の1次堆積層がみられることから、灰白色火山灰が降下した10世紀前半にはまだ大きくぼみ状をなしていたことが判明した。

各遺構は精査が終了次第に清掃して写真撮影を行ない、ついで実測図の作成に入った。図面の作成は10月9日までかかり、引き続き断ち割り調査を実施して細部の検討を行なった。断ち割り調査では、S R 2～4 窯跡の燃焼部はまず掘り方をつくり、そこに若干土を埋め込んで底面を作り出すという工程で構築されていること、燃焼部の底面がS R 1・4・7 窯跡で2面、S R 2 窯跡で3面あり、焼成部の底面はS R 7 窯跡で3面あることなど



第11図 合戦原瓦窯跡検出遺構全体図

が判明した。

この後、これらの各窯跡の断ち割り調査の結果を記録するために断面図を作成するとともに、図面類のチェックや若干の補足調査を行ない、10月17日からは埋め戻し作業に入った。そして、10月20日には器材の撤収などすべての作業を終了した。

なお、今回の発掘調査面積は約 300 m²である。

4. 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構には、瓦窯跡7、土壇8、溝1がある。これらはいずれも調査区中央から東側にかけての台地南斜面中腹部・裾部で検出された。検出面はほとんどのものが地山面である(第11図)。

(1) 瓦 窯 跡

台地南斜面の中腹部、標高 122 m の等高線付近に東西に 2～5 m 間隔で並んで7基検出された。いずれも開墾などにより著しく削平されており、残存状況はあまり良くなく、とくに燃焼部に比較して焼成部の残りが悪い。そのため、窯跡のほぼ全形を検出できたのは7基のうち調査区の東端付近に位置するSR7窯跡1基だけであり、この東側にあるSR1窯跡では窯の中央部が大きく壊され、西側のSR2～4窯跡では焼成部先端がいずれも削平のため失われていた。また、中央部に位置するSR5・6窯跡はかろうじて底面が部分的に残存しているだけであった。

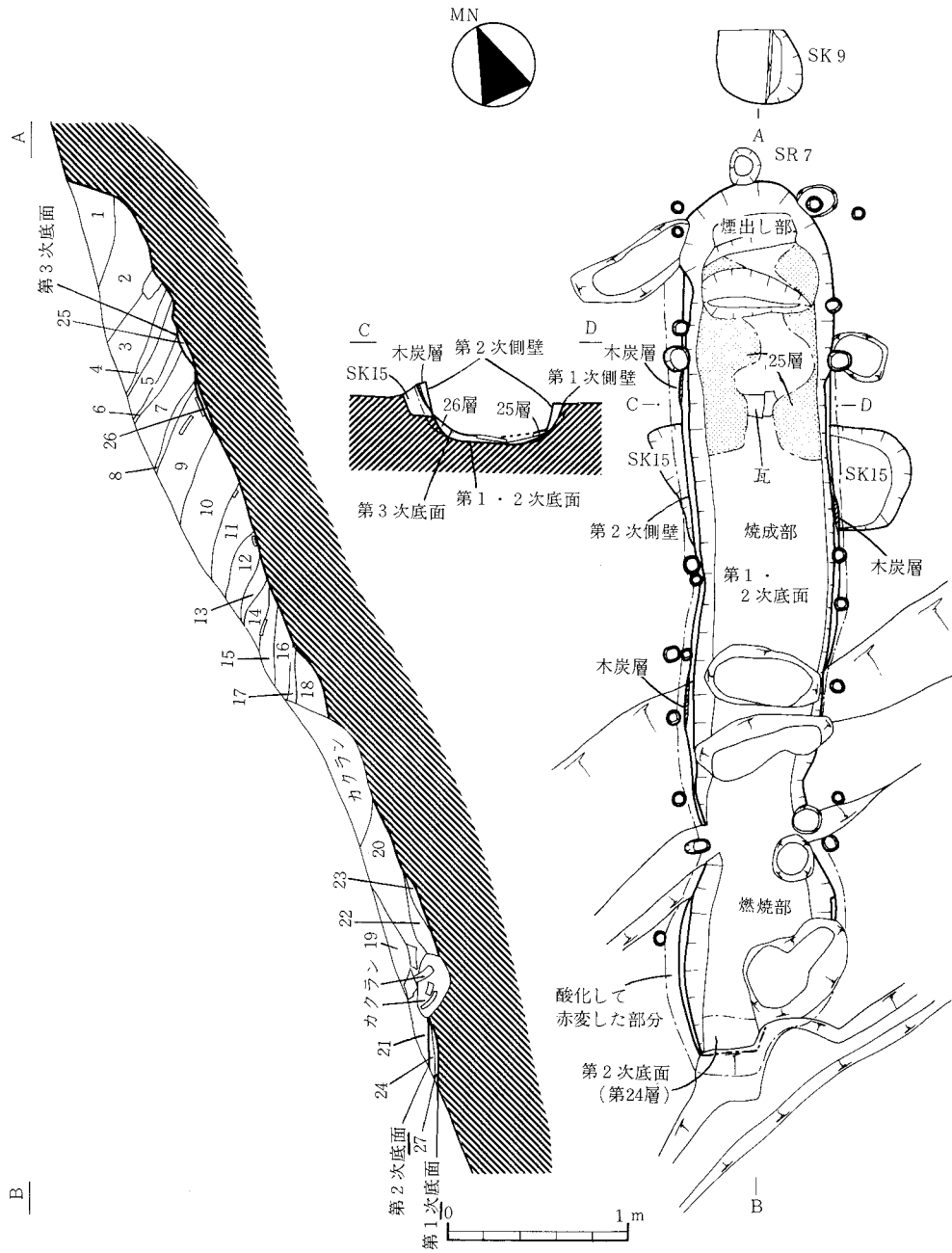
構造的には、SR1・2・4・7窯跡から窯天井部の崩落土とみられるササ入りの焼け粘土塊が出土していること、SR2～4・6・7窯跡では天井部構築の際の骨組である構架材を差し込んだと推定される小柱穴群を検出したことより、これらの窯はいずれも半地下式の窖窯と考えられた。以下、SR7窯跡から残存状況の良好な順に概要を説明する。

SR7窯跡 (第12～14図)

調査区東端部付近の地山面で検出した半地下式無階無段窖窯である。本窯跡の約2m東にはSR1窯跡、約5m西にはSR2窯跡が位置している。燃焼部南端部と燃焼部北端部から焼成部南半にかけて近世以降の削平を受けている。SK15土壇と重複し、これより新しい。

燃焼部、焼成部、煙出し部からなり、全長は約5.2mである。燃焼部と焼成部の境は平面形ではくびれがみられることより明瞭であるが、底面では傾斜の違いが認められるものの、明瞭な階は形成されていない。側壁・底面は硬く焼き締まっており、側壁では表面か

ら5～6cmの厚さで還元されて青灰色～淡黄色に変化し、その奥は厚さ5～6cmほどが酸化されて赤変している。



第12図 SR7窯跡・SK15土壌平面・断面図、SK9土壌平面図

燃焼部は平面形が楕円形をなし、長径(長さ)約1.3 m、短径(幅)約0.9 mである。側壁の高さは最も良好なところで16cm残存している。底面は2面認められ、燃焼部は1度修築されたことがわかる。当初の底面(第1次底面)は地山を掘りこんで作り出され、新しい底面(第2次底面)は、焚口部付近に堆積した前段階の燃料残滓の木炭層(断面図の第27層)上に粘土(第24層)を薄く貼り付けて作り出されている。第1次底面は焚口部から燃焼部中央へかけてはほぼ水平で、そこから焼成部へかけてゆるやかに立ち上がるが、第2次底面では粘土が焚口部を嵩上げするように貼り付けられているため、中央部が多少くぼんだ状態になっている。

焼成部は溝状で、両側壁がほぼ平行しており、長さ約3.8 m、幅0.7～0.8 mである。側壁の高さは最も良好なところで約35cm残存している。側壁や底面の状況から焼成部には2度の修築があったことがわかる。最初の修築は、地山を掘り込んで作り出した当初の側壁(第1次側壁)のほぼ全体に粘土を貼り付けて新たに側壁(第2次側壁)を作り出したものであり、この時底面は修築されておらず当初のままの地山面である。2度目の修築は焼成部北半部における底面の修築であり、その範囲は焼成部北端から南へ約1.2 mまでである。地山の底面(第1・2次底面)に堆積した木炭混じりの暗褐色土層(第26層)上に粘土(第25層)を貼り付けて新たに底面(第3次底面)を作り出している。いずれの底面も多少の凹凸はあるものの無段で、傾斜は第1・2次底面で測ると約24度である。

煙出し部は焼成部の先端にみられる。煙出し部の底面は高さ約10cm、奥行き約10cmの壇状となって奥壁に取り付いており、焼成部とは明瞭に区別される。この部分に煙出し孔が付いていたものと推定される。

窯跡の東西側壁の外側では、側壁に接するような状態で連続して並ぶ小柱穴を21個検出した。小柱穴群は径5～10cmほどで、その間隔は30～50cmである。これらは窯体を中心としてほぼ対称の位置にあることから、窯天井部構築時の骨組である構架材を差し込んだ痕跡とみられる。

堆積土は27層認められ、それらは最終焼成後の堆積層(第1～23層)と、それ以前の堆積層(第24～27層)に区別できる。最終焼成後の堆積層をみると、第1～22層では天井部崩落土層(第19・22層)や砂状となった側壁の崩壊土層(第4・6・8・11・13・15・17層)と、天井部・側壁のブロックを含む暗褐色土層(第2・5・7・9・16・18・20・21層)や暗褐色土が主体の層(第1・3・10・12・14層)が交互にくり返しながら窯の傾斜とは逆の傾斜で直接底面上に堆積している。こういった堆積状況は、焼成した瓦を窯内部から取り出す際に、燃焼部から焼成部へと天井や側壁を壊しながら行われていった状況を示すものと推定される。23層は燃焼部の第2次底面上に堆積した最終焼成時の燃料残滓とみられる木炭

層である。

遺物は軒平瓦・平瓦・丸瓦・須恵器・土師器が出土している。いずれも堆積層から出土したものであり、焼台に使用された瓦などはみられなかった。量的には圧倒的に平瓦が多く、丸瓦がこれにつき、軒平瓦や土器はごく少量である。ほかに第1～22層からは窯天井部のスサ入り焼け粘土塊が多量に出土している。

ところで、本窯跡から出土した平瓦には、今回の調査で出土した平瓦の全種類が存在し、その出土量も多い。そこで、ここで平瓦の分類をしておき、以下の記述はこの分類に従っておこなってゆきたい。

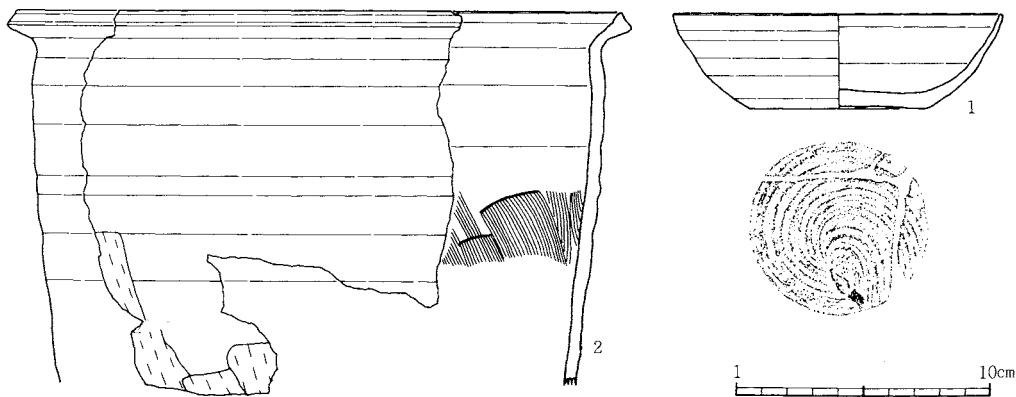
平瓦は桶巻作りのものが確認できないことより、すべて粘土板一枚作りとみられる。凸面の叩き原体の違いと凹凸両面の調整の違いにより次の4類に分類できる。

A類：凹面は重複のない布目で凸面に縄叩き目の残るもの(第14図2)。

B類：凹面の布目がナデ調整によりすり消され、凸面に縄叩き目を残すもの。縄叩き目はつぶれた状態のものが多い。また、凸面には凹型台の側端部圧痕や凹型台による方形突出(第14図6)のみられるものがある。

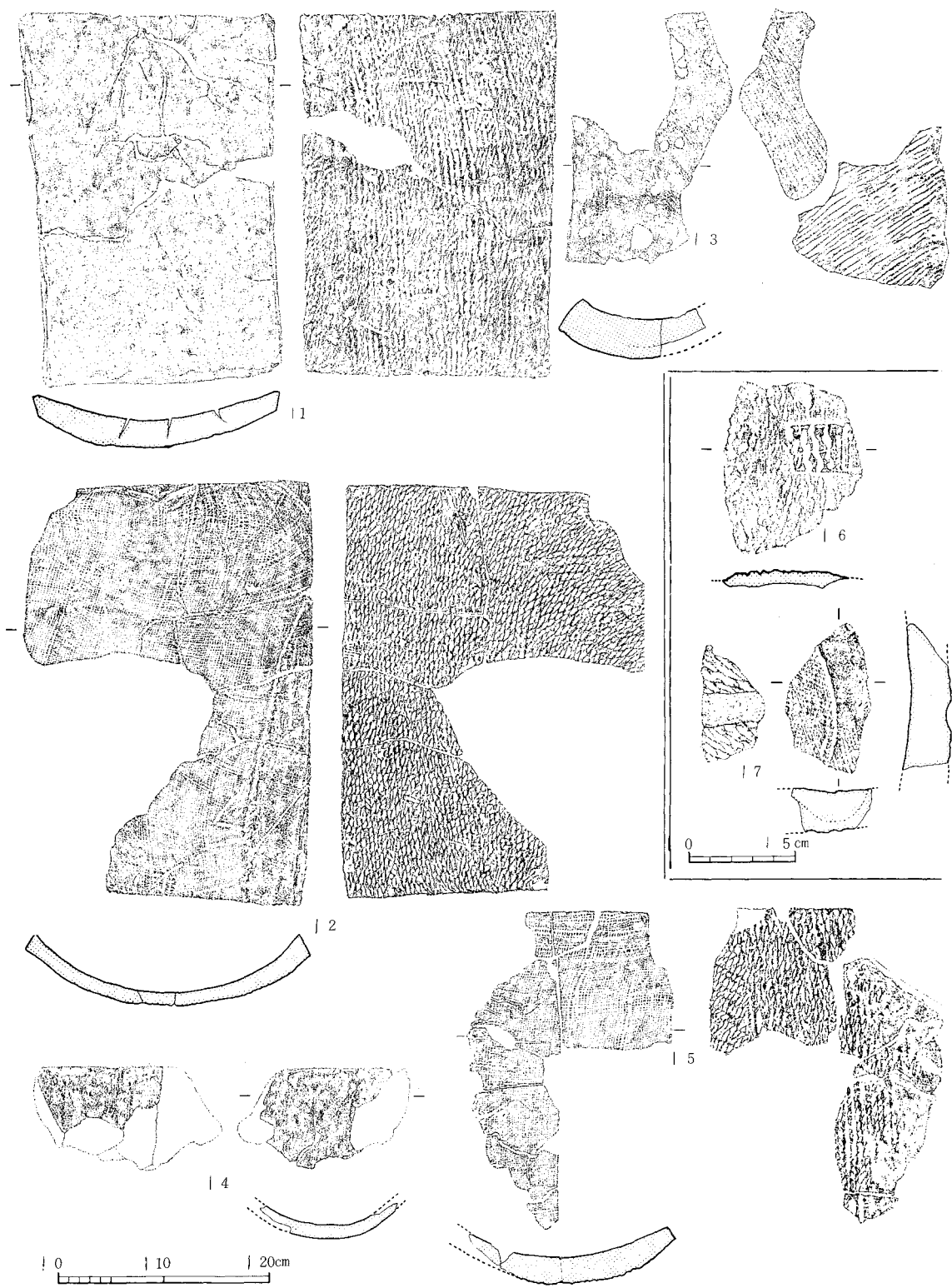
C類：凹面の布目がナデ調整によりすり消され、凸面に平行叩き目の残るもの。平行叩き目はつぶれた状態を示す(第14図3)。

D類：凹面の布目、凸面の縄叩き目がともにナデ調整によりすり消されているもの(第14図4)。



1	堆積土	須恵器	杯	底部糸切り無調整	2	堆積土	土師器	甕	ロクロ調整
---	-----	-----	---	----------	---	-----	-----	---	-------

第13図 S R 7 窯跡出土遺物①



第14图 SR 7 窠迹出土遺物②

地山の底面上に堆積した第26層からは平瓦片が6点出土しており、このうち4点がA類で他の2点は類不明なものである。最終焼成後の人為的堆積層である第1～22層から出土した遺物には、須恵器杯の底部～体部資料1点(第13図1)、口縁部破片3点、ロクロ調整の土師器甕の口縁部資料1点(第13図2)、瓦当面を欠く軒平瓦1点(第14図7)、ほぼ完形の平瓦B類(第14図1)2点のほか、平瓦片190点、丸瓦片24点がある。平瓦片の内訳はA類36点(第14図2)、B類80点、C類1点(第14図3)、D類1点(第14図4)、類不明なもの72点となる。このなかで、A類には平瓦を分割して熨斗瓦の製作を意図した資料(第14図5)、B類には凸面に凹型台による方形突出(第14図6)のみられる資料がある。丸瓦はいずれも破片資料であるが、確認できたものは粘土紐巻作りで、玉縁をもつ有段のものだけである。凸面の叩き目はすべて縄叩き目で、ロクロを利用してナデ調整されている。凹面には重複のない布目がみられる。こういった丸瓦の特徴は他の窯跡や第1層出土のものでも同様である。接合関係をみると、第26層出土の平瓦A類4点中3点が、第9・10・12層出土のものと同接合している。また、本窯跡の平瓦A類・B類各1例と丸瓦2例はS R 1窯跡堆積層(第1～6層)出土のもの、さらに丸瓦の1例はS K 9土壌出土のものと同接合している。

S R 1 窯跡 (第15図)

調査区東端部付近の地山面で検出した半地下式とみられる無階無段窖窯である。S R 7 窯跡の約2 m 東に位置している。全体的に削平が著しく、燃焼部南端が失われているほか、燃焼部と焼成部の境付近から焼成部南半にかけては幅1.5 mほどの範囲が完全に壊されている。

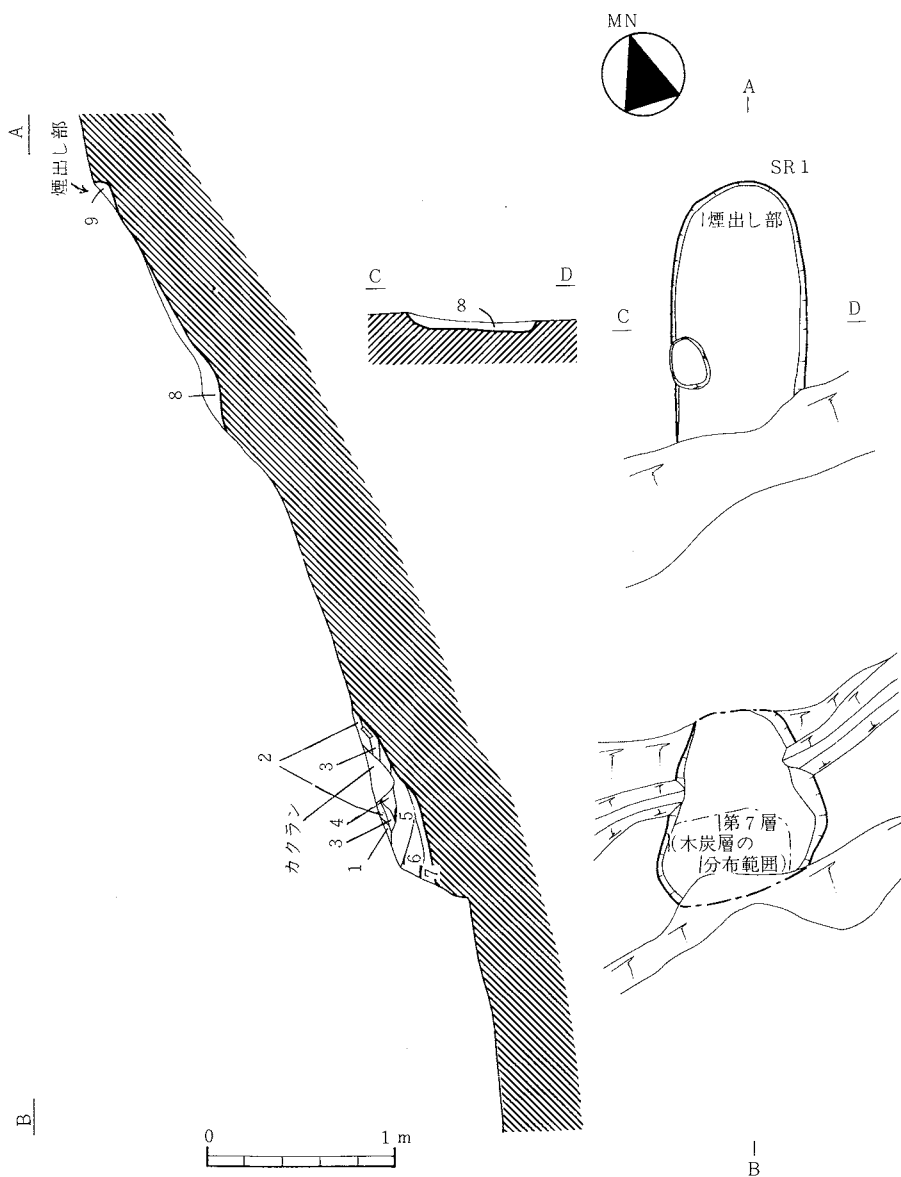
燃焼部、焼成部、煙出し部からなり、全長は燃焼部南端が壊されているものの煙出し部を検出していることから約4 mと推定される。燃焼部と焼成部の境は平面的には判然としないが、底面では傾斜の違いが認められる。明瞭な階は形成されていない。側壁・底面は、硬く焼け締まっており、燃焼部の側壁では表面から5 cmほどの厚さまで還元されて灰青色～淡黄色に変化し、その奥は厚さ5～10 cmほどが酸化のため赤変している。

燃焼部は平面形が南側で広がる歪んだ楕円形をなし、長径(長さ)1 m以上、短径(最大幅)約0.9 mである。側壁・底面ともに地山で、側壁の高さは最も良好なところで20 cm残存している。底面は焚口部から燃焼部中央へかけてわずかに傾斜し、そこから焼成部の境へかけてゆるやかに立ち上がる。

焼成部は溝状をなし、北半分で底面を1.2 mほど検出ただけであるが全体の規模は長さ約3 m、幅約0.7 mとみられる。側壁・底面ともに地山で、側壁の高さは最も良好なところで10 cm残存している。底面は無段で、傾斜は約26度である。

煙出し部は焼成部の先端にみられ、底面の傾斜の違いで焼成部と区別される。底面は焼成部より傾斜が弱くなり、約15cm続いて奥壁へ取り付いており、この部分に煙出し孔が付いていたものと推定される。

堆積土は燃焼部で7層、焼成部で1層、煙出し部で1層認められた。燃焼部の第7層は燃料残滓の木炭層である。第6～4層は天井部や側壁の崩壊土を主体とする層で、多量のスサ入り粘土塊が認められた。第3層は均質な暗褐色砂質土層で自然堆積層とみられる。



第15図 S R I 窯跡平面・断面図

第2・1層は天井・側壁ブロックの2次的堆積土である。第8層は焼成部の堆積層で褐色砂質土層、第9層は煙出し部の堆積層で木炭を多く含む褐色土層である。

遺物は堆積層から平瓦と丸瓦が出土している。焼台に使用された瓦などはみられなかった。燃焼部の第4～7層から平瓦片50点と丸瓦片29点、第1～3層から平瓦片10点と丸瓦片4点が出土している。平瓦は第4～7層にA類が2点、B類が15点、類不明なものが33点、第1～3層にA類が1点、B類が4点、類不明なものが5点ある。丸瓦は確認できたものはすべて粘土紐巻作り有段のもので、凸面の縄叩き目がロクロナデ調整されたものである。接合関係をみると、平瓦・丸瓦の各2例がSR7窯跡堆積層(第18・20層)出土のものと同接合している。

SR2窯跡 (第16・17図)

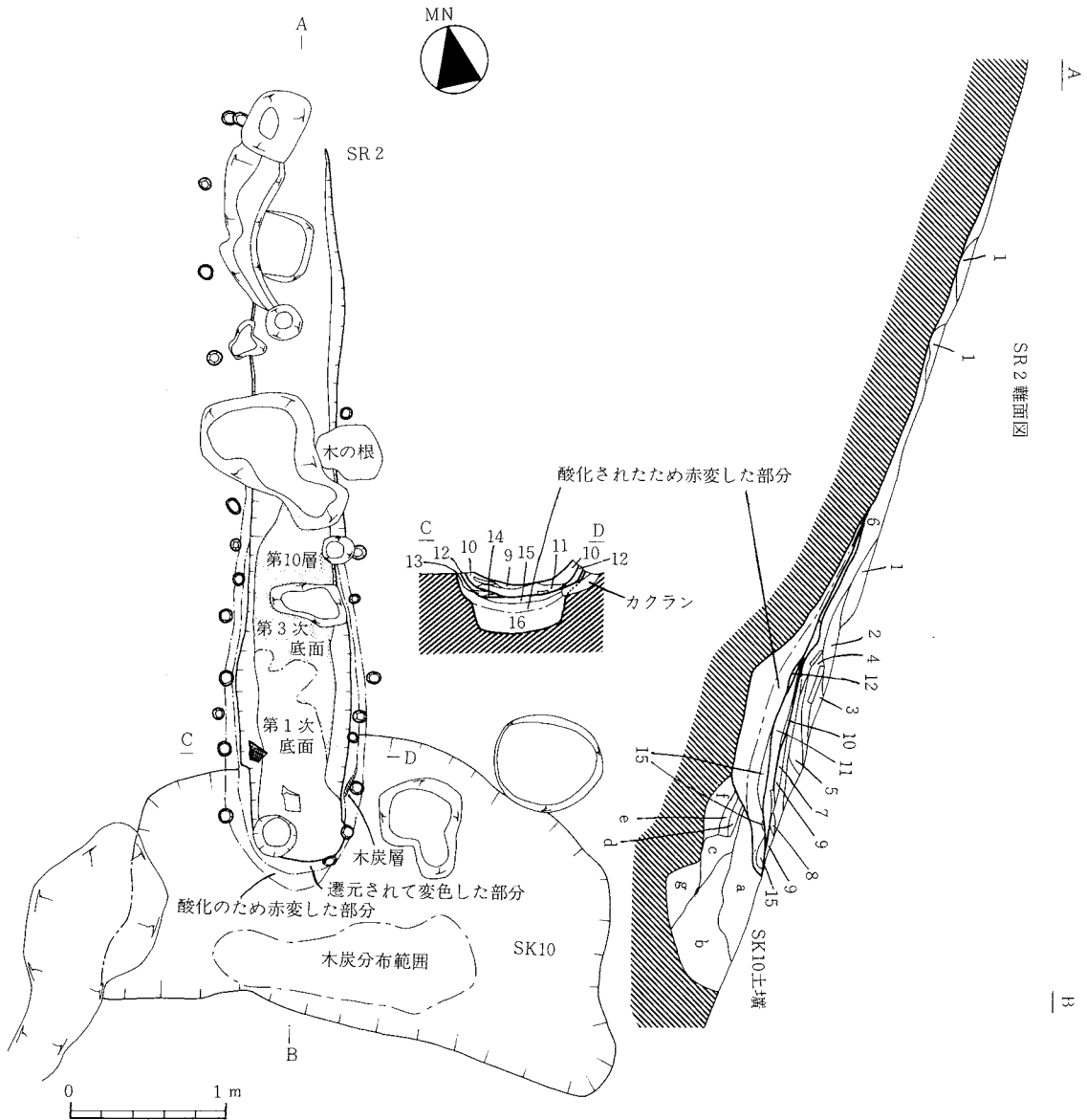
調査区東半部付近の地山面で検出した半地下式無階無段窰である。SR7窯跡の約5m西に位置し、約2.7m西にはSR3窯跡が位置する。全体的に削平を受けており、とくに焼成部の先端は完全に失われている。SK10土壌と重複し、これより新しい。

燃焼部と焼成部を検出しており、全長は残存部分で約5mである。燃焼部と焼成部の境は平面的には判然としないが、底面では傾斜の違いが認められる。明瞭な階は形成されていない。側壁・底面は硬く焼き締まっており、側壁では表面から5～6cmの厚さで還元されて灰青色～淡黄色に変化し、その奥は厚さ5～10cmほどが酸化のため赤変している。

燃焼部は平面形が楕円形をなし、長径(長さ)約1.5m、短径(幅)約0.8mである。側壁の高さは最も良好なところで20cm残存している。側壁、底面のいずれにも3面認められ、燃焼部には2度の修築があったことがわかる。最初の燃焼部の構築にあたっては、底面(第1次底面)は地山を掘りこんだ後、一部土を埋め戻し(第16層)、焚口部付近にはその上面に粘土(第15層)を貼り付けて作り出されている。側壁は地山そのままである。最初の修築では、燃焼部北半で第1次底面上に堆積した燃料残滓の木炭層(第14層)やその上に堆積した天井部・側壁の崩落土(第13層)上に粘土(第12層)を薄く貼り付けて底面(第2次底面)と側壁を作り出している。2度目の修築は第2次底面上に堆積した燃料残滓の木炭層(第11層)上にさらに粘土(第10層)を貼り付けて底面(第3次底面)と側壁を作り出したもので、底面の修築範囲は焚口部を除く燃焼部全体にわたる。側壁には瓦を塗り込めている部分がある。底面の傾斜は、第1次底面でみると焚口部から燃焼部中央まではほぼ水平であるがそこから焼成部へかけてはゆるく立ち上がる。第2・3次底面では燃焼部中央から焼成部へかけての部分をそれぞれ嵩上げたかたちになるため、燃焼部中央から焼成部へかけての傾斜が順次なだらかになっている。

焼成部は溝状で、北端部が完全に削平されているため全長は不明であるが、残存してい

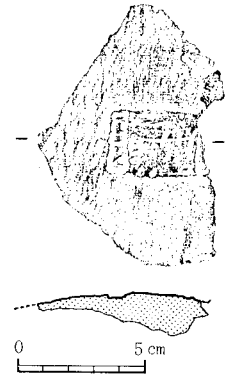
る長さは約3.5m、幅約0.6mである。側壁は地山で、高さは最も良好なところで13cm残存している。底面は南端部では2面、その北では1面認められた。南端部の当初の底面は地山を掘りこみ、その後一部土を埋め戻して作り出されており、 combustion部の第1次底面に続くものと考えられる。新しい底面は当初の底面上に粘土を薄く貼り足して作り出されており、これが combustion部の第2次底面に続くものなのかあるいは第3次底面に続くものなのかは判然としなかった。北で認められた底面は地山である。いずれの底面も無段で、その傾斜は、地山の底面で測ると約20度である。



第16図 SR2 窯跡、SK10 土壌平面・断面図

窯跡の東西側壁の外側では、側壁に接するような状態で連続して並ぶ小柱穴を22個検出した。小柱穴群は径5～10cmほどで、その間隔は10～50cmである。これらは窯体を中心としてほぼ対称の位置にあることより窯天井部構築時の骨組である構架材を差し込んだ痕跡とみられる。

堆積土は16層認められた。このうち第16層は燃焼部構築時に地山を掘りこんだ後埋め戻された暗褐色土と明黄褐色細砂の混合層で、上部の約10cmは赤みを帯びている。第15層は第1次底面を作り出す際に貼り付けた黄橙色砂質粘土層、第14層は燃料残滓の木炭層、第13層は天井部・側壁のブロックを含む明黄褐色砂質土層、第12層は第2次底面・側壁を作り出す際に貼り付けた黄橙色砂質粘土層、第11層は燃料残滓の木炭層、第10層は第3次底面・側壁を作り出す際に貼り付けた灰白色砂質粘土ブロックを含む黄色砂質粘土層、第9層は燃料残滓の木炭層、第8～1層は天井部・側壁のブロックを含む褐色・暗褐色・灰褐色土層などで、多量のスサ入り焼け粘土が混じっている。



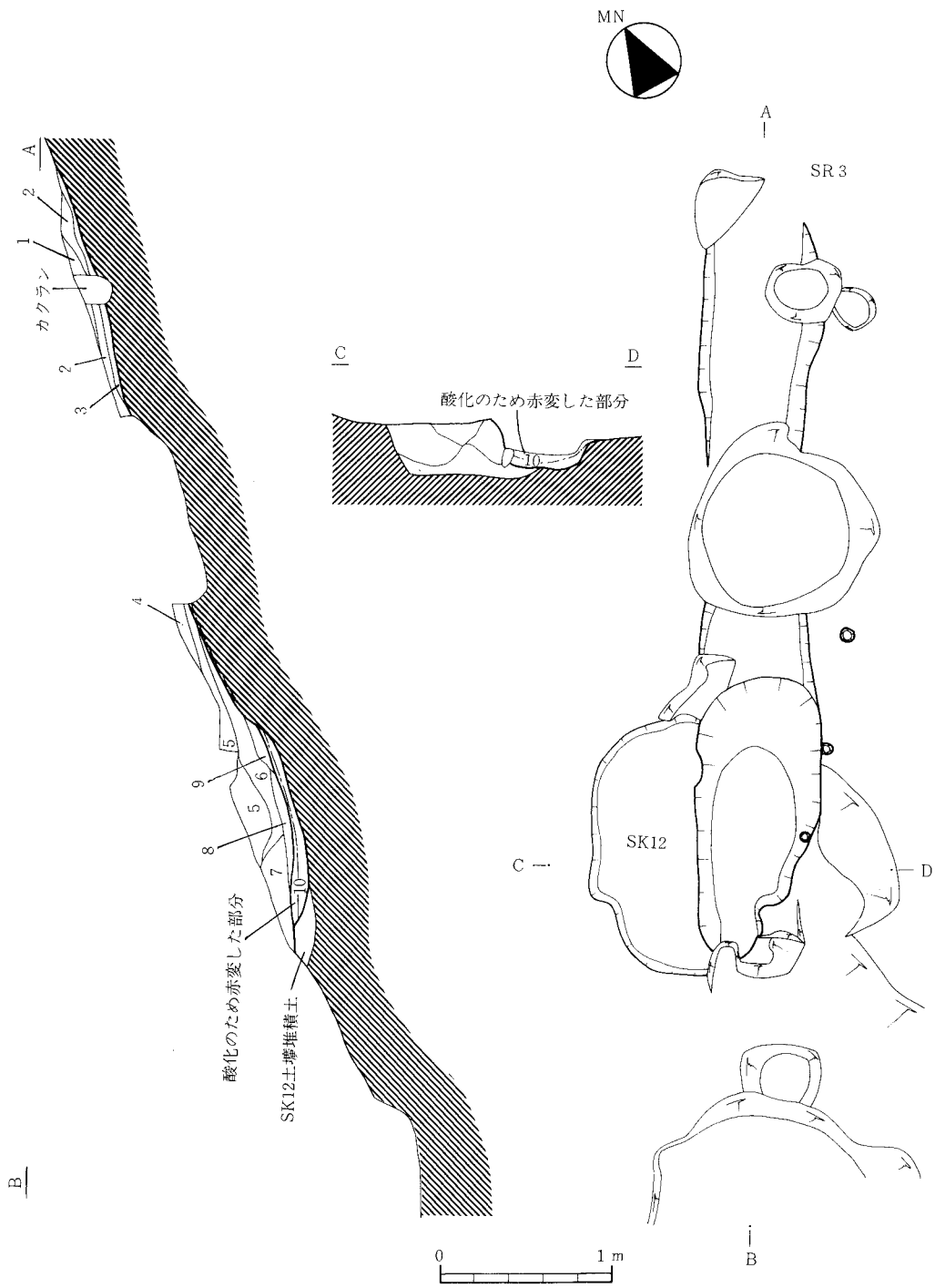
第17図 S R 2 窯跡
出土遺物

遺物は堆積層から平瓦と丸瓦が出土している。焼台に使用された瓦などはみられなかった。いずれも破片資料で、平瓦が182点、丸瓦が9点ある。層的には、第1次底面を作り出した第15層から平瓦のB類が2点、類不明なものが1点、丸瓦が1点、第2次底面を作り出した第12層から平瓦の類不明なものが1点、第11層から平瓦のA類が1点、B類が5点、類不明なものが3点、第3次底面を作り出した第10層から平瓦のB類が2点、第8～1層から平瓦のA類が5点、B類が65点、類不明なものが97点、丸瓦が8点出土している。このうち第6層の平瓦には、平瓦B類の凸面に凹型台による方形突出のみられる資料が1点ある(第17図)。

S R 3 窯跡 (第18図)

調査区東半部の地山面で検出した半地下式無階無段窖窯である。S R 2 窯跡の約2.7 m西に位置し、約3.5 m西にはS R 4 窯跡が位置する。全体的に削平を受けており、とくに焼成部の先端は完全に失われている。また、焼成部の南半は径1.1 mほどの円形の攪乱穴により壊されている。S K 12土壌と重複し、これより新しい。

燃焼部と焼成部を検出しており、全長は残存部分で約4.8 mである。燃焼部と焼成部の境は平面的には判然としないが、底面では傾斜の違いが認められる。明瞭な階は形成されていない。側壁・底面は表面が硬く焼き締まって赤変している。



第18図 SR3 窯跡、SK12 土層平面・断面図

燃焼部は平面形が楕円形をなし、長径(長さ)約 1.7 m・短径(幅)約 0.7 m である。側壁は地山で、高さは最も良好なところで 25cm 残存している。底面は地山を掘りこんだ後、一部を埋め戻して作り出されており、焚口部から燃焼部中央まではほぼ水平であるが、そこから焼成部の境にかけてはゆるやかに立ち上がる。

焼成部は溝状をなし、先端部が完全に削平されているが、長さ 3.0 m 以上、幅約 0.7 m である。側壁・底面ともに地山で、側壁の高さは最も良好なところで 10cm 残存している。底面は無段で、傾斜は約 18 度である。

窯跡の東側壁の外側では側壁に沿って 50cm ほどの間隔で並ぶ径 5～10cm の小柱穴を 3 個検出した。これらは位置関係などから S R 2・7 窯跡の小柱穴群と同様に窯の天井部構築時の骨組である構架材を差し込んだ痕跡とみられる。

堆積層は 10 層認められた。第 10 層は燃焼部の底面を作り出す際に埋め戻した木炭・焼土粒を少量含む明褐色砂質土層で、上部が赤変している。第 9・8 層は焼土主体の褐色土層で、天井部や側壁のブロックを含む。第 7 層は均質な黄褐色砂質土層。第 6～1 層は木炭・焼土粒を少量含む黄褐色・明褐色・暗褐色土層である。

遺物は出土していない。

S R 4 窯跡 (第 19 図)

調査区東半部の地山面で検出した半地下式無階無段窖窯である。S R 3 窯跡の約 3.5 m 西に位置し、約 8.5 m 西には S R 5 窯跡が位置する。全体的に削平を受けており、とくに焼成部の先端は完全に失われている。また、焼成部の中央部も約 30cm 幅で底面まで削平され、途切れている。S K 13 土壌と重複し、これより新しい。

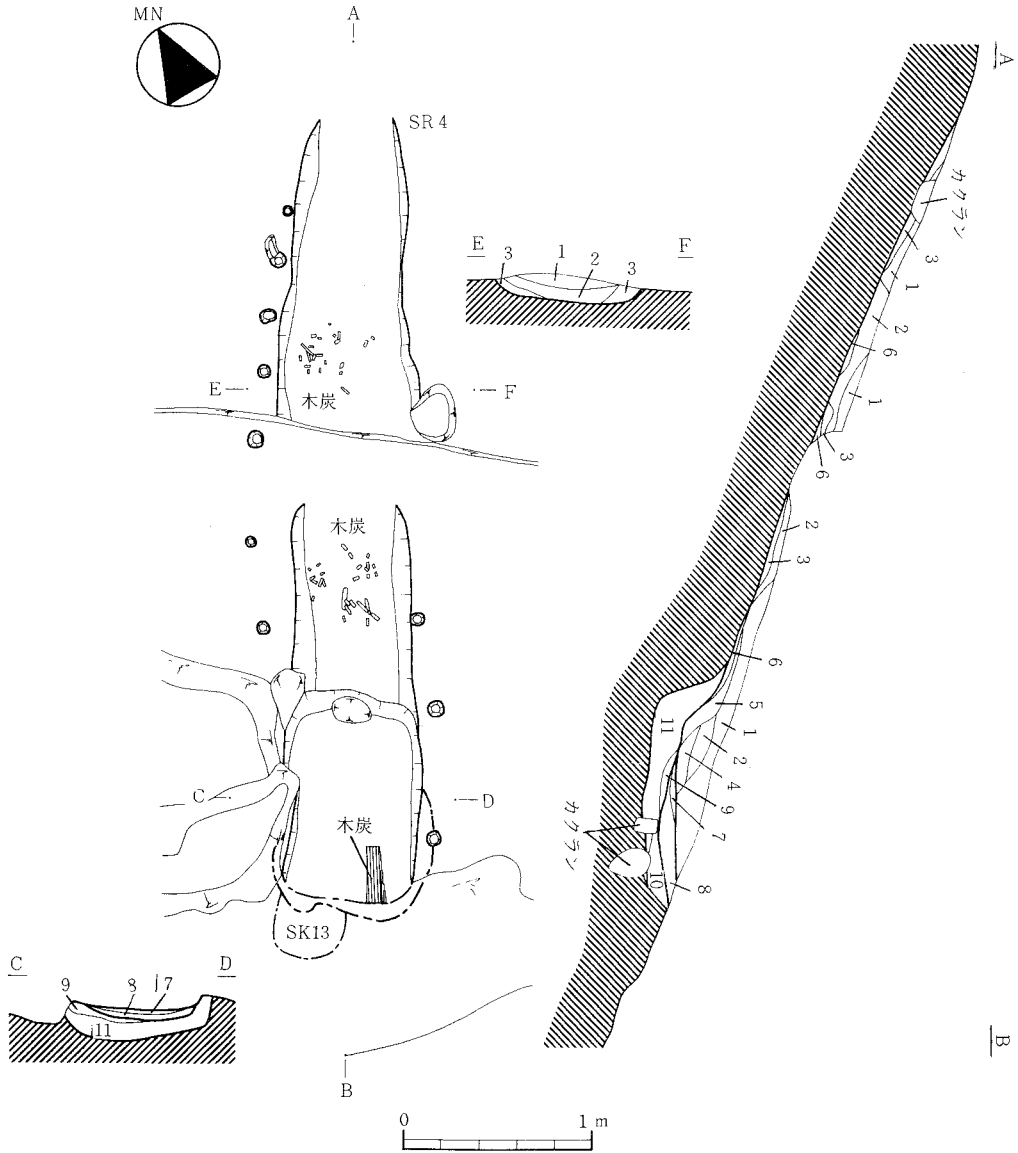
燃焼部と焼成部を検出しており、全長は残存部分で約 4.6 m である。燃焼部と焼成部の境は平面的には判然としないが、底面では傾斜の違いが認められる。明瞭な階は形成されていない。側壁・底面は表面が硬く焼け締まって赤変している。

燃焼部は長さ約 1.1 m、幅約 1.7 m の隅丸方形をなし、側壁は地山で、高さは最も良好なところで 14cm 残存している。底面は 2 面認められ、燃焼部は 1 度修築されたことがわかる。当初の底面(第 1 次底面)は地山を掘りこんだ後一部土(第 11・10 層)を埋め戻し、その上面に燃焼部中央付近を中心に粘土(第 9 層)を貼り付けて作り出されている。新しい方の底面(第 2 次底面)は、第 1 次底面上に堆積した燃料残滓の木炭層(第 8 層)上面に粘土(第 7 層)を貼り付けて作り出されている。底面は第 1・2 次底面とも焚口部から中央部にかけてはほぼ水平で、そこから焼成部へかけては比較的急に立ち上がる。焚口部には長さ 30cm・幅約 10cm の炭化材がみられた。

焼成部は溝状をなし、先端部が完全に削平されているが、長さ 3.4 m 以上、幅約 0.7 m

である。側壁・底面ともに地山で、側壁の高さは最も良好なところで14cm残存している。底面は無段で、傾斜は約22度である。中央部から南半にかけての底面上には木炭層が斑状に認められた。

窯跡の東西側壁の外側では、側壁に接するような状態で並ぶ小柱穴を東で3個、西で7個検出した。小柱穴群は径5～10cm、間隔が20～50cmほどで、位置関係などからSR2・3・7窯跡と同様に窯の天井部構築時の骨組である構架材を差し込んだ痕跡とみられる。



第19図 SR4窯跡平面・断面図、SK13土壙平面図

堆積土は11層認められた。第11層は焼土を少量含む黄褐色土と暗褐色土の混じった層、第10層は径2～3mmの礫を含む暗褐色土層、第6層は焼成部底面上に堆積している木炭層、第5～3層は天井部と側壁が崩落した状態で堆積した層、第2・1層はにぶい黄褐色・褐色土層である。

遺物は出土していないが、第3～5層からはスサが多量に混じった天井部・側壁のブロックが出土している。

S R 5 窯跡 (第20図)

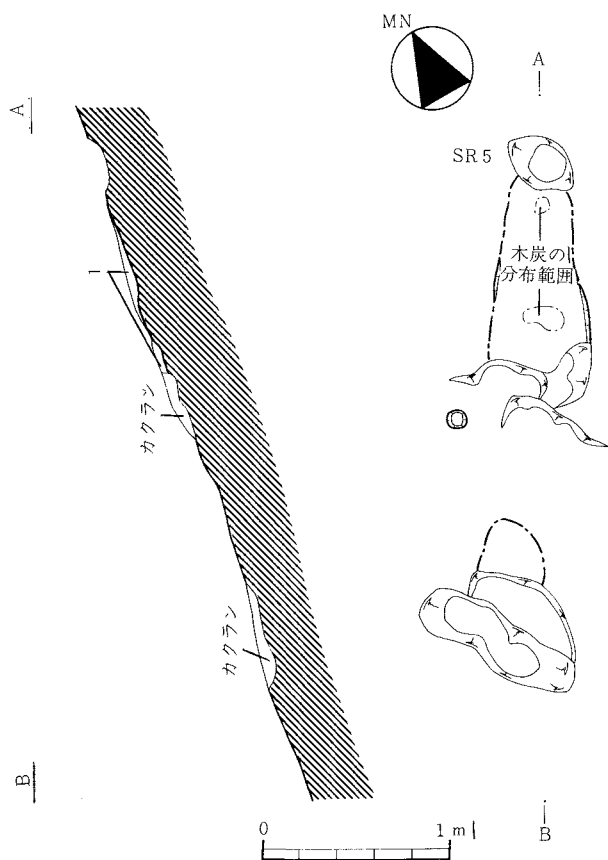
調査区中央部の地山面で検出した半地下式の無段窖窯である。S R 4 窯跡の約8.5 m西に位置し、約1.9 m西側にはS R 6 窯跡が位置する。著しい削平のため、残存状況が極めて悪く、南北に分断された焼面を検出しただけである。このうち北側の焼面上には堆積層がみられたことからこれが焼成部の底面と判断できるが、南側の焼面は堆積層が存在しないことからすでに底面まで削平されたものとみられる。削平のため燃焼部と焼成部の境に階が形成されていたかどうかは不明である。

残存状況が悪いため全体の規模は不明で、焼面の広がりも途中で分断されているが南北(長さ)約2.2 m、東西(幅)約0.5 mである。

南側の焼面は燃焼部底面の位置を反映しているとみられ、その範囲は南北(長さ)約0.3 m、東西(幅)約0.4 mである。

焼成部は長さ約1 m、幅約0.5 mほど残存している。底面は地山を掘りこんで作り出されており、無段である。表面は硬く焼き締まっており、底面上には木炭層が斑状に分布している。底面の傾斜は約19度である。

堆積層は焼成部で1層認められ、窯壁のブロックを含む暗褐色



第20図 S R 5 窯跡平面・断面図

色土層である。

遺物は出土していない。

S R 6 窯跡 (第21図)

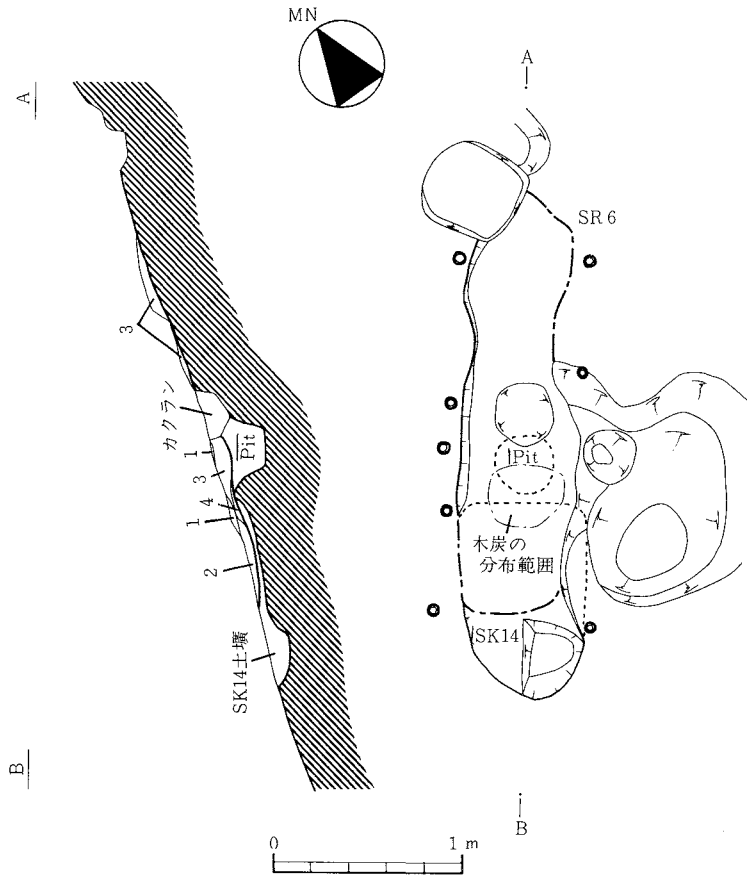
調査区中央部の地山面で検出した半地下式無階無段窖窯である。S R 5 窯跡の約 1.9 m 西に位置している。著しい削平のため、残存状況が極めて悪く、かろうじて燃焼部から焼成部南半の底面を検出できただけである。S K 14 土壌と重複し、これより新しい。

残存状況が悪いため全体の規模は不明で、残存部分は長さ約 2.3 m、幅約 0.7 m である。燃焼部と焼成部の境は平面的には判然としないが、底面には傾斜の違いが認められる。明瞭な階は形成されていない。側壁・底面は表面が硬く焼き締まって赤変している。

燃焼部は平面形が歪んだ方形をなし、長さ約 0.6 m、幅 0.6 m である。側壁・底面ともに地山で、側壁の高さは最も良好なところでも 5 cm 残存しているにすぎない。底面は焚口部から中央へかけてはほぼ水平であるが、そこから焼成部へはゆるやかに立ち上がる。

焼成部は北半部が完全に削平されて入るが、残存部分で長さ約 1.8 m、幅 0.7 m である。側壁・底面ともに地山で、側壁の高さは最も良好なところで 10 cm 残存している。底面は無段で、傾斜は約 20 度である。

窯の東西側壁の外側では、側壁に接するような状態で連続して並ぶ小柱穴を西で 5 個、東で 3 個検出した。これらの小柱穴群は径 5 ~ 10 cm、間



第21図 S R 6 窯跡、S K 14 土壌平面・断面図

隔が20~70cmほどであり、位置関係などからみて、SR2~4・7窯跡と同様に窯天井部構築時の骨組である構架材を差し込んだ痕跡とみられる。

堆積層は4層認められた。第4層は燃料残滓とみられる木炭層、第3層は天井部・側壁の小ブロックや木炭・焼土を含む褐色土層、第2層は焼土を含む黄褐色土層、第1層はにぶい黄褐色土層である。

遺物は出土していない。

(2) 土 壙

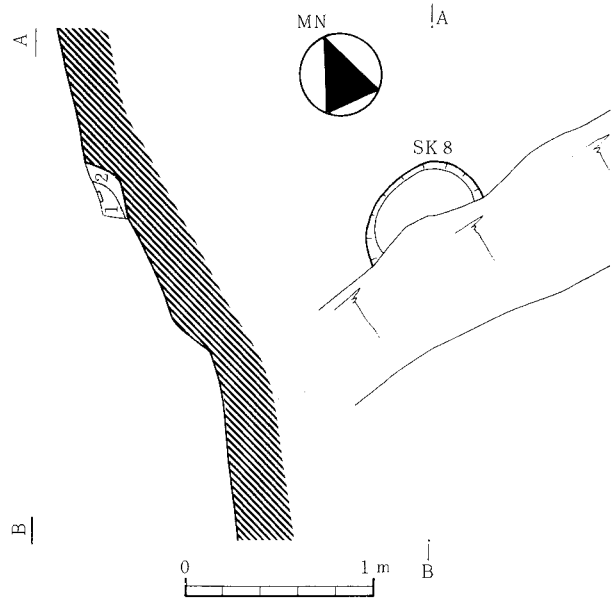
土壙は8基検出している。分布にはとくにまとまりはない。検出面はSK11土壙が旧表土上面で、他はすべて地山面である。

SK8土壙 (第22・23図)

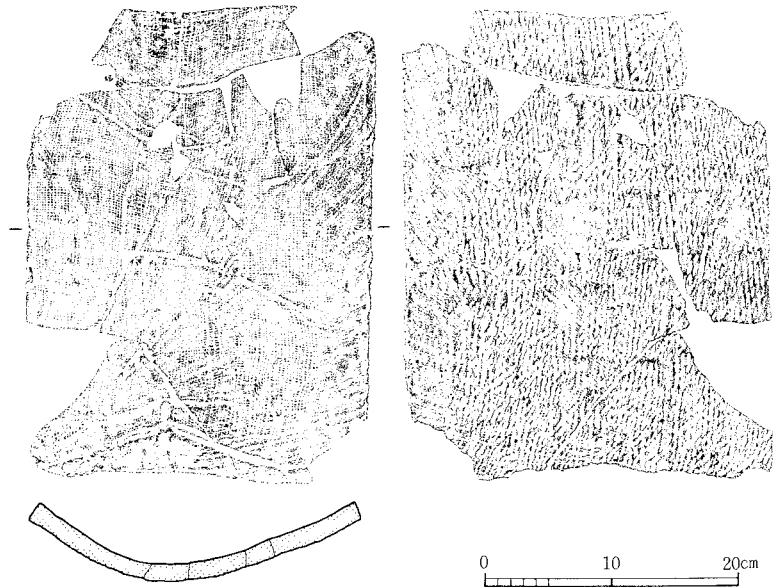
調査区東端部付近の地山面で検出した土壙である。SR7窯跡の約2m東に位置する。南半部は完全に削平されており残存し

ていない。平面形は楕円形をなすとみられ、残存部分の規模は南北約55cm、東西約60cm、深さ約17cmである。

堆積層は2層みられる。第1層は多量の木炭と少量の焼土を含む極暗褐色土層、第2層は比較的均質で非常に硬い暗褐色砂質土層である。



第22図 SK8土壙平面・断面図



第23図 SK8土壙出土遺物

遺物は第1層からほぼ完形の平瓦A類1点(第23図)、平瓦A類破片1点、平瓦類不明1点が出土している。

本土壌では明瞭な焼面が認められなかったが、第1層に瓦や木炭・焼土が含まれること、第2層が硬くその上面の状態や傾斜が他の窯跡の燃焼部底面と類似することから、第2層を燃焼部の掘り方を一部埋めもどした層、第1層を燃焼部の堆積層とみることもでき、瓦窯跡の一部である可能性も高いと考えられる。

S K 9 土壌 (第12図)

S R 7 窯跡の煙出し部北側の地山面で検出した小土壌である。北端部が調査区以外へさらに延びているため全形をとらえられないが、平面形は不整楕円形をなすとみられる。検出部分の規模は長径(南北)約40cm、短径(東西)約46cm、深さ約8cmである。底面は浅い皿状をなす。堆積土は暗褐色砂質土層1層である。

遺物は平瓦B類の破片2点、丸瓦の破片1点が出土している。この丸瓦はS R 7 窯跡第2層出土のものと接合する。

S K 10 土壌 (第16図)

調査区東半部の地山面で検出した土壌である。S R 2 窯跡の燃焼部南半と重複し、これより古い。平面形は不整形をなし、規模は東西約3m、南北約1.9m、深さ0.5～0.6mである。断ち割り調査をした結果、底面は南壁際が一段深く掘りこまれており、壁はゆるやかに立ち上がる。

堆積土は明黄褐色・にぶい黄橙色・褐色・暗褐色の砂質土層で7層に区分される。

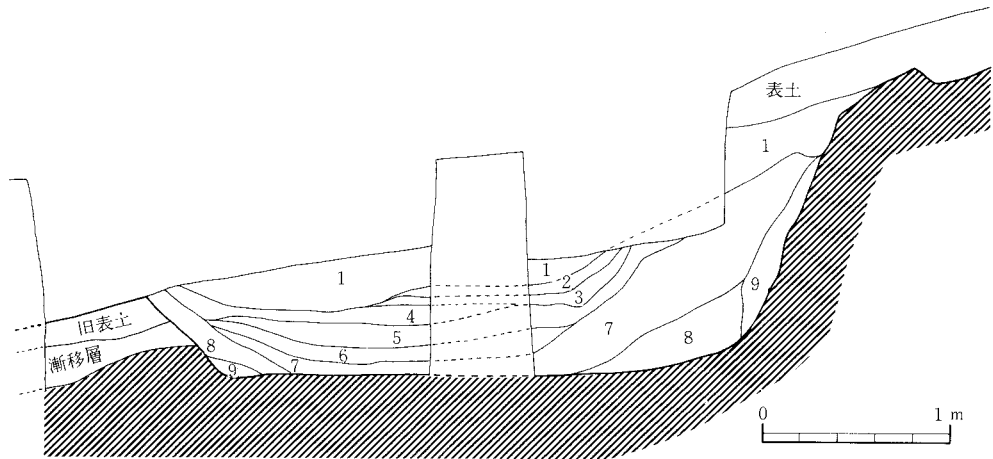
遺物は出土していない。

S K 11 土壌 (第24図)

調査区中央部南半部の旧表土上面および地山面で検出した土壌である。斜面の上方にあたる北半部は地山面で、南半部は厚さ約20cmの旧表土とみられる均質な暗褐色土層の上面で検出した。

平面形は多少歪んだ円形をなし、径約4mである。深さは北壁で最も深く約1.6m、最も浅い南壁では約0.5mである。底面は平坦で、平面形が長径(東西)約3.2m、短径(南北)約2.3mの不整楕円形をなす。壁は北側ほど傾斜が急であり、南壁はゆるやかに立ち上がる。

堆積土は9層に分けられ、いずれも自然流入土とみられる。第9層は暗黄褐色地山ブロックを含む暗褐色粘土質土層、第8層は0.5cmほどの小礫を含む暗褐色粘土質土層、第7層は褐色土層、第6層は降下した灰白色火山灰の堆積層、第5～4層は流入した灰白色火山灰層、第3層は灰白色火山灰ブロックを少量含む漆黒色土層、第2・1層は均質な黒褐



第24図 S K 11土壤断面図

色・漆黒色の細砂質土層である。

遺物は第7層から丸瓦の玉縁部破片が1点出土している。

本土壤は灰白色火山灰の1次堆積層(第6層)がみられることから、火山灰の降下時にはまだ大きくぼみ状をなしていたことがわかる。

S K 12土壤 (第18図)

S R 3 窯跡と重複し、これより古い土壤である。東半部をS R 3 窯跡の燃焼部に壊されているが、平面形は楕円形をなすとみられる。残存部分の規模は長径(南北)約1.6 m、短径(東西)約1.2 m、深さ約30cmである。底面は平坦で壁は直線的に立ち上がる。

堆積土は3層に分けられる。第3層は硬い暗褐色砂質土層、第2層は明黄褐色砂質土層、第1層は明黄褐色地山ブロックを含む暗褐色砂質土層である。

遺物は出土していない。

S K 13土壤 (第19図)

S R 4 窯跡と重複し、これより古い土壤である。北半部をS R 4 窯跡の燃焼部によって壊されているが、平面形は径約40cmの円形をなすとみられる。深さは断ち割りを実施していないため不明である。堆積土は黒褐色土層1層である。

遺物は出土していない。

S K 14土壤 (第21図)

S R 6 窯跡と重複し、これより古い土壤である。S R 6 窯跡の燃焼部と重複し、これにほぼ全体を壊されている。平面形は南側が丸味を持つ不整形をなし、南北約1 m、東西約0.7 m、深さは一段深く掘りこまれた南壁側で12cmほどである。

堆積土はにぶい黄橙色砂質土層1層である。

遺物は出土していない。

S K 15土壙 (第12図)

S R 7 窯跡と重複しこれより古い土壙である。S R 7 窯跡の焼成部に中央部を完全に壊されている。平面形は不整楕円形をなし、長径(東西)約1.5 m、短径(南北)0.6 mで、深さは西壁際で約15cmである。底面は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。

堆積土は褐色砂質土層1層である。

遺物は出土していない。

(3) 溝 跡

S D 16溝 (第11図)

調査区西半部～西端部の地山面で検出した東西溝である。西端部はさらに調査区へ延びている。長さ14mほど検出している。2箇所では0.5～1 mほど途切れているが断面形・埋土の様相などより一連の溝と考えられる。幅約30cm、深さ約20cmで断面形は逆台形をなす。堆積土は暗褐色砂質土層1層である。

遺物は出土していない。

(4) 第1層出土の遺物

第1層出土の遺物には多量の瓦類と少量の須恵器・土師器があり、このほかに砥石2点、と少量の陶磁器がある。瓦類には、軒丸瓦1点(第25図1)、平瓦409点、丸瓦85点、隅切瓦1点がみられる。このうち、軒丸瓦は瓦当周縁部の小破片であるが、沈線で区画された複弁状の花弁にやはり沈線で区画された棒状の細長い子葉をもつ文様で、間弁が周縁に接続しているなどの特徴がある。平瓦はほぼ完形に近いB類1点(第25図2)以外はすべて破片資料であり、平瓦A類71点(第25図3)、平瓦B類194点(第25図4)、平瓦C類2点(第25図5)、類不明なもの141点となる。丸瓦もすべて破片資料であり、粘土紐巻作りの有段のものである。隅切瓦(第25図6)は切り取られた側縁部の小破片であり、用いられている平瓦はB類である。このほかに平瓦B類には凸面に方形突出のみられるもの(第25図7)がある。須恵器は甕の口縁部破片と体部破片が各1点出土している。いずれも小破片で全体の特徴は把握できない。土師器は甕の体部破片が3点出土しており、これらはS R 7 窯跡第1～22層出土の甕(第13図2)と同一個体とみられる。陶磁器はいずれも小破片であり、近世以降のものである。



第25図 第1層出土遺物

5. 考 察

今回の調査は合戦原瓦窯跡の分布状況や規模・構造およびその年代を把握するとともに、この瓦窯群で生産された瓦の供給関係の解明を目的としたものである。調査の結果、残存状況はあまり良好とはいえないものの7基の窯跡を検出した。これらから出土した遺物はほとんどが瓦類であり、須恵器の出土量は極めて少量であることから、本地区の窯跡群は瓦専用窯であったと考えられる。以下、これらの瓦窯跡の分布状況、規模・構造、年代、瓦の供給関係の順に検討してみたい。

(1) 瓦窯の分布状況

7基の窯跡は丘陵南斜面中腹部の東西30mほどの範囲に、標高122mの等高線に沿うようにして重複することなく1列に並んで分布している。

まず、瓦窯群全体の分布範囲と規模について検討してみたい。今回の発掘調査により瓦窯跡はSR6窯跡の西側には分布していないことが確認された。これに対して東側では、前述したように調査区東端のSK8とした土壌が瓦窯跡の一部である可能性が高いことや、地形的にみてかつては同じ傾斜をもつ斜面がさらに20mほど東まで続いていたとみられることなどから、SR1窯跡の東にも数基の瓦窯が存在したものと考えられる。したがって、瓦窯の分布範囲は東西50mほどにわたるものと推定され、全体としては10数基からなる瓦窯群であったとみられる。

つぎに検出された窯跡の位置関係をみると、まず調査区東端付近に約2.0m間隔でSR1窯跡とSR7窯跡が、その西側約5mの斜面やや上方には約2.7m間隔でSR2窯跡とSR3窯跡が、そのまた約3.5m西側の斜面やや下方にはSR4窯跡が、そしてさらに西側約8.5mの斜面やや上方には約1.9m間隔でSR5窯跡とSR6窯跡がそれぞれ位置している。このようにSR1とSR7、SR2とSR3、SR5とSR6は互いに近接し、斜面に対して燃焼部の位置と方向をほぼそろえて並んでいる。また、SR4についてはその西側に未調査部分を残しており、ここにもう1基の窯跡が存在する可能性もある。したがって、本瓦窯では2～3m離れて並ぶ2基1組の窯を1つの単位とし、これがおおむね4～5mの距離をおいて何単位か配されるといった構成をとるものと推定される。

このなかの1単位となっているSR1とSR7では、それぞれの堆積層から出土した平瓦・丸瓦に接合例がみられることから、両瓦窯の廃絶時期に大きな差はなかったと考えられる。

(2) 瓦窯の規模・構造

検出した7基の窯跡のうちほぼ全形が確認されたのは、SR1とSR7だけである。以

下これらの窯跡を中心とし、他の窯跡については表2に示した残存部分の状況を参考にし、て窯の規模・構造をみてゆく。

窯跡は燃焼部、焼成部、煙出し部からなり、全長はSR7が約5.2m、SR1が約4mで、両者とも比較的小規模である。ほかではSR2～4窯跡で長さ4.6～5.0mほど残存しているのが確認できたのみである。

燃焼部は中央でややふくらみをもつ楕円形を基調とするものが多い。規模は最も大きいSR3で長さ約1.7m・最大幅約0.7mであり、ほかでは長さ1.2～1.5m、最大幅0.7～0.9mの範囲におさまっている。

焼成部は両側壁がほぼ平行する溝状をなし、幅は0.6～0.8mとほぼ一定であるが、長さはSR1が約3.0m、SR7が約3.8mである。また、SR2～4では3.1～3.5mほど残存しており、いずれも3m以上の長さをもつ。

煙出し部はSR1とSR7で検出しており、長さはそれぞれ約0.15m、0.10mである。つぎに各窯跡の構造について検討する。

SR1・2・4・7窯跡では堆積層から天井部・側壁の崩壊土であるスサ入り焼け粘土塊が多量に出土している。したがって、これらが半地下式の窖窯であることは間違いない。また、このうちSR2・4・7からは、両側壁の外側で側壁に沿うような状態で続く小柱穴群を検出している。これらの小柱穴群は径5～10cmほどで、20～50cm間隔で連続しており、窯体を中心にしてほぼ対称の位置に存在するものもみられることから、天井部を構築する際に、その骨組として差し込んだ構架材の痕跡と推定される。また、スサ入りの粘土塊は認められないもののSR3・6窯跡でも同様の小柱穴群を検出しており、これらもやはり半地下式の窖窯と考えられる。

燃焼部と焼成部の境についてみると、両者の境にくびれをもつSR7以外はいずれも平面的には不明瞭である。これを縦断面で見ると、SR1～4・6・7では燃焼部と焼成部

	全長	燃焼部 長さ×最大幅	焼成部 長さ×幅	煙出し部 長さ	焼成部 底面傾斜	方向
SR1瓦窯跡	約4m	1m以上×約0.9m	約2.85m×約0.7m	約15cm	約24度	N15°E
SR2瓦窯跡	5m以上	約1.5m×約0.8m	3.5m以上×約0.6m	不明	約21度	N13°E
SR3瓦窯跡	4.8m以上	約1.7m×約0.7m	3.1m以上×約0.7m	不明	約18度	N27°E
SR4瓦窯跡	4.6m以上	約1.2m×約0.8m	3.4m以上×約0.8m	不明	約23度	N29°E
SR5瓦窯跡	2.2m以上	0.3m以上×0.4m以上	1.0m以上×0.5m以上	不明	約18度	N25°E
SR6瓦窯跡	2.3m以上	0.6m以上×0.6m以上	1.8m以上×約0.7m	不明	約21度	N34°E
SR7瓦窯跡	約5.2m	約1.3m×約0.9m	約3.8m×約0.8m	約10cm	約24度	N23°E

(方位は磁北)

表2 瓦窯跡の規模

の境は底面の傾斜の違いによって区別することができる。しかし、各窯跡にみられる傾斜の違いはわずかであり、燃焼部と焼成部の境に明瞭な階が形成されているものはない。

焼成部の底面は一定の傾斜で煙出し部との境まで続いており、無段である。焼成部底面の傾斜は18～26°で、ほぼ丘陵斜面の傾斜に沿っている。

また燃焼部における底面の構築方法をみると、SR1・6およびSR7の当初の底面の場合には掘り込んだ地山の面をそのまま底面としているのに対して、SR2～4の場合には地山を掘り込んだ後に一部を埋め戻して底面を作りだしているといった違いが認められる。これを前節の分布上の組み合わせでみると、SR1とSR7、SR2とSR3がそれぞれ1単位をなすとみられるものであることから、こういった違いは前項で推定した組み合わせの妥当性を裏付けるものと思われる。

以上により、検出した窯跡はいずれも多少ふくらみをもつ燃焼部・溝状の焼成部・煙出し部からなる、全長4～5m・幅0.7m前後の比較的小規模な半地下式の無階無段窖窯と推定される。このように燃焼部の構築方法の点では若干の違いはあるものの、すべての窯跡がきわめて共通する規模・構造をもつことは本窯跡のまとまりを示すものといえよう。

(3) 瓦窯の年代

遺物はSR1・2・7窯跡から出土している。出土した遺物には多量の瓦(軒平瓦・平瓦・丸瓦)とごく少量の土器(須恵器・土師器)がみられる。遺物のうち直接遺構に関わるものとしては、SR2で廃絶前の層(第10層～第15層)から出土した少量の平瓦・丸瓦があるだけで、他はいずれも各窯跡の堆積層から出土したものである。以下では瓦の出土量が多く、土器の供伴もみられるSR7を中心として年代を検討してゆく。

SR7窯跡からは多量の瓦と少量の土器が出土している。

瓦では軒平瓦が1点、平瓦が192点、丸瓦が24点出土している。軒平瓦は瓦当面を欠く小破片のため特徴はとらえられない。平瓦はすべて粘土板1枚作りのもので、A～Dの4類に分類された。このなかでは凹面布目・凸面縄叩き目のA類と凹面軽いナデ調整・凸面つぶれ気味の縄叩き目のB類が大部分を占めている。丸瓦はすべて粘土紐巻き作りのものである。このような特徴をもつ平瓦と丸瓦の組み合わせからなる瓦群は、多賀城跡では第II期以降にみられるものである(註1)。したがって平瓦・丸瓦の特徴からみると、SR7の年代は多賀城で第II期の造営が行われた8世紀中頃以降となる。

土器では須恵器杯1個体分と杯口縁部破片3点、土師器甕口縁部破片1個体分が出土している。

須恵器の杯(第13図1)は、底部の切り離しが回転糸切りで無調整のものである。回転糸切り技法のものが一定量出現するようになるのは、現在のところ8世紀後半頃とみられる

志波姫町糠塚遺跡第1群土器(註2)からと考えられる。また、器形的な特徴でみると、口径約13cm、底径約7cm、器高約4cmで、体部は多少丸みを帯びて外傾している。口径に対する底径の比は0.54となり、底径は比較的大きい。これと類似する器形の須恵器杯は志波姫町糠塚遺跡第1号住居跡や、8世紀末頃から9世紀初頭を中心とした時期と考えられている互理町宮前遺跡第20号住居跡(註3)、8世紀末頃の築館町伊治城跡のS I 04を初めとする住居跡からも出土している。したがって、SR7から出土した須恵器杯の年代は8世紀後半以降で、降っても9世紀前半頃までのうちにはおさまるものとみられる。

また、土師器の甕(第13図2)は、ロクロ調整で、口縁部が外傾し、胴部外面にヘラケズリ調整、内面にヘラナデ調整がみられるものである。ロクロ調整の甕はやはり8世紀末頃の伊治城跡出土の土器群以降に出現することが知られている。

以上により、SR7出土遺物の年代は、限定できる資料が須恵器杯のみではあるが、8世紀後半～9世紀前半頃と推定される。

これらの遺物の出土層位をみると、平瓦A類が焼成部の底面上に堆積した暗褐色シルト層(第26層)から、軒平瓦・平瓦A～D類・丸瓦、須恵器杯、土師器甕が遺構の項で述べたように最終焼成後瓦を取り出す際に人為的に形成されたとみられる第1～22層から出土している。第26層、第1～22層ともに最終焼成直後に形成された層とみられることから、これらの遺物はほぼ窯跡の年代を示すと考えられ、やはり8世紀後半～9世紀前半頃とみられる。また、出土遺物のうち土師器甕では還元されて灰色に変色した破片と褐色の破片が接合しており、これは甕の破片の一部が窯の中に紛れ込んで2次的な加熱を受けたためと考えられる。したがって、土師器の甕の年代は窯の操業年代の一端を示していることになり、本瓦窯は少なくとも8世紀末以降には操業されていたことがわかる。

他の窯跡についてみると、SR1とSR2からはSR7と同じ特徴をもつ瓦が出土していることからSR7とほぼ同時期とみられる。SR2の場合は窯廃絶前の層にも瓦が含まれている。

SR3～6からは遺物が出土しておらず、直接年代を与えることはできないが、他の窯跡との重複関係がみられないこと、これらも他と同様に2基1組の単位で配置されていること、規模・構造に他との強い共通性がみられることなどから、やはり同時期の窯跡群とするのが妥当と考えられる。

以上の検討により、検出された瓦窯跡はいずれも8世紀後半～9世紀前半頃の一連の窯跡群と推定され、その操業時期の一端は8世紀末以降にかかるものと考えられる。

ところで、東北地方における瓦窯の構造の変遷では、地下式窖窯から半地下式窖窯への移行は8世紀の中頃を境として起こったとされている(註4)。本瓦窯跡群の窯がいずれも

半地下式の竈窯であることからすれば、上述の推定年代はこういった瓦窯の変遷とも合うことになる。

(4) 瓦の特徴とその供給関係

本瓦窯で生産された瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、隅切瓦がある。まず、これらの出土数、出土層位およびその特徴をまとめておくとつぎのようになる。

軒丸瓦は1点あり、瓦当面周縁部の小破片(第25図1)が第1層から出土している。これは沈線で区画された複弁状の花弁に、やはり沈線で区画された棒状の子葉が表現されたもので、周縁が低く、周縁と間弁が接続しているなどの特徴をもつ。

軒平瓦も1点で、瓦当部を欠く顎部の破片(第14図7)がSR17窯跡から出土している。

丸瓦は154点あり、SR1・2・3窯跡、SK9・11土壇、第1層から出土している。いずれも破片資料で、確認できるものは粘土紐巻き作りで有段のものに限られ、凹面に布目、凸面にはロクロ調整が加えられた縄叩き目がみられる。

平瓦は完形品4点を含め854点あり、SR1・2・3窯跡、SK8、第1層から出土している。いずれも粘土板1枚作りとみられ、凹面と凸面の痕跡によりA～Dの4類に分類される。A類は凹面に重複しない布目、凸面に縄叩き目がみられるもので、完形品1点と破片121点がある。B類は凹面にナデ調整の施された布目、凸面につぶれた状態の縄叩き目がみられるもので、完形品3点と破片369点がある。C類は凹面にナデ調整の施された布目、凸面につぶれた状態の平行叩き目がみられるもので、破片が3点ある。D類は凸面の縄叩き目、凹面の布目ともにナデ調整によりすり消されているもので、破片が1点ある。

隅切瓦は1点あり、平瓦B類と同じ特徴のものが第1層から出土している。

以上のほかに、本地区付近で樹枝文軒丸瓦(第27図1)が1点採集されており、次項で詳述するようにこれも本瓦窯で生産されたものと推測される。この軒丸瓦の文様は、1本の幹から左右に分かれ、先端に「三角文」をもつ枝を上下に2対配し、その中間にもさらに1対の枝を表現したもので、周縁がほとんど削り取られている。

ところで、瓦の供給関係の検討にあたっては、生産地と消費地の間で同じ範で作られた軒丸瓦・軒平瓦や、全く同じ特徴の瓦の存在をどう識別するかが大きな問題となる。ところが本瓦窯跡では、軒平瓦が瓦当面を欠き、平瓦、丸瓦の叩き原体なども特徴のとらえ難いものである。したがって、ここでは軒平瓦・平瓦・丸瓦についての検討は保留し、軒丸瓦についてのみ供給関係を検討することにしたい。

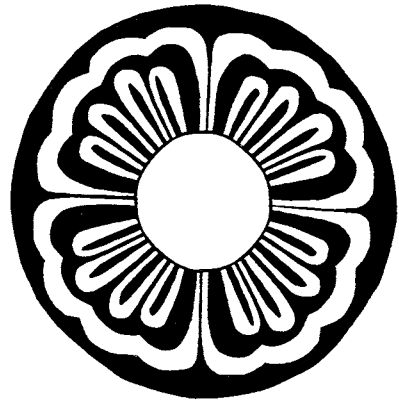
第1層から出土した軒丸瓦は小破片のため全体の文様構成は明らかでないが、残存部の複弁状の花弁や棒状の子葉などの特徴は、古川市伏見廃寺跡で採集されF 007-B(呼称不明)と分類されている軒丸瓦(註5)ときわめて良く似ており、同範の可能性が高い。両

遺跡の瓦を総合すると、この軒丸瓦の文様は、周囲を沈線で区画された複弁状の花弁が2個連結したような形の弁をもつ四弁蓮花文に復元でき、複弁状の花弁にはやはり沈線で区画された棒状の細長い子葉が表現されている。また、間弁は低い周縁に接続している(第26図)。

採集された樹枝文軒丸瓦と同範とみられる軒丸瓦は前述の伏見廃寺跡と中新田町菜切谷廃寺跡(註6)から出土している。

以上により、軒丸瓦でみると本瓦窯で生産された瓦は、名生館遺跡で検出された官衙の付属寺院と推定される伏見廃寺と、菜切谷廃寺に供給されていたとみられる。

なお、樹枝文軒丸瓦は色麻町一の関遺跡(註7)からも出土しており、本瓦窯跡の樹枝文軒丸瓦と同じ範を使用しているとみられるが、幹から分かれた枝の数は上下2対のみとなっている。これは本瓦窯跡の樹枝文軒丸瓦が、一の関遺跡出土の樹枝文軒丸瓦に用いられた範を改変し、上下の枝の中間に新たに1対の枝を加えた範で作られたためと推定される。また、一の関遺跡と本瓦窯跡の樹枝文軒丸瓦では、前者が樹枝の先端方向に丸瓦を接合しているのに対し、後者ではこれと逆に接合していること、前者が瓦当部に周縁をもつものに対し、後者ではほとんど削り取っていることなどの違いもみられる。一の関遺跡から出土したような、採集された樹枝文軒丸瓦よりも1段階古い範による樹枝文軒丸瓦が本瓦窯で生産されていたかどうかは明らかではない。



第26図 合戦原瓦窯跡出土軒丸瓦の復元図

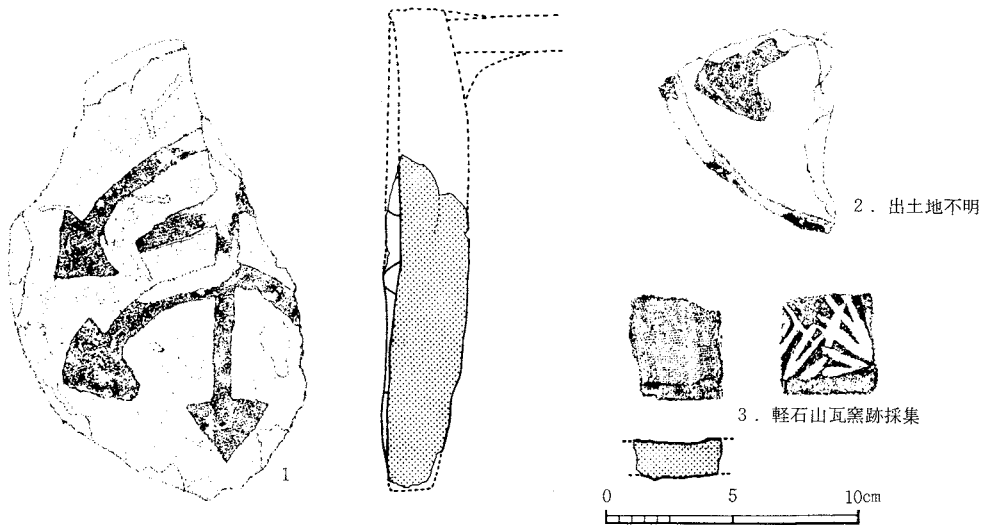
- 註1 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡一政庁跡本文編』1982
- 註2 小井川和夫・手塚均「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査報告書第53集』1978 pp.44~198
- 註3 丹羽茂「宮前遺跡」『宮城県文化財発掘調査報告書第96集』1983 pp.71~213
- 註4 進藤秋輝「東北地方の瓦窯」『仏教芸術』148号 1983 pp.11~23
- 註5 佐々木茂楨「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第56巻第3号 1971 pp.23~60
- 註6 伊東信雄『菜切谷廃寺跡』宮城県文化財調査報告書第2集 1956
- 註7 宮城県教育委員会「一の関遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)』1977 pp.68~101

合戦原瓦窯跡採集の樹枝文軒丸瓦

遠藤 智 一

昭和30(1955)年12月、筆者は岩出山町周辺地域の遺跡の分布調査をしていたが、名生城跡である古川市大崎字名生小館の館野氏宅裏の畑にある柿の木の根元に樹枝文軒丸瓦を含む10片ほどの瓦片が落ちているのを見つけ、館野氏の許可を得て採集した。

昭和37(1962)年頃、東北大学文学部の伊東信雄教授にその樹枝文軒丸瓦を見て頂いたところ、「これほどこかでみたことのある瓦だ。昭和初期に内藤政恒教授が撮影した岩出山町細峰出土の瓦に酷似しているように思うが、確かに名生城跡から出土したのか」と念を押された。そこで、このことを確認するため、再び名生の館野氏宅を訪問し、館野みの氏(故人、岩出山町南沢字中里出身)から話を聞いた。同氏によるとこの瓦は、昭和の初め頃に細峰部落の区長であった佐々木双太郎氏(故人、みの氏の実兄)が名生城跡を訪問したある著名人(皇族か)に見せようと持参したもので、そのまま館野氏宅におかれ、後に柿の木の根元に捨てられたということであった。一方、東北帝国大学の内藤政恒教授が撮影した写真は佐々木茂楨氏が複写を所蔵しており、同氏のご好意により今回の合戦原瓦窯跡調査の際に筆者の持つ実物との照合を行ったところ、やはり同一の瓦であることが判明した。ま



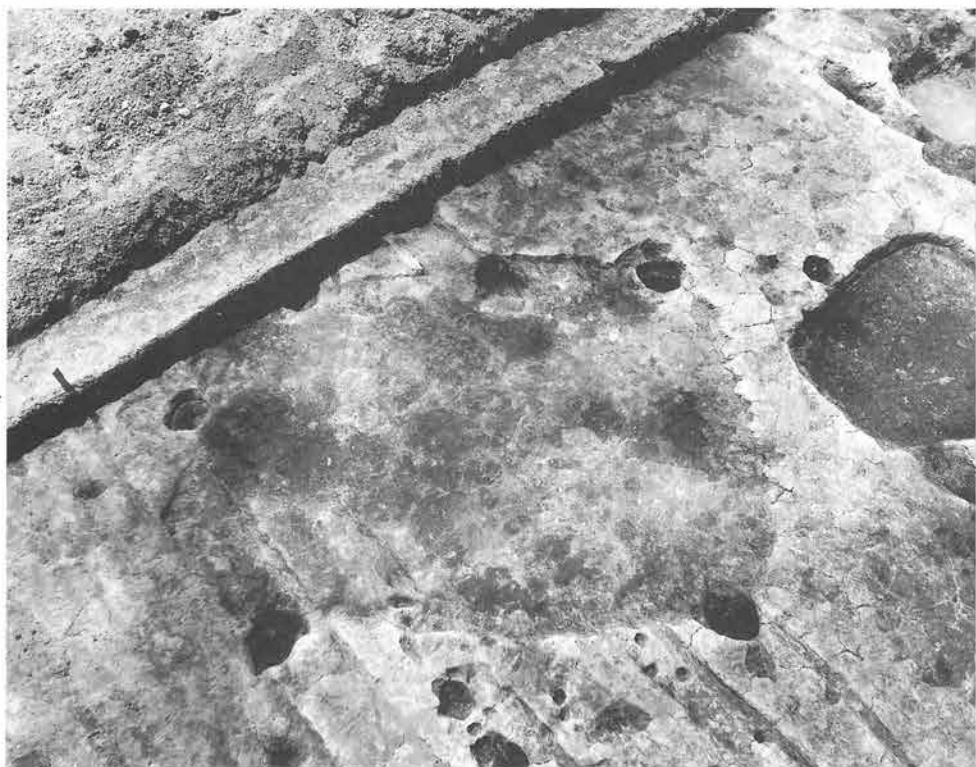
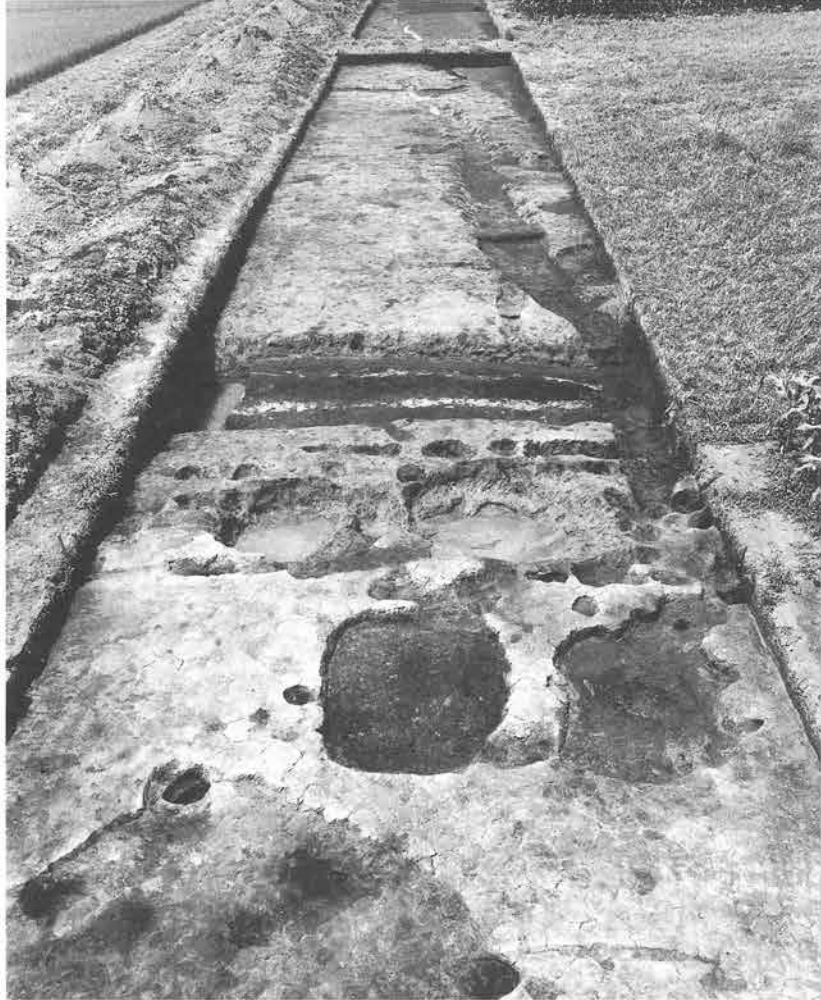
第27図 合戦原瓦窯跡付近採集の瓦・遠藤智一氏所蔵

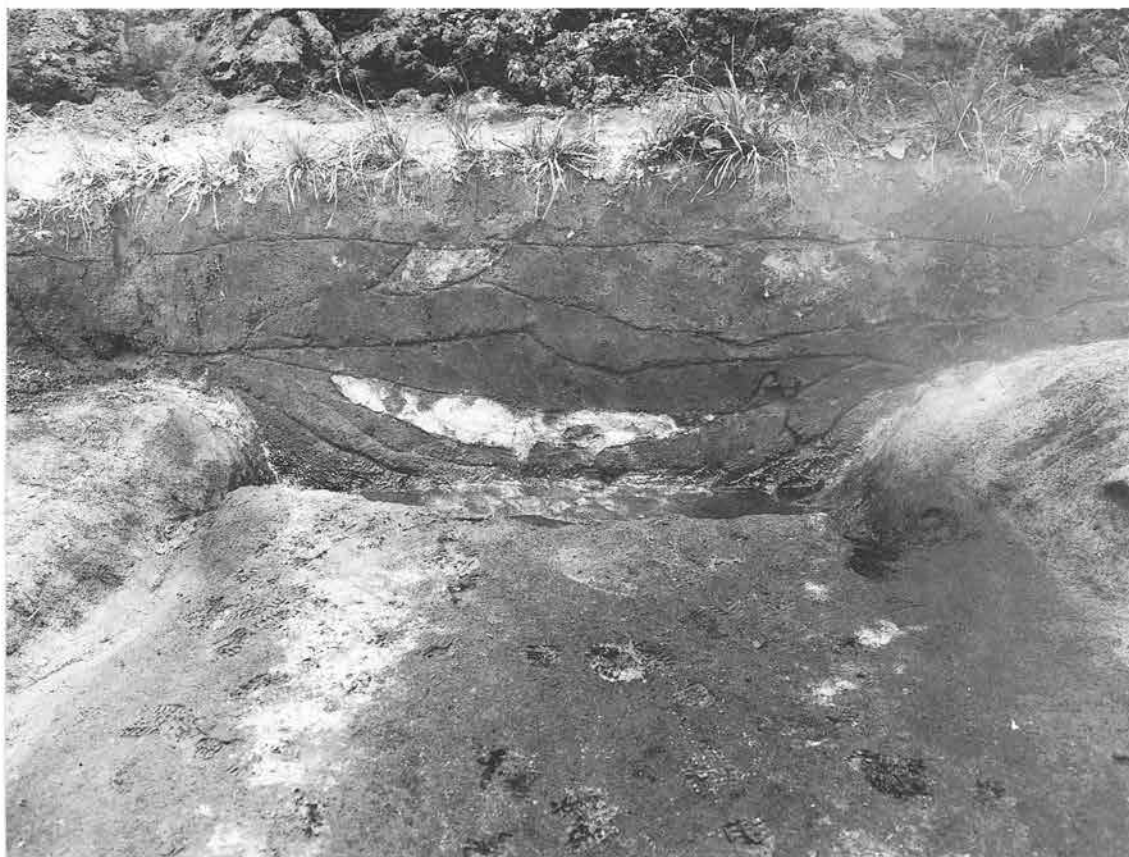
た、その写真には内藤教授の記した以下の注記があった。

- 「・細峰出土ノ瓦(南沢附近)
- ・陸前国玉造郡岩出山町字細峰五十五番地附近
- ・暗褐色ヲ呈シ、質ハ硬キ方ナリ。
筒部ノ附着シオル附近ノ形状ヨリシテ、上図ノ如キ位置ナリシト想ハル。
厚サ約八分ナリ。
- ・昭和九年十二月十一日撮ス
- ・千葉林治氏蔵

したがって、この樹枝文軒丸瓦が細峰55番地に所在する合戦原瓦窯跡群で採集されたことは間違いない。そして、昭和9(1934)年には千葉氏が保管しており(この時点で内藤氏が撮影)、それを佐々木氏が譲り受けたが、名生の館野氏宅裏に捨てられてしまい、筆者により再び採集されるという経緯を経たということになる。なお、名生城跡で筆者がこの瓦と共に採集した瓦片の中にはもう1点樹枝文軒丸瓦の小破片が含まれており(図版17-1)、やはり細峰から採集された可能性もあるが、確認できない。

図版Ⅰ 名生館遺跡
上：北区全景(東から)
下：北区
S I 387住居跡





図版2 名生館遺跡 上：北区S D 382溝(南から)

下：北区S D 382溝断面図(南から)

図版3 名生館遺跡

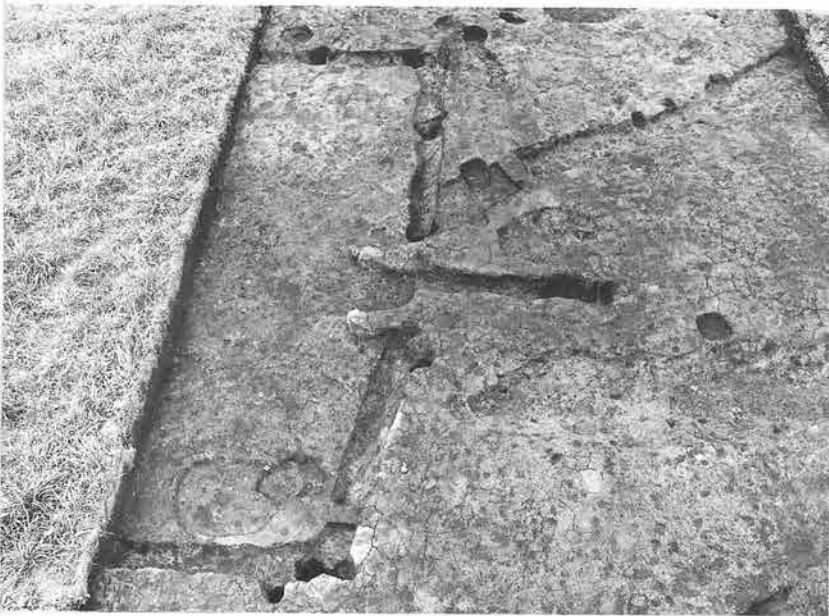
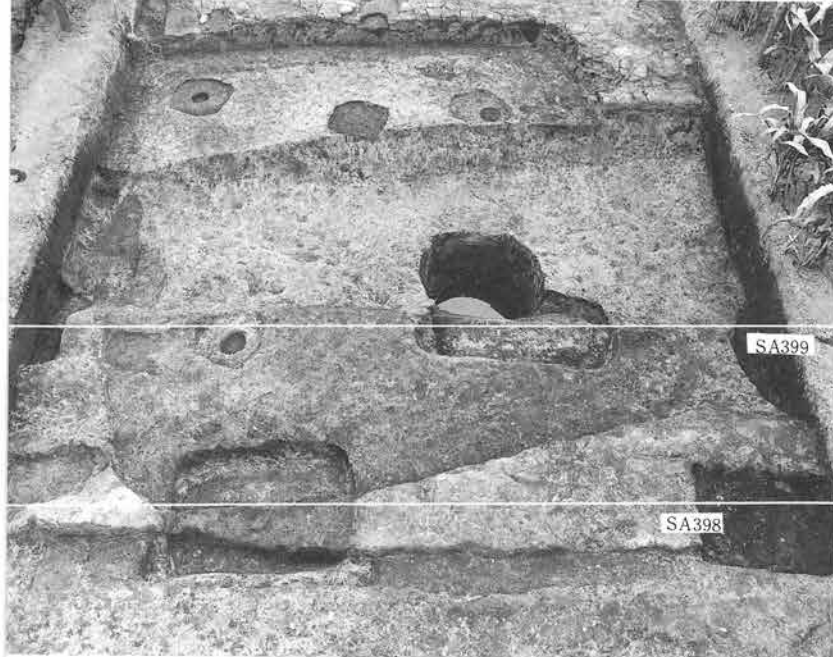
上：中区全景(東から)

下：中区

S X 419柱穴状掘り方、

S E 394井戸跡





図版 4 名生館遺跡

上：中区

S A 398・399柱列跡

S I 395住居跡、S D 392溝

中：中区

S I 396住居跡

下：中区

S D 388溝

図版 5 名生館遺跡
上：南区全景(東から)
下：南区全景(西から)





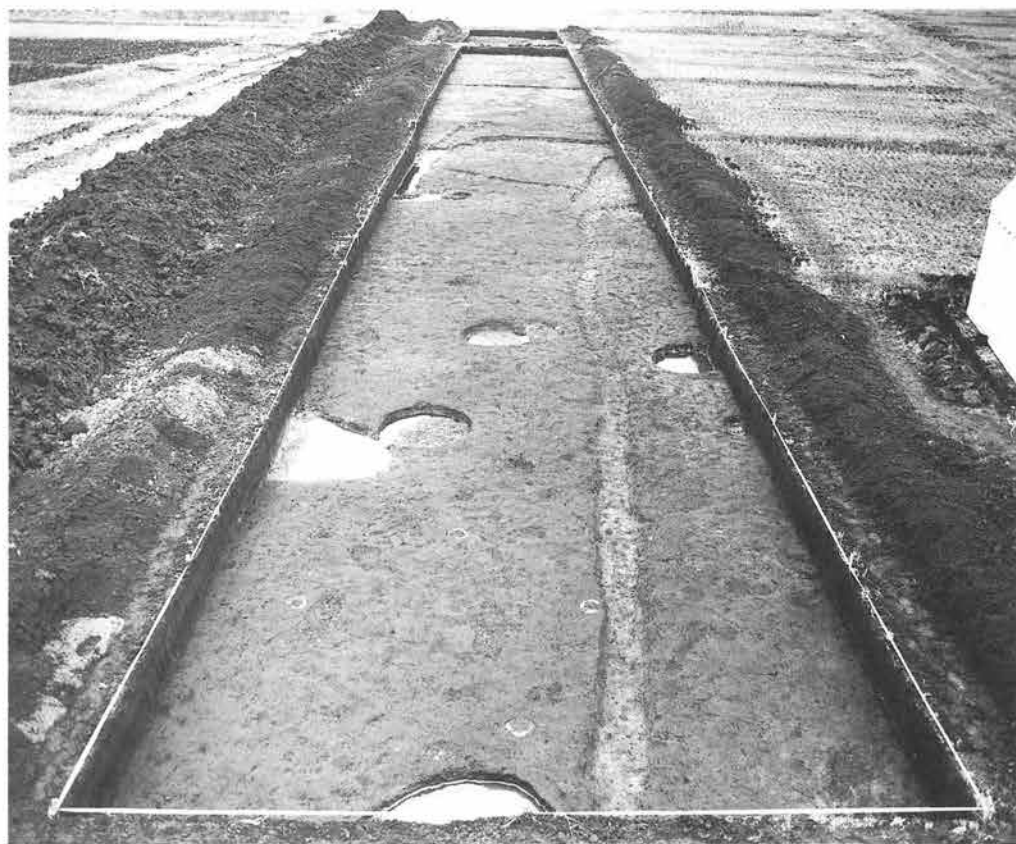
図版6 名生館遺跡 上：南区(西から) S I 434・433住居跡、S D 427溝
下：南区(東から) S I 431住居跡、S D 427溝



図版 7 名生館遺跡

上：西区全景(西から)

下：西区全景(東から)





1



2



3



4a



4b



5



6

図版 8 名生館遺跡

- 1. 須恵器杯(S I 396・第4図2)
- 2. 土師器甕(S I 434B・第6図8)
- 3. 土師器杯(S I 434B・第6図1)
- 4. 土師器杯(S I 433・第8図2)
- 5. 土師器甕(S I 433・第8図5)
- 6. 土製支脚(S I 431)



1



5



2



6



3



7



4

図版9 名生館遺跡

1. 土師器杯(S K430・第9図2)
2. 土恵器杯(S K430・第9図6)
3. 須師器杯(S K430・第9図1)
4. 土師器杯(S K430・第9図3)
5. 土師器甕(S K430・第9図7)
6. 土師器杯(S K430・第9図4)
7. 土師器甕(S K430)

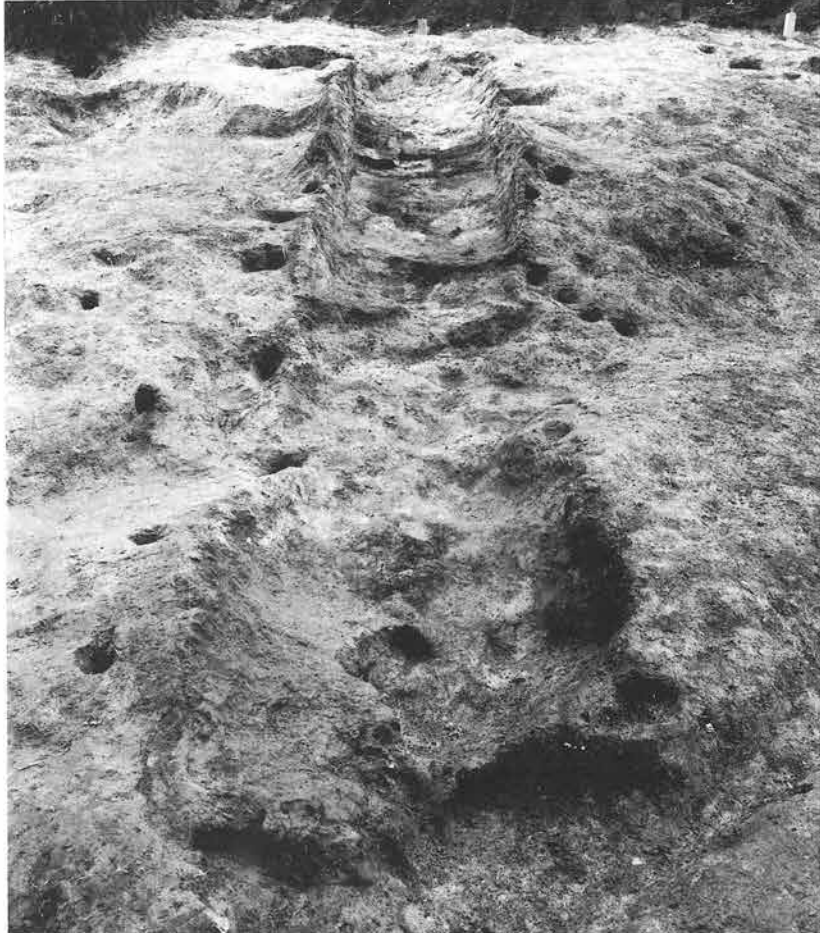


図版10 合戦原瓦窯跡

上：調査区全景(東から)

中：調査区全景(東から)

下：調査区全景(西から)



図版II 合戦原瓦窯跡

上：SR7窯跡

下：SR1窯跡



図版12 合戦原瓦窯跡

上：SR2窯跡

中：SR2窯跡、構架材痕跡

下：SR2窯跡、燃烧部断面図

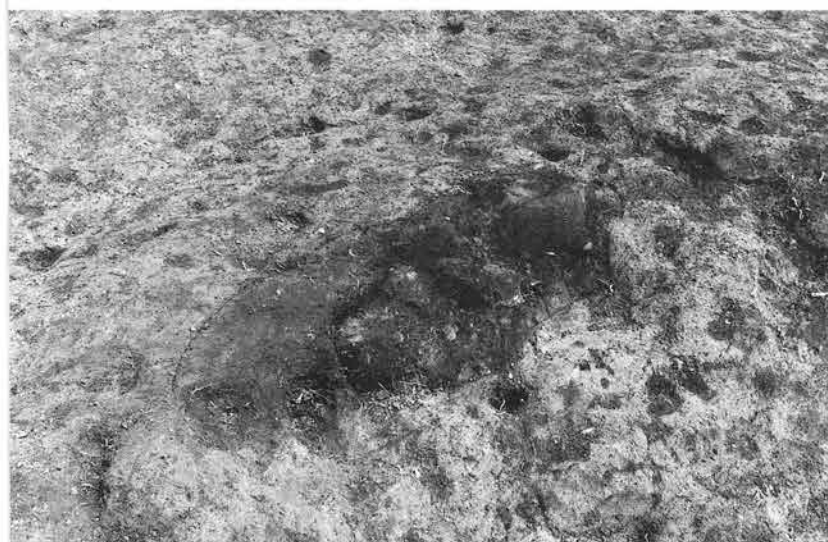




図版13 合戦原瓦窯跡

上：SR3窯跡

下：SR4窯跡



図版14 合戦原瓦窯跡

上：SR5・6窯跡

中：SK8土壇跡

下：SK11土壇跡



図版15 合戦原瓦窯跡

1. 軒丸瓦(第25図1・第1層出土)
2. 平瓦A類(第14図5・S R 7窯跡出土)
3. 平瓦B類(S R 7窯跡出土)

1



2



3



1a



1b



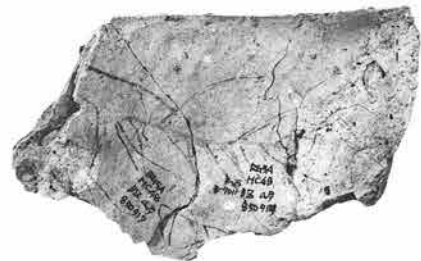
2a



2b



3a



3b

図版16 合戦原瓦窯跡 1. 平瓦B類(第14図1・SR7出土) 2. 平瓦C類(第14図3・SR7出土)
3. 平瓦D類(第14図4・SR7出土)



1



2



3



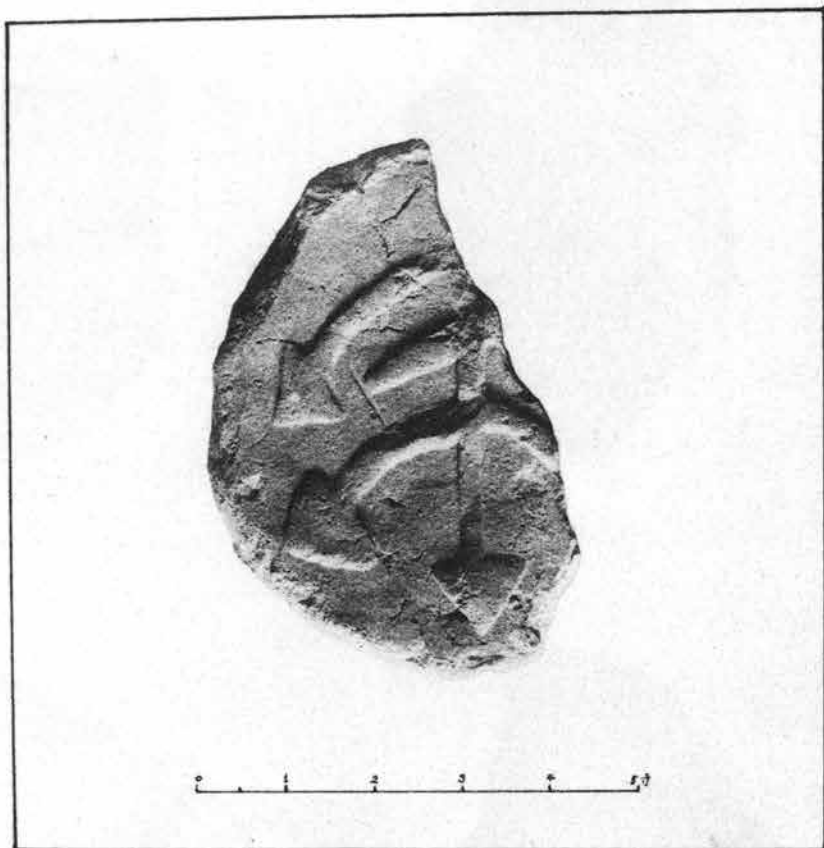
4



5

図版17 合戦原瓦窯跡・その他

1. 隅切瓦(第25図6・第1層出土)
2. 凹型台圧痕(第17図・SR2窯跡出土)
3. 合戦原瓦窯跡付近採集(第26図1)
4. 出土地不明(第26図2)
5. 軽石山瓦窯跡採集(第26図3)



細峰出土古瓦
(南澤附近)

陸前国玉造郡岩出山町
字細峰五十五番地附近

暗褐色ヲ呈シ、質、硬キ
方アリ。
筒部、附着シテハ附近ノ
形状ナルヲ上図ノ如ク
位置ナリト想ハル。
厚サ約八分アリ。

昭和九年十二月十一日撮ス

千葉林治氏藏

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第11冊

名生館遺跡 VI

昭和61年3月25日印刷
昭和61年3月31日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前133
TEL (02236) 8-0101
印刷所 小泉印刷株式会社
